おれは誰だ？

ボブ・ショウ　嶺常生訳

サンリオSF文庫

57–C

おれは誰だ？

ボブ・ショウ

サンリオSF文庫

¥340

Bob Shaw（ボブ・ショウ）
1931年、アイルランドのベルファストで生まれる。技術学校を卒業後、7年間、アイルランド、イングランド、カナダのデザイン・オフィスに勤務。その後、ジャーナリストに転向。8歳の時に初めてSFを読んで以来の熱心なファンであり、また熱烈なファンジン活動を行なっていた。19歳の時にすでに短篇をニューヨーク・ポストなどに発表していたが、その後10年近く創作から離れていた。本格的なデビュー作は『夜歩く』(1967年)。以後、年一作長篇を発表し、1976年には*『オービッツヴィル』で英国SF作家協会賞を受賞するなど、名実ともに英国を代表するSF作家の一人である。作品は他に、*『二重時間者』*『星々の渦』などがある。
（＊印はサンリオSF文庫刊行予定）

カバー＝加藤直之

ウォレンは、罪と恥辱だらけの過去の記憶をすべて消されて、ひきかえに長い軍務契約を結んだ。入隊した宇宙軍団203連隊の仲間たちは、記憶の一部しか失っていないので彼を驚嘆し畏怖するあまり「おめえは、ほんまもんの化け物だな」と言ったりした。
さて、彼ら203連隊は母なる地球(テラ)のために宇宙船に乗って異邦の惑星を転戦していった。ロボット兵との銃撃戦。無謀な突撃を指揮するハンディ大佐、爆発する毒きのこ、生きたまま人間を消化する毛布のような形の〈とびかかりじゅうたん〉……死線をさまよう戦闘の連続また連続。やがてウォレンは、失われた記憶と身もとを捜して隊を脱走し、またもや犯罪を重ねていく。手掛りはプラスチックの青あま蛙だけ。そして、彼を追跡するテレパシー能力と、金属的な輝きの裸体をもった不死身のオスカー。こうして失われた自分を求めて過去を旅していくユリシーズ、ウォレンは、そこでどんな自分と遭遇するのか?

GC-19
株式会社サンリオ

定価340円
0197-81530-2831

ボブ・ショウ

既刊

メデューサの子ら

菊地秀行訳　¥340

去りにし日々、今ひとたびの幻

蒼馬一彰訳　¥340

続刊

眩暈

二重時間者

オービッツヴィル

星々の渦

サンリオSF文庫

おれは誰だ?

ボブ・ショウ

嶺常生訳

57-C

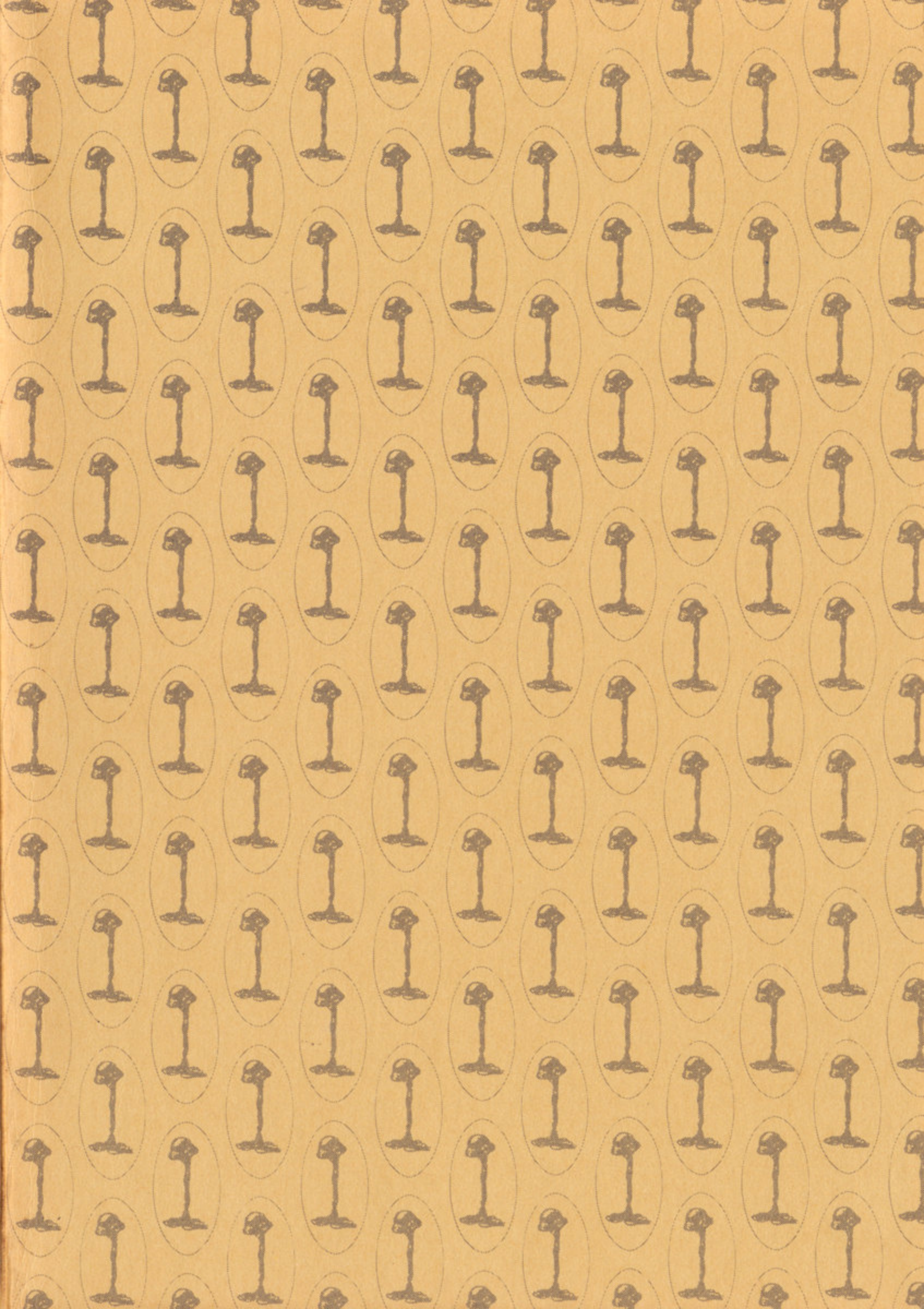
おれは誰だ?

ボブ・ショウ

サンリオSF文庫

サンリオSF文庫

おれは誰だ?

ボブ・ショウ

嶺常生訳

おれは誰だ？

1

「気分はよくなりまして」美人の技術看護婦がピースにほほえみかけ、かがみこんで額の端子をはずした。女の髪の毛は銅色で、指には薔薇の花びらのようにみごとなマニキュアをしている。
「いかがなんですか」
「快調です」とピースは深く考えもせずに反射的に答えたが、なるほど、身体の調子はそのとおりだった。ほっとした安堵の気持が大脳から下のほうへとおしやられ、緊張が身体からとろけ出して行くのに気づいたのだ。体の外形にうまく合わせてある椅子に寛いだピースは、前途洋々とした気分で、あたりがぴかぴかに輝いている手術室を見まわした。「文句なしです」
「よかったですね」女は、大きなメダル状の端子とそれにつながるリード線をはずしてずんぐりした機械の上に置くと、音をたてない台車ごと、その機械のわきに押しやった。「あなたのような人たちをお助けしては、これでけっこう自分なりの満足をえているんですわ」
「そのようですね、たしかに」
「そう、一種の……」女ははにかみながらまた微笑を浮かべた。「喜びの言葉さえ聞ければ充分なんです」

「そうですとも」ピースは幸せそうにちょっとその女を見つめたが、そのときふと疑念が頭をかすめたので、「ところで」と切りだした。「はっきり言って、ぼくのためにどんなことをしてくれたんですか」
「なんて失礼な」看護婦は怒りで顔色を青くし、ぴしゃりと言った。「三十秒もたってから、となんでもなく莫迦げた質問をしはじめるなんて。三十秒もかけてよ。その三十秒のあいだに、わたしが心の中でよかった、よかったと満足した気持をどれくらいたっぷり味わっていたかわかる」
「ぼくは……ちょっと待っ……」女が態度を急にかえたのに度肝を抜かれたピースは、話の継穂を失った。「ぼくはただ訊いて……」
「そうでしょう――あなたはただ訊いてみただけ。あなたを幸せにしようと贈り物をしてあげたのにそれが受け取れず、ありがたくも思わなかったのね。どうなっているかを自分で調べてみるべきだったのよ」
「わかりませんね」とピースは逆らった。「ここでいったいなにが行なわれているのか」
「さあ早く、この坊主――出ていくのよ」女はドアのほうへとんで行き、その戸を荒々しく開けて、隣室の者に話しかけた。「兵卒ピースの準備は完了しました」
「どこかに間違いがあるんじゃないかな」と立ち上がりながらピースは言った。「ぼくは兵卒なんかじゃないし、軍隊にだって……」
「たしかだって言うの」女は不愉快そうに言ってからピースを隣の部屋に押しこみ、ドアを乱暴に締めた。戸惑いながらもピースが四角いそのオフィスを隈なく見わたすと、壁には軍隊に関係した品々や、濃紺の大きな旗が飾られ、その旗には、**宇宙軍団**――二〇三連隊という文字が銀色

に刺繍されていた。
オフィスにはデスクが一つだけ置いてあり、その前に宇宙軍団大佐の軍服を着た、ずんぐりした恰好の男が腰かけていた。青いじゅうたんには宇宙軍団の紋章が浮きあがっていたが、部屋の中に置かれたさまざまな事務機器にも、鑑賞用の木が植えられた鉢にも、同様な紋章が型刷りされるか、彫りこまれるかしていた。黙ったまま首をふって挨拶をおくった大佐は、手でピースを椅子に招いたが、その椅子の背やクッションのきれにも〝宇宙軍団〟の文字が織りこまれていた。
「ここはどういった所なんですか」とピースは尋ねた。
「きみは」将校が部屋のあちこちを見やった。「YMCAの本部だとでも信じておるのかね」
この皮肉は何光年もピントがはずれていて、ピースにはぴんとこなかった。「隣室の女性はぼくのことを兵卒と呼んだんです」ピースは不安気に言った。
「フロレンスのことなど気にせんほうがいい――あれにはちょっと刺があるんだ。仕事からくるいらいらでな」
ピースはほっと安堵のため息をついた。「ちょっとのあいだ、ぼくがなにかへまをやらかしたのかと思いました」
「いや、きみはなにもへまなんかしちゃおらん、これっぽっちもだ」このずんぐりした男は、在庫調べでもするかのように注意ぶかく自分の指を一本一本調べはじめた。「わしはウィジェット大佐――宇宙軍団のために当地で募兵をしておる将校だ」
「ぼくがなにかへまをしたのかと思ったと申しあげたとき」とピースは口にしたが、心の中では警報ベルが音高く鳴っていた。「自分が宇宙軍団に参加しようとしているんじゃないかという考

えが浮かんだんです」
　ウィジェットは顔をさげて両手のなかに埋め、肩をすこしふるわせた。およそ一分ほどそんな調子だったので、ピースはそのあいだ、相手の頭のてっぺんを見つめていたが、だんだんになにか興味をそそられていった。ウィジェットは起きなおったが、心を抑制するのに懸命な努力をはらっているのが読みとれた。
「ウォレン君」とウィジェットは言った。「きみをウォレンと呼んでもよいかな」
「それがぼくの名前です」とピースは特に気にもとめずに答えた。
「ありがとう、ウォレン君。軍団に入っているという考えは気にいったかね」
　ひとを莫迦にする気かとピースは大声をあげた。「ご冗談でしょ。軍団のことは洗いざらい聞いていますーー銀河じゅうを旅してまわったり銃撃をうけたり、火に焼かれたかとおもうと凍えあがらされたり、さては怪獣に食われたり……」ピースは口をつぐんだ。なにか空恐ろしいことが起こったにちがいないという疑惑が、確実なことなんだとする方向に固まっていった。「なんでぼくが、軍団に入隊するなんて気違いじみたことをするものですか」
「考えられないことかね」
「もちろんですとも」
「そこだ、きみ」ウィジェットは勝ち誇ったように言った。「そこだよ」
「大佐。なんのことを言ってらっしゃるんです」
「こんなふうに言ったらどうかな、ウォレン君」使いこまれた灰皿に一方の肘をつっこんでいるのにも気づかずにウィジェットは、デスクごしに体をのりだしてピースを凝視した。「昔をふり

返ってみたまえ――三百年も四百年も前のことだ――男たちはなぜフランスの外人部隊に入隊したのかね」
「あなたとゲームを楽しもうなどとは思っちゃいません、大佐」
「なぜ皆は入隊したのかね、ウォレン君」
「忘れるためです」ピースは苛立って言った。「だれでも知っていることです。しかしぼくは……」
「そして現在ではどうだ、ウォレン君、男たちはなぜ宇宙軍団に入隊するのかね」
「忘れるためです――ですが、ぼくには忘れたいものがなにもありません」
「きみは、なにもないどころじゃないぞ」ウィジェットは椅子にのけぞって、肝要な点をついたことに満足気だった。「きみは忘れてしまったのだ」
ピースはぽかんとした調子で言った。「そんな莫迦な。ぼくがなにを忘れたと言うんですか」
「そのことを話したら、なにもかもがめちゃくちゃになるさ」とウィジェットは当たりさわりのないように言った。「それにだ、三十分前にきみがここへやって来たときに、きみの心の中になにがあったかを知りようもないさ。わが軍団は個人の秘密を尊重しておるので、ひとを困らせるような質問などはせん――ただきみを機械にのせてだな……ピッピッ……それで全部消える」
「ピッピッですって」
「そう、ピッピッだ。重苦しい罪悪感や恥辱のお荷物がきみの心からひき抜かれるんだ」
「ぼくは……」記憶をたどってみたピースは、自分が募兵事務所に入っていった覚えが皆目ないのに気づいた。以前の生活の記憶が少しもないとわかったとき、ピースの心の中に狼狽の気持が

息苦しいまでに拡がった。数分前に隣の手術室で生みおとされ、あるいは薄い空気の中から魔術でよび出されたかのようであった。

「わたしになにをなさったんですか」とつぶやきながらピースは、ちょっとさわっただけで凹んでしまうたんぽぽの綿帽子ででもあるかのように自分の頭を指先でそっと押した。「なに一つ想い出せない。過去の人生はないんだ。子供のころもなかったんだ。なにもなかったんだ」

ウィジェットは驚いて眉をあげた。「そいつはただごとじゃないな。この機械はふつう前の日か、その前の日のことをまるまる抹消してしまうんだ――神経電気波でな――それで特定の記憶なら選んで取り出せるようになるんだが、なに一つ想い出せないとなるとちょっと。きみの場合はひどいケースだったにちがいない、ウォレン君。きみのしてきたことすべてが台なしになってしまったんだろう」

「おそろしい話だ」ピースは声がふるえるのを隠せなかった。「あの人の名前だって想い出せやしない――おふくろの名前さえ」

「そうすると、わしは気持がずっと楽になるな」と言ってウィジェットは背筋を伸ばし、肉づきのよい顔をひきしめたが、微笑するにつれて顔が輝いてきた。「すてきな好青年の人生を方向転換させなきゃならんときには、わしだって本当に心の中がかき乱されるんだ――すかっとした青年たちで、おそらくそれまでの生涯で一回きりしか過ちをおかしちゃいなかったんだろう――だがきみは違う。きみは悪そのものじゃなかったのかな、ウォレン君。

きみにとってはいいことなんだぞ、罪をおかした過去の記憶を消そう消そうと努力しながら厳しい軍隊生活を何年も送らなくてすむんだからな。そんな生活は、おそらくうまく行く訳がない。

きみにとってはいいことなんだぞ、記憶を電気的に抹消できる段階にまで人類が到達したことは。そのおかげでわが軍団がきみを迎え入れられるという訳だし……」

「うるさい！」ピースは大声をたてた。不安でもあったし、頭をなんとか平常の回転に戻すために、考えを集中できる静かな場所がほしいという気持が昂ったからでもあった。そこで立ち上がって言った。「ここからすぐに出て行かなきゃ」

「そうしたい気持はわかるがね」とウィジェットは陽気になって言った。「だが、それには差障りがあるぞ」

「なんですか、それは」

ウィジェットはうす青の紙を一枚取り上げた。「この契約書——これがきみを拘束して、三十年間、わが軍団で軍務に服させることになるのだ」

「そんなものでなにができるもんですか」ピースはせせら笑った。「署名しようなどとは思いませんからね」

「しかしきみはとっくに署名を済ませているんだ」とウィジェットは言った。「きみがあの機械にかけられる前にな」

「してはいません」ピースは頭をふって強調した。「いったい、ここでなにをでっちあげようというんです。自分じゃなにもおぼえてはいませんよ。でもわかっていることがひとつ。それは決して、金輪際、断じてこんなものには署名しなかったということなんで、だからあなたなんぞには……」ピースの声はだんだん弱々しいものになっていった。ウィジェットがデスクに組み込まれた操作盤のボタンを押すと、背後の壁にうっすらと映像が現われて動いているのが見えたから

だ。映ったのは背の高い若者で、顔色はピンクがかり、口は大きく、碧眼で、ブロンドの髪は流行に合わせて額のところを薄くしていた。はじめピースは自分のことだとはなかなか認めがたかったが、それも――画面の中では――自分が絶望にうちひしがれた滑稽な姿をしているためだとわかった。両の眼はどんよりと沈鬱そうにしており、口の両端はだらりと下がり、うなだれ、うちひしがれたその姿勢からは、心が想像もつかない重荷におしつぶされているのが読みとれた。

見つめていると画面に映ったピースのもうひとりの自分は、テーブルの椅子に腰をおとし、ペンを取り上げて、うす青の書類に署名したが、よくよく見ると、それはウィジェットがいま手にもっているものと同じ書類だった。技術看護婦のフロレンスが現われ、動物飼育係が元気のないチンパンジーの世話をするさまよろしく、ピースを案内して行った。壁から映像が消えた。

「自分の顔を見たろう」ウィジェットは口のまわりを撫でまわしながら、愉快そうにふん、ふんと鼻をならした。「いや、実に楽しいじゃないか。こういうことがあると、あとは丸一日、ご機嫌でいられるというものだ」

「その紙を見せてください」書類に手を伸ばしながらピースが言った。

「どうぞ」書類をデスク越しに手渡すときのウィジェットの眼には、期待をこめた異様な光が輝いていた。

「ありがとうございます」ピースはその契約書に目を通したが、それも自分が実際に署名したのかどうか、破れないプラスチックではなく普通の紙に印刷されたものかどうかを確認して安心するためだけだった。紙の一端を取り上げ、人差し指と拇指でことさらもっともらしくつまんだピースは、まさにそれを真っ二つに破ろうとした。

「破いちゃだめだ」とウィジェットが鋭い声をたてた。その声はあきらかに命令調だったが、さして心配するふうもなく、書類を取り戻そうというのでもなかった。ただ眼の輝きだけが前にもまして明るくなった。

ピースは鼻先でせせら笑って軽侮の念を示し、書類をひきちぎろうとした。だが、だれかに脳の表面を目の粗いタオルでごしごしこすられたような、苦痛と嫌悪の感覚が頭蓋いっぱいに拡がり——その上、指も動こうとしなかった。

ウィジェットがデスクの一点を指した。「その紙をここに置きたまえ」

ピースはかぶりをふったが、そのとたん、自分の右手が前へとんでいって、ウィジェットがさし示したとおりの場所に紙を置いた。自分の手が謀叛をはたらいたことに驚いたピースがその手を見つめていると、ウィジェットがまた口を切った。

「雄鶏のまねをしてみろ」

ピースはかぶりをふってはみたが、口は出せるかぎりの一番高い声で鳴き声をたてた。

「身ぶりもつけて」

ピースは頭をふり、肘をばたばたさせてオフィスじゅうを歩きまわった。

「もうよし」とウィジェットが命令を下した。

「すんでのところで、けっこうです、どうぞお引きとりくださいと言いそうになったぞ——だがおそらく農家の中庭で受けた印象がきみには強くなかったんだろう」

「大佐」弱々しげにピースは言った。「ここではあとなにをさせられるんですか」

「もうご免だというのかね、え」ウィジェットは肘に葉巻の灰が落ちているのに気づき、一分ち

かくそれを払いおとすのに手間をかけてから、空いている椅子を指さした。「そこに坐って、契約書を読みたまえ。第三条にはとくに注意してな。文章はすべてことさら単純な言葉で書いてあるから、精薄者だって理解できるというものだ。だがお望みなら遠慮なく訊いてくれて構わんよ」

ピースは椅子に腰をおとして契約書を取り上げた。タイプ印書からの不完全な複写だが、読んでみると、そこに書かれていたのはつぎのようなものだった。

宇宙軍団
三十年軍務契約（注＊）
志願兵用

第一条　私こと、地球市民であるウォレン・ピースは、一兵卒として三十年間（注＊）、宇宙軍団の軍務に服し、軍務に関する凡ゆる条件を受入れるものであることに合意する。

第二条　私は、本契約を自分からすすんで、強制されることなく結ぶものであり、その代償として、適切な資格を有する宇宙軍団軍医の行なう精神矯正——即ち電気記憶心像消去手術を受ける。

第三条　私はまた、有能な兵卒となるため、標準電気心理反応条件付けが行なわれることに合意する。

（署名）ウォレン・ピース
日付。西暦二三八六年十一月十日

注＊　ここに記載の三十という数字は、本契約締結から三十年後における宇宙軍団の求人状況により、四十（注＊＊）とも解釈される。
注＊＊　ここに記載の四十という数字は、その時における寿命調査で大丈夫とされた場合には、宇宙軍団最高指揮官の決定により、五十年または六十年、またはその他の数字にも解釈される。

ピースは檻に閉じこめられたように意気銷沈して、その契約書を下に置き、ぽつりと、「呪わしい」と言った。「中古車業者が考えつきそうなことだ」
ウィジェットが肩をすくめた。「署名したんだぞ」
「ぼくはなにを考えていたんだろう」
「きみときみの良心との間で戦いがあったんだ」ウィジェットがすまして言った。「問題は、きみがそれに署名したということだ」
「法廷には持ちだせないんだろうか」頭の中に残っている力をふりしぼって、ピースは刃向ってみた。「なぜって、この契約書には地球の年月も規定していないし、その上に欠けているのは……」
ウィジェットは肉づきのよい片手をあげた。「そんな下らない考え方はいっさい忘れることだな、ウォレン君――きみにはどんな法行為もとれないんだ」

「だれがそんなことを」
「第三条にそう書かれておる」
ピースは前こごみになって、該当の条文を読みなおしてみた。「なんですか、この『標準電気心理反応条件付け』というのは」
「そのことは訊くまでもあるまいと思っていたがね」丸い顔に敵意をふくんだ喜びが戻ってきた。ウィジェットは、襟のすぐ上で喉からつき出ている小さな塊りを叩いた。「これがなんだかわかるかね」
「包嚢の一種に見えますね。わたしは気にしてはいませんが」
「包嚢ではない。わしも気にしちゃおらん――というのは、宇宙軍団の将校はだれでもこれと同じものをつけておるからね」
ピースはあとずさった。「流行病ですか」
「すっとん狂なことを言ってはいかんよ、きみ」話を途切らせたウィジェットは、ふたたび顔に笑いを戻した。「これは、外科的に埋めこんだマーク・スリー指令強制器なのだ。わしの声にある種の倍音が加えられる――この倍音に対し、下士官以下の階級の全軍団兵が、なにひとつ考えもせずに絶対服従して反応するように条件づけられるのだ。意味がのみこめたかね」
「信じられません」あっけにとられてピースは息をのんだ。「軍団だからって、そこまでのことは許されないんじゃないですか」
ウィジェットはほっと息をついてから、自分の時計をみつめた。「雄鶏のまねをもう一度してくれんか――それに今度はぜひ、首の動きをまともにしてくれたまえ。さっきは、まるでひとこ

ぶ駱駝のようだったからな」
「断わります」椅子からはなれ、足を高くあげてオフィスを横切りながらピースは言い放ったが、肘はぱたぱたさせ、頭はみみずを探すようにあっちこっちと突き出していた。
ウィジェットは腕を組んで楽な姿勢になった。「もう充分だと思ったら知らせてくれ」
「あなたは部下に少しの自尊心も残そうとはしないのですか」雄鶏の鳴き声でピースは抗議を申しこんだ。ちょっと飛んでみようとしたあげくに、何本かのシリアこけももの木の中にはまりこんだ。
「自尊心が要るのかね。わしが率直に応待してやっているのは、きみにとっては幸せなんだ」ウィジェットの眼が無気味にまたたいた。「意味のないことは……」
「けっこうです、参りました」とピースは言った。「覚悟を決めました」
「そうと決まったら、わしが軍務の基本条件を説明するあいだ、またそこに坐っていたまえ」ピースが元の席にもどるまで、ウィジェットは天井を見つめた。「煙草は」
ピースが嬉しそうにうなずいた。「煙草が好きなんです」
「きみの煙草について話しておかなきゃならん、ウォレン君。出したまえ」
ピースは上着のポケットからセルフィッグを一箱取り出して、デスクごしに相手に差し出した。
「きみのために、これは別にして取っておく」箱ごと、取り上げながらウィジェットは言った。
「兵卒は、基礎訓練のあいだ、煙草をすうことは許されない」ウィジェットは自分のために煙草を一本ひき抜いて一服つけ、残りを抽出しに放りこんだ。
「ありがとうございます」ピースは物欲しげに立ちのぼる煙を見つめながら、どれだけ長いあい

だ中毒のように煙草をすっていたのだろうかと考えた。欲しくてしようがない気持の強さからいって、かなりのあいだだったには違いないと思ったが、細かい記憶はさだかではなかった。今までの生涯にたくわえられた記憶の残っているべきところが完全な空白になっているとわかって慌てたが——ウィジェット大佐がさっき話したことが正しいとしたら——自分が本当にはどんな人間かを知らないほうがましだろう。ピースにとっての最善の道は、過去を消し去って、軍団での新しい生活の赴くがままにまかせることであった。ともかく、おそろしく数多くの冒険と旅に出なければならないことはたしかだ。

「……軍務の条件はまったくもって標準的なものだ」とウィジェットが話しかけていた。「給与は一日に十モニットで……」

「一時間にです」とピースは訂正した。「一時間に十モニットということです」

「わしが言ったとおりの意味だ。将校と言い争ってはならん」

「失礼しました」とピースは、心も重く言った。「おかしなことを言ったのも、記憶が抜けていたからに違いありません——奴隷制度なんて何百年も前に廃止されたものと思ったもので」

「きみは実に手こずらされる相手だな」ウィジェットの心に嫌悪感が湧いてきて、ピースをにらみつけた。「わかったかね、きみ。実際はまったく不可能なことなんだが、そうでなかったら、きみの記憶を取り戻させて、警察にご慈悲をかけてもらうようにするがね。きみはわが軍団にはふさわしくない男だ」

「わたしが言ったのは……」

「兵卒ピース」ウィジェットの口が怒りでひきつった。「なんとしてでも、貴様を棒でぶん撲(サッ)っ

てやる」
ピースは驚いてウィジェットを見つめた。
「一兵卒を叩くことが認められているんですか」
「撲るというのは自己管理懲罰（ＳＡＰ）のことだ」ウィジェットは、仕返ししてやろうといった光を眼の中にたたえながら説明した。「それではと、古き良き左右乳頭圧縮捻りでもはじめるとするか。つねりとも称されているやつをな」
「ちょっと待ってください」ピースは、それと察知して言った。「たぶんわたしは少し出過ぎたことを言ったと思います。たぶん……」
「人差し指と拇指で自分の乳首をつまめ」とウィジェットは命令した。
「でも、分別のあるおとなのようなふるまいはできないものですかね」そう言いながらもピースは、上着の前を開き、薄いシャツの生地ごしに自分の乳首をつまんだ。
「『つねれ』と命令したら、できるだけ強くしぼるんだ。それと同時に、弧度で約２度分の角度まで、それぞれ反対側に乳首を回転させる」容赦のない顔つきでウィジェットは言った。「円の計算になじんでいないなら、九十度でだ」
「大佐、わたしたちを二人ながらに堕落させるようなことをお望みとはとても思えませんが、この……」
「つねろ」
標準電気心理反応条件付けに否も応もなくうながされたピースは、自分の手が不必要と思われるほどの勢いで命令に従ったために、苦痛のあまり唸り声をたてた。「や、やりましたね」自分

のたてた声の調子に真実がこもっていると信じたとたん、ピースは言いがかりをつけた。「あなたは、わたしたち二人を堕落させたんだ」
「わしはこんなことを楽しみに生きているんだ」とウィジェットは心地よげに言った。「いまさっきは金のことを話し合っていたんだったな――きみはどれくらい金を持っているんだ」
ピースは片手をポケットにつっこみ、薄い札束を出した。「二百モニットというところでしょうか」
「それをわしに預けたまえ」ウィジェットは手を差し出した。「この次にきみに会ったおりに返すからな」
断わり切れずにピースは、その薄い束を引きわたした。「含みがあって言っているとは思わないでいただきたいんですが、大佐、あなたにまたお目にかかれる機会はあるんでしょうか」
「ほとんどないといってよかろう。だがきみには、自分の運のよいのがわかっていないようだな。なんのかのといって、この銀河系は小さいんだ」
こじつけの説明をしているなとは思ったが、まだ胸の両脇がひりひり痛むのでピースは口を出すのを思いとどまり、残りの簡単な募兵注意事項に黙って耳を傾けた。それからピースは――煙草や金、自尊心、今までの生活に関する知識のすべてをはぎとられて――従順にウィジェット大佐のオフィスから足音高く出ていき、宇宙軍団の一兵卒としての、三十年、四十年、あるいは五十年におよぶ軍隊生活をはじめた。

2

ピースは、他の六名のうら若い男たちに伍して、大きなホールの隅に立っていた。どの男も、胸にプラスチックの名札をつけており、全員が、持ちはこびできる間仕切り棒をロープでつないで作った小さな囲いの中にかたまって、不安そうに集まっていた。ピースは好奇心にかられて周囲を観察した。

ホールは長いカウンターで二つに等分されており、カウンターの上には網目のスクリーンが、斜めになった裸の垂木からぶら下がっていた。その上のほうにある棒状の照明には屋外からしのびこんだ十一月の霧がまといついて、緑色に陰気な光を投げかけている。もっと遠くの電灯はもやにかすんで、きらめく氷の棒のようだった。スクリーンの向こう側には物を置く棚がならんでおり、カウンターのところどころには制服の係員が坐っている。係員たちはほとんど動かないので、コンクリートの床の上を渦巻く冷たい空気の流れのために化石となったように思われた。

「畜生め、あの辺で止まっちゃったんじゃないかな」と言った男は、ピースの一番近くにいる連中のひとりだった。不機嫌そうにした男の顔は、ひどい寒さのために蒼白くまだらになっていたが、もしそうでなかったら顎鬚の蔭になって青味がかっていたろう。男の名前はバッジから、兵

卒コップグロウヴ・ファーとわかった。
「クリート軍曹は、二、三分、そこで待ってりゃいいと言っていたけれど、もう三十分も待たせやがって」と言ったファーは、さらに続けた。「なにかあったんじゃねえかな」
ピースはファーをちらりと見て言った。「あいつらはぼくから記憶をとっちゃったんだ」
「おれたちゃみんな、忘れてえことがあるんだ。理由がちゃんとあってのことよ……」
「でもきみにはわからないんだ。ぼくにはなんの記憶も残っていない——なにもかもなくなっちゃったんだ」
「なにもかもだと」ファーはひと足あとずさったが、その茶色い両の目には、一瞬用心深い影が浮かんだ。「おめえは正真正銘(ほんもの)の化け物なんだ」
「そうかも知れないな」とピースは憂鬱そうに言った。「問題なのは、ぼくにはその辺のことがちっともわからないことなんだ」
「おれがやったのと同じことをやりゃあよかったんだ」グリーンにきらきら光る服を着こみ、まるまると太った猫背の——兵卒ヴァーノン・A・ライアンという名札をつけた——若者がピースの胸をつっついた。「自分の問題となる部分を紙に書きこんでおいて、それをおれは隠しちゃったんだ」
「それがどうしたというのかね」
「どっちへころんでもいいようにさ」ライアンはほくそえんだ。「おれは自分でどんなことをしたって、それにひっぱり廻されたりはしないんだ。空騒ぎがおさまるまでのあいだは、あっちこっちと勝手に旅行してまわって、それから……」

「ちょっと待って」とピースが言った。「嘘じゃないんだろうね。その記憶が消されちゃっても、なにひとつ苦しい思いに出っくわさないですませられるんだって。気もつかない話だな」
「あんたは生まれてからこの方、どこに住んでいたんだ。あ、そう、そう……あんたにはわかっちゃいないいんだったな」
「つまりきみは……自分の良心に悩まされることなんかなかったんだね」
「どうかな。ともかく、おれはあんたとは違っているんだ――具合の悪い点はただ一つしかないと思うね」あぐらをかいた鼻が鎮座ましますライアンの顔が、満足気な幸福感を発散させた。「ひと月かふた月は今のままこの部隊にいて――まあどうなるか、結果をごろうじろだ――それから好機到るとなったら、おれさまのあの書類をちらっと見て、おさらばをする。気ままに、きれいさっぱりとな。あとは高笑いさ」
笑いがあふれんばかりのライアンの嬉しがりようにピースはいらいらしはじめた。「きみは、自分の契約書を見たことがあるのかい」
「もちろん、見たさ。そこなんだ、一番の問題は、おまえさん。契約では、記憶を消すのとひきかえにおれの軍団勤務を拘束しているがね、ひょっとしておれの記憶が戻ったら、その取決めもぱあさ」ライアンは、最初にピースに話しかけた色の浅黒い男を肘でつついた。「この古狸のコッピイに訊いてみな――そんなことを考えついたのは、やっこさんなんだから」
「声を低くしろよ」と言ってファーは渋い顔をした。「てめえはみんなに教えてやりてえというのか」
「なにも言わずにおいて自分の記憶をとりもどしたってさしつかえはないさ」ライアンは小声で

言って片目をつぶってみせ、それからもう一方の目でウィンクした。「それだって契約は無効になるしな。いやあ、おれにとっちゃ、この勤めはいよいよ有給休暇ってことになりそうだ」ライアンがいかにも満足気に自分の周りを見まわしたので、ピースはますますもって腹が立った。近くにいた仲間の何人かがそれとなくうなずいていた。

「ぼくたちはなんで羊のように閉じこめられていなくちゃいけないいんだ」ピースは強い調子で難詰し、軽い間仕切り棒の一本をわきにどかして囲いの外に出た。

「そんなことをしちゃだめだよ、あんた」とほかの兵が言った。「クリート軍曹がそのままにしておけと言ったんだ」

寒さで感覚が痺れそうになったので、痺れないようにとピースは、自分で自分の足をふんづけていた。「どんな軍曹だって、気になんかしやしないさ」

「あの男に会っていたら、気にもするだろうよ」とライアンが口をはさんだ。「軍曹は、おれの知ってる限りはとびきりでかくて無様な、おっそろしいけだものだ。腕はおれの脚くらい。口はでかすぎるので、閉めているときだって半分はあいちゃっていて、それに……」ライアンが声を呑んだ。眼がピースの頭の上の一点に焦点を合わせると、頬から血の気がひいた。

ピースが向きなおると、おそろしいものの影に向かい合っているのがわかった。ライアンの描写は不完全なものだったが、ピースにはすぐにそれがクリート軍曹だとわかった。背丈が二メートルはあり、その外形はまさにピラミッドだった。榴弾のように尖った頭蓋からはじまる筋骨のピラミッドは、傾斜をなして隆々とした肩やビヤ樽のような胴体、ピースの胸とほとんど同じ厚さの脚へと、下へ行くほど拡がっていた。脚の力がとても強いので、支えている体重がひどく重

いにもかかわらずその全集合体は、音もなく、軽ろやかな足どりで動きまわり、一歩ごとに小股で床をとんでいくように見えた。
「なんて言ったんだ、ピース」クリートの声は、口の洞穴からとび出す地下の轟音に似て、なるほどライアンが指摘したとおりに大きかった。口は耳から耳まで裂けたようで、ぞっとさせられたことに、一瞬、それが軍曹の頭のうしろまでまわり、唇と歯のつくる円い輪が弾丸頭いっぱいに拡がった印象をピースは受けた。
「わたしは……わたしはなにも言いません、軍曹」とピースはもごもご言った。
「そんならかまわねえが」クリートが近づいてくると、その青い制服のためにピースの視野がうす暗くなった。「だがよ、なんでおれさまの間仕切り棒をどかしたんだ」
ピースの心に恐怖心が湧いてきた。こんなことを三十年も、四十年、五十年もと続けるわけには行きっこないし、いっそのことすぐに死んでしまって、それで一巻の終りとしたほうがましだとするあきらめの気持が突然心にひらめき、そのショックと絶望が、恐怖にないまぜられた。
「動かしちゃいません」とピースは言った。「蹴っとばしたんです。それがわたしの行く手にあったものですから。わたしは、行く手を遮るものはなんでも蹴っとばすんです」足で間仕切り棒を打ちすえ、ひっくり返すことによって、ピースは、人生上の問題を自分ならこう解決するんだとその方法をあらためて示してみせた。靴の厚みが思ったより薄かったので、四角い柱の隅にぶち当てたことからくる痛みが波となって脚をかけのぼったが、我慢して立ち続け、痛みが消えるのを待った。驚いたクリートの口がつり下がって、ぽかんとあいたが、そのあけ方は段をなしていたので、吊り橋がだんだんに崩れていくように見えた。クリートは、巨大な機械が、化け物じ

みた破壊力を発揮する前にたくさんの燃料を呑みこむように深く息を吸いこんでから膝をまげ、倒れた間仕切り棒を両腕にかかえこんだ。
「なんでこんなことをするんだ」クリートが鼻をならした。「塗料をこそげ落したぞ。ツーグッド中尉がなんて言うか」
「なんと言われようが、構いません」不意をうたれてピースは答えた。
「きさまにとっちゃ構わねえだろう——が、おれさまにはこの間仕切り棒に責任があるんだ」クリートは責めるように眼をあげた。「きさまみてえなタイプの男のことはよく知ってる。きさまのは、ただの空いばりさ」
「ちょっと……」ピースが両脚を前後させた。ひとつにはまごついたためだが、ひとつにはずきずきする足の指を楽にするためだった。
「おれを蹴るんじゃねえ」つぎの言葉を発する前にクリートは、安全と思われる距離まであとずさった。「きさまのことはツーグッド中尉に報告するからな、ピース。中尉殿がきさまにお仕置をして下さる、いいな。わかるか。これからクリスマスまで、自分の乳首をつねりあげなきゃならねえぞ。わかるか。そのときまでには、きさまの乳首がひっくり返って、中尉殿もご満悦ってとこだ。わかるか」クリートはくるりと向き直ると、いそいでホールから出ていった。クリートの身体のつくる円錐形が昂奮のあまりにふるえながら、一歩ごとに床をとびはねているのが見てとれた。新兵の一団はクリートが出て行くのを黙って見つめていたが、出て行ってしまうと、クリートがそのままにしておいた残りの間仕切り棒をひっくり返し——信号が青になったのに応じるように——ピースの周りに集まった。

「こんな場面にお目にかかったのははじめてです」とある男が言って、ピースの手をつかみ、握手をした。「あのでっかなゴリラが、あなたをとって食うんじゃないかと思いましたよ。でも、しょっぱなからあいつとりっぱに渡りあったなんてね。どうしてあんな具合にできたんですか」

「一種のこつだよ」ピースは弱々しい声で言った。やけっぱちな気持が遠のき、あのときの向こうみずが将来に対する見通しを前以上に寒々しいものにしたと怖くなりはじめてきた。「ツーグッド中尉ってどんな人なんだろう。クリートみたいな男でも恐ろしがるとすると……」

ライアンが、クリートの姿を消した戸口に目をやった。「こういった成り行きはどうも気に入らないね。基礎訓練のあいだだけはなんとか軍団にとどまっていて、それから勝手に、どこかほかの世界へ旅してまわりたいもんだ」ライアンの近くにいた者たちは、クリートを見たことで心に受けていた緊張もとけはじめ、ぶつぶつ言ったが、このことは、みなもライアンと同じような計画をたてていることを示していた。

軍団から抜けだす手立てを用意しておくといった見通しを立てていない男でここにいるのは自分だけだとわかって、ピースは一段とがっくりした。自分のおかした悪業を多少なりと償おうとしたピースは、何本かの倒れた間仕切り棒をひきおこし、つないでいるロープを直しはじめた。その仕事が終ろうとするとき、足音の近づいてくるのが聞こえた。見上げると、きちんとした身なりの、ぱりぱりの青年将校が目に入った。この将校は、片手に煙草を、一方の手には束ねた書類を持っていた。赤茶色の髪は伝統的な軍隊式で——額のところをふっくらとさせ、うしろは襟につくくらいに長くしていた。

「わたしがツーグッド中尉だ」とこの男がのたもうた。新兵の集団が——その中にピースも加え

て——ばらばらに敬礼やらお辞儀、高鳴る踵合わせをよせ集めて、熱心に敬意を示しているあいだ、中尉は黙って立っていたが、やおら頭をふった。

「上官に挨拶するといったいままでの考えはいっさい忘れてもらおう」とツーグッドが言った。「この二〇三連隊では、そういった類いのことには気をつかわんでもよろしい。そんなことは、一切合財が完全なる服従の習慣を繰り返し教えこむことを意図した古代の訓練法であって、もはや必要とはされておらん。暇つぶしにしかすぎず、四角四面の古くさい訓練や、泥縄式にみがきたてる莫迦騒ぎは金輪際、お払い箱だ——よいかな」

「はい、わかりました」羊のごとくおどおどした微笑みが新兵のあいだからこぼれた。

ツーグッドが、喉のところにある指令強制器の塊りを叩いた。「わたしがおまえたちに、お互いの喉をかき切れと言いさえすれば、おまえたちはすぐにとんでいってそのとおりにするくらいのところまで条件付けがなされておるのに、なにをいまさら、時間と金の無駄づかいをするいわれがあろうか」

新兵たちの笑いが、とたんに消えた。

「現在の方式は、古い方法に比べて格段にすぐれておるだけに、おまえたちの上官にどえらい責任を負わせておるのだ。たとえば、おまえたちの誰かがわたしの堪忍袋の緒を切らすような行ないをしたと想像したまえ。するとわたしはだ——もちろん、あれこれ斟酌したりはせずに——姿婆の人間がときに怒りを爆発させるようなことを大声でどなり散らす……その結果は惨憺たるものとなろう」ツーグッドはそう言ってからしばし煙草を豪勢にすぱすぱ喫ったが、その間、聴き手たちは、状況をいろいろと思いめぐらせては騒いでいた。「そんなことをすればあとになって、

わたしもいい気はしないだろうし、おまえたちだってそうだろう。おまえたちがどれほどいやな気分になるか、考えてもみてくれ」
新兵たちは、陰気にうなずきはしたが、ツーグッドがほのめかした線がどの辺にあるかを考えていた。
「しかしわたしは、自分の気苦労をおまえたちに転化しようとしているわけではない」ツーグッドは度量の大きさを示しながら話を続けた。「おまえたちがここエクレス要塞で基礎訓練を受けているあいだの面倒を見るのがわたしの仕事であるから、おまえたちはわたしを自分の友人だと考えてもらいたい。そう考えられるかな」
ピースは、他の者たちと一緒になって、力強くうなずき返した。この愛想のよい、若い中尉を一人の友人とみなすようまじめになって考えてみたが、ピースの心の裏側から聞こえる、それほどおだやかでもなく、それほど小さくもない声は、もっと別のことを語りかけていた。
「事態はあまり良くなさそうだな」とライアンがピースの耳にささやきかけた。「おれは基礎訓練がおわるまでずっとここにいられそうもないぜ」
「さて、わが軍団の立場がいかなる状態にあるかは正確にわかっておる」とツーグットが言った。「おまえたちのうちのだれが、クリート軍曹をかっかとさせたのかな」
ピースは、なんの発言もせずに、この一団の仲間に守られたままにしていようかとも考えたが、そのとき急に大脳の表面に、サンドペーパーがかけられたような感触が戻ってきた。と同時に、この一団は――あきらかに、仲間として守ろうとする義理を売りこみたいとはつゆほども思わなかったので――みなが、一緒になってピースを手で前に押しだした。

ピースは、われから進んで前に出たようにみせかけながら、指先を振って言った。「わたしがしました。兵卒ピースです。そんなつもりではなかったのですが」
「万点だ、ピース」ツーグッドが遮った。「おまえがしたことは、勇気と、状況を即時に把握する能力とを示している――おまえは、前線に出たら有用な人間となるであろう」
中尉はきびしい目つきを他の新兵たちに向けた。「ピースがすぐに理解したことは――だが残りのおまえたちにはなかなかわからなかったことはだ――下士官という存在が時代おくれであり、現代の軍隊では、心底役に立たないいつけたりだということである。古い時代における下士官の役割は、訓練を押しつけ、将校と兵卒の間を仲立ちするものであった。しかしいまやわれわれには指令強制器があり、心理条件づけ技法があるので、伍長とか軍曹、准尉、その他の似たような存在はすべて、およそ不要なのである。この者たちは、一番お粗末な任務をはたすためにまだ存在はしているが、ひどい莫迦者であるか、軍務をはたす際に臆病であることが立証されるまでは、だれ一人、軍曹の位を与えられなくなっているのだ」
ツーグッドは軽妙に煙草を取り出したが、目つきは一段とけわしくなった。「わたしが諸君を見ての最初の印象を言うと――兵卒ピースを除いての話だが――わが軍はまさに、下士官むきの連中を一把ひとからげに手に入れたようなものである」
侮蔑の言辞に刺戟された残りの一団がそわそわしはじめたのを見て、ピースは、この連中に団結心が欠けているのがまた気にはかかったが、満更でもないといった顔つきで一同を眺めわたしたい気持を押えられなかった。
「自分のことばかりにかまけていてはいかんな、ピース」さっき誉めたばかりの言葉を取り消し

ながら、ツーグッドは続けた。「クリート軍曹はいま、便所の中に閉じこもっている。たぶん、泣いているのだろうが、ということは今日はもうなんの役にも立たず——おかげでわたしが余分な仕事を背負いこまされるという意味になるわけだ。今回は大目に見るつもりでいるが、軍曹に辛くあたり、かっかとさせたりすることは不当な行為であって、手ひどい棒打ちを招くこととなろう。

おまえたちのうちの何人かはすでに〝つねり〟をやらされたことがあろうが、そんなものはわたしが専門とする自己管理懲罰のうちのいくつかとはとても比べものになるものではない」ツーグッドは濛々たる煙ごしにぞっとした微笑をなげかけた。

「これで腹がきまった」ライアンがピースに囁いた。「この軍団になんぞいられるもんじゃない——法の定めに従って抜け出す機会を狙うさ」

「話はやめて、わたしについてきてもらいたい」とツーグッドは命じて、四角い金属の函が置いてある卓へみなを連れていった。中尉がその函の蓋をとりのけると、内部に緑色に光るものが現われたが、それは家庭用のごみを捨てるのに使われている機械と同種の、分子粉砕機だとわかった。七人の新兵がどうなることかとじりじりして互いを見交していると、ツーグッドは破顔一笑した。

「これはわたしがつねづね、一番の楽しみとしているしろものである」と言った。「どの一団の新人たちにも何人かの頭のまわるご仁がいるもので、わが軍の方式などぶち破れるものと考えている。どのようにしてわが方式を破ろうと企んでいるのかと言うと、記憶をおもい出させるちょっとしたヒントを身のどこかに隠しているのだ。小さなメモ紙、小さな記録テープ、点のように

縮小したマイクロ写真でな」ツーグッドはまだ笑っていたが、その一瞥が機関銃のように一同を照射した。「つぎの命令をよく聞いてもらいたい。そのような思い出のメモをどこかにたくしこんでいる者はいまそれを出して——内容を読もうなどとはせずに——ここの函の中に落すのだ」中尉は、喫っていた煙草のすいさしを粉砕機の中にはじき入れて、自分の命令の見本を示した。吸い殻が目に見えない塵に変わるとき、中で瞬時、白熱した光がかがやいた。

ツーグッドが言葉を切ったあとには、物音ひとつ立たなかった。ピースにはずいぶん長いことに思われたが、その沈黙は三秒も続いたろうか。ピースは、ライアンとファーを見つめた。顔をひどくゆがめていたので、この二人は、自分たちの意志が心理的条件付けでうち砕かれたために、大脳にサンドペーパーがかけられたような苦痛に耐えているのだと想像された。とうとうライアンは、緑にきらめく服のポケットから、震える指で小さな封筒を取り出し、それを待ちかまえている函の中に落した。ファーも同様に、左の靴下から紙切れをひき出し、他の者たちもいっせいに、下着から、時計バンドの裏側から似たようなものを手探りで抜き出して、ライアンにならった。忘れられるべき過去の罪や愚行の想い出をむさぼり食った粉砕機は、ツーグッドの顔にメフィストフェレスのような光芒を投げかけた。

「結構なことだ」と中尉はおだやかに言った。「娑婆に対する水心もなくなったいま、全面的に当軍団で働くことがわかったいま、おまえたちは、心の奥深くに平安と満足を感じることになろう。どうかな、ライアン。今までよりすっきりしたんではないかね」

「はい、中尉」とライアンは歯をくいしばって答えた。心の奥深くで平安と満足の気持を感じているにちがいない男としては、不似合なくらいに不機嫌な顔つきだった。

ツーグッドが首を振ってうなずいた。「またもや満点だ、兵卒ピース――おまえたちの中でただ一人だ、命を当軍団に捧げようとする誠実な意志をもってここにやって来たのは。好ましいことである。ピース、おまえの家族は軍人なのかね」
ピースは目をぱちくりさせてツーグッドを見た。「知りません、中尉」
「知りませんとはどういうことだ」
「わたしがどんな家系の出身であるか、知らないんです。わたしは、自分の記憶を全部、消されてしまったんです」
「記憶が全部だと」
「はい、中尉。わたしがあの椅子に坐る以前に起こったことはなにひとつ想い出せないんです」
そんなことがあったという事実はツーグッドに強い印象を与えたようだった。「おまえは化け物にちがいない、ピース。それまでの生活がどっぷりと犯罪に漬かっていたんだろう」
「はい、中尉」とピースはみじめそうに言った。昔の自分が、キリストに対するある種の敵であったことを繰り返し確認させられたので、ピースには棍棒でどやしつけるような効果があった。
ツーグッドが早くこの話題から話をそらせ、想い出すことなどなにもないということを忘れさせてくれないかなとピースは思った。
「おかしいじゃないか、とても化け物には見えないが」ツーグッドは近よって、ピースの顔をしげしげと見つめた。「あるいはそう見えるかな。ちょっと待て、たしか……おまえの写真が書類の中にあったんじゃないかな」
「わたしが知っているわけはありません」堪忍袋の緒を切らせてピースはかみついた。

「わたしにそうとげとげしくするなよ、ピース」そう語りかけながらツーグッドは、喉のところにある塊りを叩いてみせた。「これを忘れるな。おまえはいま、当軍団に入隊しているんだぞ――ギャングや殺人者が、今おまえの後楯になっている訳ではないんだからな」
「ちょっと待ってください」とピースが抗議した。「わたしにはどんなギャング仲間もついていませんよ」
「どうしてわかる。そんな仲間がいるかどうかを想い出せるのか」
「ああ……そうでしたね」
「ほれ見ろ」ツーグッドは勝ち誇ったように言った。
ウィジェット大佐のときと同じ筋立てを使っているなと悟ったので、ピースは、幾年ものあいだ、実地に健忘症の人間を扱い慣れた将校とは喧嘩をすまいと心に決めた。ちょうどホールの真ん中のほうへ行く軍曹をピースは、ほっとした気持で眺めた。それと気づいたかのようにツーグッドは、制服と装備が渡されることになっている中央カウンターのほうに行くよう、新兵の一団に命じた。ようやく話をする気力を回復したライアンとファーはさっそくに、自分たちの計画が失敗したことについて反省するどころか、逆に上官たちを非難するような話を囁きはじめた。ピースはその二人から離れて、〝制服〟と書かれた標識の下に坐っている事務官に近づいていった。
その事務官は、黄色い、敵意をもった眼でピースをじろじろ眺めまわし確認してから棚のほうへ行き、プラスチックのヘルメットと、それよりは小さくて弾力性のある細い紐の取りつけられたカップ状のものをもって戻ってきた。網紐スクリーンにある隙間からその二つのものをピースのほうに押し出した事務官は、元のように腰をおろすと、眼をつぶっていまにもぐっすり寝こみ

そうになった。ピースは中の凹んだその加工品をつついてみて、これはスポーツ選手の防禦カップだなと思った。
「すみませんが」とピースが言った。「これはなんなんですか」
事務官のどんよりした眼にゆっくりと光が戻ってきた。
「それはあんたの制服さ」
「この二つは、球技用のものだと思えますがね」
「この場合には、球技に使っちゃならないのさ」事務官が横眼でにらんだ。「あんたたちは、どこかにいる種族とのあいだでまことに汚い闘いをしなきゃならないんだ」
ピースは、不安からくる痛みをこらえた。「あとの制服はどこなんです」
「それだけだよ、あんた。それがあんたの貰える全部さ」
「なんだって」ピースは疑わしそうに笑った。「ヘルメットとカップが一つずつですって。それじゃ、制服になりませんね」
「二〇三連隊に編入されたら、それでいいのさ」と事務官が言った。
「話がわかりません」
「あんたには事情がちっともわかっていないようだね」事務官は大袈裟に嘆いてみせてから立ち去る気配をみせたが、やおらカウンターによりかかって言った。「二〇三連隊は、トリプル・エスが後援者なんだ、わかったろう」
ピースは首を振った。「トリプル・エスってなんですか」
「美味蝦ソース社のことさ、とんまだね、あんたは。軍団のことについては、なにも知らないの

か」
「ひとつとしてね」ピースは声を低め、自分の鼻が針金の網を通して相手の鼻にあわやくっつくまで身をのり出した。「わかってもらえますかね、手術室でわたしをひっつかまえた機械が、記憶を全部消しちゃったんですよ」
「全部だって」両の眼を見開いた事務官は、ついと身をひいた。「あんたはまちがいなく、ほんものの――」
「その先を言わないで」ピースが遮った。「その言葉には聞き飽きているんでね」
「わかったよ、あんた。侮辱しようと思ったわけじゃないんだ」事務官はピースの名札バッジを読んだ。「あんたみたいな人に逆らいたくはないからね、ウォレン。正直な話、わたしはただ……」
ピースは手を挙げて、この男を黙らせた。「美味蝦ソースがどうかしたって言われましたね」
「そう、あの会社は最近、左前になってきているんだ――地元の蝦にたくさんの水銀の含まれていることがわかって以来、暑い日なんかひどいんだ。売上げががた減りなんで、トリプル・エスが連隊に入れる金額はほんの少しになり、制服代を削減することが決められたんだ」
「軍団がそんなふうにして運営されているとは知らなかったですね」
「あんたは一八六連隊に入るべきだったんだ。その連隊もポターバーグ市にあって――募兵事務所はここから、二、三区、南へ行ったところなんだが――強力殺虫剤の会社があと押ししているんで、いまのところ何もかも潤沢というところさ。あっちへ行けば素敵な制服が着られたろうにね、ウォレン」

ピースは、片手の甲を額におしつけて、この宇宙軍団が商売に左右されていることになんらかのショックを受けたのはなぜなのだろうと考えながら、眼を凝らしてツーグッド中尉のまばゆいばかりの姿に見入った。「中尉は制服に身を固めているじゃないですか」とピースは指摘した。「それにウィジェット大佐やクリート軍曹も」

「ああそうさ。だがあの人たちは基地の要員で、ここポターバーグに常駐しているのさ」と事務官が返答した。「もしあの人たちが、浮浪者のような服装でそこらを歩きまわった日には、トリプル・エスのイメージに瑕がつくからね——しかもだ、あんたたちは基礎訓練がおわりしだい送り出されて行くんだからね」

「わかりました」ピースは、くるりと向きをかえてその場を立ち去ろうとした。「いろいろと教えてくれてありがとう」

「ちょっと待ってくれよ、ウォレン」事務官は、裏になにかを含んではいるようだったが、それでも親しげな様子を示した。「あんたはどんな靴を履いているのかね」

「薄いやつです」とピースは言ったが、こわれた足指の部分に感じていた痛みが消えたのは、コンクリートの床からはいのぼって感覚を痺れさせている寒さのせいだなと感じていた。

「あんたが送りこまれる地域では、そんな靴は役に立たないだろうから、なんとかしてやろうじゃないか、ウォレン。三カ月以上もの記憶をなくした新兵に会ったことがないし、そういった点であんたは特別な男だから、これを進ぜよう」事務官はカウンターの下にかがみこんでから、踵が金色で、爪先飾りのついた大きくて赤いブーツを一足取りだした。

「なんですか、これは」はっとするような感じを受けてピースが言った。

「ほんものの星組騎兵七つ組みのブーツさ――トリプル・エスのダウ・ジョーンズ株価指数が一番高かったときには、標準装備だったがね。この基地に残っている最後の一足なんだ、ウォレン。余分の現金を持っている新兵さんに売りつけようととっておいたんだが、ウィジェット大佐が引きつぎをしてからは、だれひとり、二セントだって身につけちゃいないんでね。まあ、あんたがとっておきたまえ」

「ありがとう」ピースは重いブーツをひとまとめにすると、残りの制服と一緒に、腕にかかえこみ、他の連中がライフルを支給されている窓口のほうへ向かった。

「それを身につけて達者でな、ウォレン」事務官がうしろから呼びかけた。「ともかく、元気でいるかぎりはな」

ピースがライフルの窓口のほうへ近づくと、ライアンとファーが寄ってきた。ライアンはまたもやご機嫌そうで、眼が、着ている上衣のグリーンのきらめきに合わせて輝いていた。ファーの灰色をした顔の表情にはうさんくさいところがあった。

「おれとコッピイは、新しい案を考えだしたんだ」声を低めてライアンが言った。「あっちのときはちょっとばかり心配だったんだけど、今じゃ万事オーケーさ」

ピースは、二人が敗北に屈しないのをしぶしぶながらも認めざるをえなかった。「なにをしようというんだね」

「簡単なことさ。おれとコッピイにはポターバーグにおおぜいの友だちがいるんだ。やつらはおれたちがこのごたごたの中で何をやらかしたかを知りたがっているのさ。基礎訓練中に最初の休暇が出たら、出かけていってやつらに会い――そしておれたちの記憶を取り戻すんだ」

「休暇がもらえるとは思えないがね」
「なんとかもらうよ。ま、どっちみち同じことさ——おれとコッピイは、なんとかして壁を乗りこえてやる。外へ出るんだ。仕上げをごろうじろさ」
「うまくいきますように」自分にもポターバーグに友だちがいるんだろうかと考えるまもなく、ピースは器械類の窓口に立っていた。放線ライフルだなとそれとなくわかる、きらきらした武器が手の中におしつけられると数秒もしないうちに、ピースは、建物から押し出されて、高い壁に囲まれた広い中庭に立っていた。中庭は、刑務所にある訓練場に似ていたが、違うところといえば、一同が吐きだされた戸口の真向かいに煉瓦作りの建物があって、そこには、腹に白い点が一つある恐竜に似た青い動物が描かれていることだった。空には鉄灰色の雲があとからあとから流れ、風はみぞれまじりだったので、新兵たちがいま出てきたばかりの陰鬱なホールでさえ、温かみのある、喜びにあふれた安息所に思えた。みなはヘルメットを着用し、ツーグッド中尉が小さな壇の階段をのぼっているあいだに、羊のように一カ所にかたまった。
ピースは隙をみて軽いほうの靴を脱ぎすて、予期せず手に入れた、子牛の脚ほども長さがあり、赤と金にきらめくブーツに足を滑りこませた。ブーツは大きすぎて、上のほうは、どちらかというと細いピースの足のまわりでぽかんと口をあけていたが、頑丈にできた足先のほうはよく寒さを守ってくれた。両足の拇指の下に固い、ちょっとした突起が感じられたので、ピースは、こんなにも高価な履物にしてはおかしな欠陥があるものだと思ったが、まあいい、暇ができたときにには真っ先に直してやろうと心にきめた。
「一同、注目」とツーグッド中尉が号令をかけた。「基礎訓練がいよいよはじまる」

「おれは今夜、あの壁を乗りこえてやろうと思っている」ライアンがガチガチとふるえる口もとから囁いた。「こんなことには耐えられそうもないからな」
「おまえたちには全員、標準的に使われるライフルが支給された」とツーグッドが続けた。「おまえたちの正面の壁にある青い絵に照準を合わせて、引き金を引いてもらいたい。射て」
手ほどきらしい手ほどきもなしに、相手を倒すことのできる武器の発射を許されたことにいささか驚いたが、ピースは青い恐竜にライフルの狙いをつけて引き金をひいた。細い紫色の光線が銃口から吐き出され、怪獣の絵の上、数メートルの所に当たった。光の点はスポットライトの向きを動かすほどに苦もなく方向をかえられたので、エネルギーが恐竜の中央にある標的に注がれるまで光線をさげていった。他の新兵も同様だった。輝いた標的のところから、煉瓦の破片が地面に落ちはじめていた。
「もうよかろう——バッテリーを無駄にするな」ツーグッドは腕をくんだまま、最後の紫色の光線が消えるのを待った。
「おめでとう、諸君。先ほど諸君に言った言葉はすべて撤回しよう——きみたちは全員、見事に基礎訓練を完了した。今すぐ軍用車に乗って、一番近くで行なわれている戦場に向かうんだ」ツーグッドは、中庭に入ってきた青いトラックのほうを指さし、一同のほうへゆっくりと歩きだした。
ピースのそばに立っていたライアンが、驚いて泣き言をのべたてた。「中尉、おねがいですから中尉。そんなことにならないようにしてください、中尉」ライアンは大声で言った。「基礎訓練は何週間も続くと思ってたんです」

「どうしてそんな必要があるのかね」ツーグッドは声を和らげて答えたが、心から楽しんでいることははっきりわかった。「これ以上、なにを教わる必要があるのかね」

「ええと……」ライアンはやけぎみに自分のまわりを見まわした。「もっといろいろと兵器についての学習なんかはないんですか。ライフルでお互いを狙わないといったことも注意してくれませんでしたし」

「言うまでもないことじゃないか、兵卒ライアン――わかりきったことだと思うがね」

「それはそうですが、でも……強化訓練なんかはどうです、中尉。わたしたち全員は、女の年寄りみたいに虚弱で、ひよわなんで」

「心配せんでもよろしい、ライアン。きみたちは敵を撃てばいいので――格闘することまでは期待しておらん。いの一番にライフルを渡したのがなぜだかわかるだろうが」

「それはそうですが、でも……」ライアンはだまりこんだが、下唇がふるえだしていた。

ツーグッドは、今やわれわれにおなじみとなった笑いをもらした。「兵隊の磨き掃除や教練などをいっさいお払い箱にしたので、きみたちは喜んでいると思っていたがね。きみたちは、ポタ――バーグにぐずぐずしていて、家族や友人と連絡をとろうというわけではなかろうが」

ライアンの口が開きかけたが、一言も発せられないままに閉じられた。ファーが横ずさりして近寄り、小声で言った。「あきらめるんじゃねえぞ、ヴァーニー。中尉にあのことを訊くん……」

「あっちへいけ」ライアンは、啜り泣きしながらも、踵でファーの足指をふんづけた。「しょっぱなから、おまえの言うことなんか、聞くんじゃなかった」

ライアンのかなりの重みが足にかかったとき、ファーは、なんとか叫び声をたてるのをおさえ

たが、顔色は青ざめ、気にかかるといったふうをしてその場をはなれた。そのとき、軍用車がやってきて、一団のそばに止まった。その車には、宇宙軍団の色である青が塗ってあったが、ピースの目には普通の荷物車そっくりに見えた。そばに寄ってよく見ると、軍の紋章の下には、蝦料理の皿の上で逆さになっているソース瓶の絵が描かれているのが見分けられた。ピースの詮索がおわったとき、車の横の自動ドアが横滑りにあき、何列かの木の座席が現われた。
「幸運を祈る、諸君」ツーグッドがりんと響く声で言った。「これから先、何年たとうとも、軍団の勤務でどこまで遠く旅しようとも——愛情と信頼とをもって——ここエクレス要塞で見いだした幸せの時と同志愛とを想い出してもらいたい……」話を中断して、ツーグッドは腕時計に目をやった。「……二三八六年、十一月十日、午前十時の同期兵としてだ」
納得はできなかったがピースはうなずき、かさばるブーツをはいたまま、ひどく苦労してトラックによじ登ると、見知らぬ星への旅の第一歩をあゆみはじめた。

3

エクレス要塞から宇宙船発着場(スペイス・フィールド)へ向かう道程は、不快なものであった。

軍用車の乗員席には窓がなかった。ということは、新兵たちには窓外の光景が眺められるといった最低の慰めも与えられなかったことを意味していたので、一行は道々、ほとんどむっつり黙りこんでいたが、その沈黙もときには、絶望のあまりのうめき声や、ライアンとファーのあいだで交される口論で破られることがあった。ラテン系の容貌と気質をもっているといったほうがぴったりのある男などは、大きな声で「ぼくのママ」と叫びながら急に立ちあがって、頭を乗員室の金属の壁にぶつけはじめた。このような行動はみなの感情をすかっとさせたので嵐のような反響をまきおこしはした――しかしそれに加えて天井から錆の粉と塊りをばらばらと降らせたので――男はすぐに説得されて、もとの席に坐りこんだ。

ピース以外の連中は残らず軍団のやり方の裏をかいてやろうとひそかに希望の灯をともしていた仲間だったが、いまでは明らかにみじめな気持になっているのとは好対照をなして、ピースは、天の邪鬼にもすっかり快活な気分になりはじめていた。ピースにとってポターバーグを、地球を

離れることはすこしも悲しいことではなかった。以前の生活についてこれっぽっちも記憶がなかったからであり、宇宙船(スター・シップ)に乗ってこの銀河系の別のところへ旅ができるという期待に魅せられてもおり、昂奮していたからでもある。ピースには宇宙船を見たという記憶がなかったが、空にまで達するかと思われるほどのきらめく尖塔に似た機首をもつ、丈の高い、優美な宇宙船を心の中に思い浮かべるのはさして困難ではなかった。いまやピースは――ヘルメットと豪華なブーツ、それにライフル一挺といういでたちで――地球の敵と一戦まじえんものと星に向かう途についたのである。

固い座席に背を伸ばして坐り、スパルタ式の苦痛を楽しみにさえ感じながらピースは、自分をまことの兵士と感じはじめていた。だが、犬歯の柄をした格子縞の上着と靴下の代りに、完全装備の制服を支給されていたなら、その効果はもっと完璧だったろうにと考えもしたが、本当に問題なのは、外観でなく兵士の人物そのものであることはわかっていた。その衣服に目をやったとき、ピースはそこになにか自分の身もとがわかるような書きつけでも入ってはしないかという考えがひらめいたので、上着の内側を調べてみると、服のメーカーのラベルがはぎとられていた――おそらく軍団に入る以前の自分が、過去をいっさい清算する決心をしていたことの証拠なのだろう。

そんなにもおそろしいことをおれはやったんだろうか？　ラベルをとめていた、ほつれた糸を抜きとりながらピースは、我とわが身を疑った。好奇心が湧きおこってきたのでピースがポケットの中を探りはじめると、どのポケットも二、三枚の硬貨を除き空っぽなのがわかった。入隊する以前に、ウィジェット大佐が勝手に私物化した金と煙草以外の個人的な持ち物はすべて、よく

考えた揚句に捨ててしまったようだ。だがなぜなのだろう？　警察の目をくらますためなのだろうか？

ピースは最後に胸ポケットを探ってみた。このポケットにはよくあることだが、奥が深すぎるし巾が狭すぎもするのでもう手探りをやめようとしたとき、指の先がなにかすべすべした固いものにさわった。ぶつくさ言いながらピースがその物体をつまんで光の中へ取り出してみると、それは青いプラスチックで成形された小さなひき蛙だった。ピースはあっけにとられた思いでそれをみつめた。このひき蛙は復元力のあるプラスチックで作られているらしく、ピースの手の熱で活力を与えられ――ピースがいったい、なぜこんなものがあるのだろうと考えこんでいる隙に――臀のところがおされた反動で、目の前の新兵の頸にとびついた。慌てふためいて泣きべそをかいたこの男は――名前をベンジャーと言ったが――その動物を床に払いおとして踏みつけ、跡形もなくして床のしみにしてしまった。

「だれだ、ふざけたまねをしようとしたのは」ぐるりと向き直ってベンジャーが詰問した。「ぶったぎって……ああ、あなたでしたか、ウォレン」ベンジャーはむかつくような調子で微笑した。「冗談ですよね、ウォレン――ぼくはこんなつまらないもんにすっかり驚いちゃって」

自分に立った恐るべき人物という評判を利用して何事もうまく行くようにしてやろうと心に決めたピースは、いつもなら反射的にあやまるところをぐっと押さえた。「あれを真っ平らにするまでのことはなかったじゃないか」

「いやごめん、ウォレン。機会があったら真っ先に別のを買いますよ」

興味が湧いてきたので、ピースはそのプラスチック片を床から取り上げた。「こんなものをど

こかで売っているのを見たことがあるかね」
「いいや、でもそんなおもちゃなら、別にむずかしいこともなく……」急に口をつぐんだベンジャーは、トラックが急に向きをかえて停止すると顔に悲しげな表情をみせた。「宇宙船発着場についたようですね」
乗員席の自動ドアが開きだしたので、自分の唯一の個人所有物が壊れてしまったことも忘れてピースは、騒々しい星間空港に最初の一瞥を与え、すぐにドアへいそぎ、熱心に外を見まわした。だがここへ着いたのは明らかに閑散とした時期だとみてとれたので、ピースは失望し、それが苦痛にさえ感じられた。一帯は凍りついた泥地だったが、そのどこにも一機として星間宇宙船は見られなかった。荒地の上をうらぶれた鷗が十羽ほど、不満そうなしわがれ声をたてて力なげに飛びまわっていた。ただひとりの人間としては、宇宙軍団の一中尉がいただけで、その中尉といえば――死体のような顔の蒼白さから判断して――乗員車をかなりのあいだ、待っていたのだろう、長さが二百メートルほどで、両端がせり上がっている、低い、窓のない金属の建物の入口に立っていた。ぶ厚い熔接の継ぎ目が見られたので、その建物は、急造の防空退避所のような外観を呈していた。
「こっちだ、諸君」スチールのドアを開けながら中尉が命令を下した。「中へ入りたまえ」
ピースは入り渋る一団を建物の中に導いたが、この建物は宇宙船ターミナルとしては快適な施設が甚だしく欠けているのに気づいた。両端にドアがあり、横に椅子が並び、一つ離れてコーヒーわかしの器械が置かれただけの細長い部屋の中にいたのだ。外に残っていた中尉が一同の背後で入口のドアをぴしゃりと閉めると、続いて掛け金を締めるにぶい音がした。遠くで短くクラク

ションが鳴ると、あらためてピースの仲間からはいっせいにうめき声が洩れた。この連中のノイローゼ状態には悩まされると同時に、多少なりとも軽蔑を感じたピースは、ほかの者から少し離れたところに坐ると、心を落ち着けて、無限の大洋を越えて自分を運んでいこうとする宇宙船がやってくるのを待った。ターミナルの建物には窓が一つもないため、あの巨大な乗り物が空から降りてくるところを眺められないのにはがっかりしたが、軍団の一兵卒として丈の高い宇宙船を何度でもじっくり賞味できる機会もあるだろうと考えて自らを慰めた。

三十分もたつとピースは落ち着かない気持になった。例のぺしゃんこになったプラスチックのひき蛙の死体をいじくり廻したあと、無情にもそれを床に投げつけてからコーヒーわかし器のところへ行ったが中は空っぽだった。いらいらがだんだんにたかまり、ピースは部屋の中を何回もぐるぐると歩きつづけた。ベンチにへばりついたまま立とうともしないほかの新兵たちの暗く沈んだ無気力ぶりが、動物のように閉じこめられたままにされたことに腹を立てもし憾みがましくも思っているピースの気持に輪をかけた。とうとう堪忍袋の緒を切らしたピースは、この部屋に入って来たときのドアのところへ行き、それを開けようとした。しかしドアはびくともしなかった。ピースは、金属のへこみのところに手をすべりこませ、その中にあるレバーを押し下げながら、肩をドアにぶつけはじめた。

「おい、あのウォレンのやつを見ろよ」と背後で誰かが言った。「ドアを開けるまねをしているぜ」

「ああいうまねをするのが、ウォレンてやつなのさ」とベンジャーが説明を加えた。「お笑い草にしようとしているんだ」

「ちょっと待てよ」と他の者が割って入った。
「どうも本気でやろうとして……」
「とんでもないこった。あいつ、ドアを開けようとしているぜ」
「い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い」
・ベンチが蹴ころがされたかと思うと瞬時にピースは床の上にのび、ヴァーニー・ライアンがピースの胸の上に乗っかっていた。別の新兵も両脚にまたがって寝そべり、ピースの動きがとれないようにした。
「こうせざるをえなかったのさ。ごめんよ、ウォレン」とライアンが喘ぎながら言った。「あんたのように何も気にしない男を知っちゃいるけど、おれたちはあんたと違って死ぬ気はさらさらないんでね」
「死ぬだと。何のことを言っているんだ」ライアンの図体が胸を押しつけているので、ピースは口を開くのがやっとだった。「おれたちの宇宙船がどこにあるのかを探してみたかっただけなんだ」
ライアンは、そばで事のなりゆきを見守っている男と目くばせを交した。「これがおれたちの宇宙船なんだぜ、ウォレン。おれたちはいま、宇宙船の中にいるんだ。もう三十分も前に離陸したのに気がつかなかったのかい」
「このブリキ罐の中でだって」とても信じられないといったふうにピースが冷笑した。「おれが阿呆にでも見えるというのかね」
ファーのうす黒い顔が視野に入ってきた。
「どっちが阿呆だと」

「もういい、もういい」とライアンが言った。「ウォレンは記憶が消されちゃったんだ。何が何だかてんでわかっちゃいないんだ」
ピースは大きく息をしようともがいた。「おれにはわかっているぜ、これは宇宙船なんかじゃない、まちがいなしだ。形だってまともじゃないじゃないか」
「特別な形をしている必要はないんだ」ライアンが説明した。「宇宙船は動いていないときじゃなくったって——流線形なんかしている必要はないのさ」
「そこのところさ」ピースが勝ち誇って言った。「離陸したって言ったろ。動きもしないでどうして離陸できるんだね」
ファーがまた顔を出した。「こいつは、おれたちが出発する前によ、自分勝手な軌道にのっちゃっていやがるんだ」
「いい加減にしろよ、コッピイ」顔に親切な、しかもなだめすかすような表情を浮かべてピースを見おろしたライアンは、だめな生徒に特別な注意を与える中学校の先生だった。「わからないのかね、ウォレン、宇宙船が動いたってどこへ連れていってもらえるものじゃないんだ」
「いや、ぼくはただ……」ライアンの調子が真剣なのを見てとったピースは、自分の考えに疑問をもちはじめた。「誰から聞いた話なんだね」
「誰あろう、アルバート・アインシュタインさ。昔やっていたように惑星と惑星のあいだをちょこちょこ跳びまわったって光の速度より早くは行けっこないんだ。そんなやり方は惑星間の旅行にはちっとも役立たずってとこさ。光の壁(バリヤー)が問題でね」
「それで、動かない宇宙船を使えば光の壁を乗りこえられるってことなのか」

「そこ、そこ」ライアンが嬉しそうに言った。「あんたにもわかってきたようだね」
「ぼくにわかったって」
「そうさ、あんたにもだ。あんたは頭の切れる男だから……いままでの乗り物の形ではまったくものにならないことがわかったときに、宇宙船の設計家がどうするかをもうちゃんと自問自答しているんじゃないか」
「それはそうさ」ライアンの言うとおりだとピースは思った。「頭の中であれこれ考えているんだ」
「わかっていたよ。とっくにあんたは、頭の中でいろいろな可能性を篩にかけて……」
「そう、そう」ピースは素直に肯定したが、心の中では知的な冒険に昂奮がたかまってきた。
「……この方法では満足のゆく解決にならないから別の方法はどうなのだろうかとあんたの頭の中で次々に……」とライアン。
「そう、そう」
「……最終的な解決方法がみつかるまで……」
「そう、そう」
「……そして最後に、非ユークリッド幾何学によるタキオン置換なら決着がつくと」
「いやあ」よくわからなかったピースは、内心のがっかりした気持を外にあらわさないようにつとめた。「非ユークリッド幾何学によるタキオン置換だよね」
ライアンは勢いこんでうなずいた。「もちろん、瞬間物質搬送のことを言いかえただけのことだけれど」

今度は理解できたので、ピースにも先の希望がよみがえったが、それも一瞬のことだった。
「それが瞬間的なものなら、ぼくたちはなんでこんなに長いこと、ここに坐っていなきゃならないんだ」
「そりゃあそうさ、完全に瞬間的ということはあり得ないんだ——別々の二つの場所に同時に居られるということは論理的にも筋が通らないからね。でもほとんど瞬間に近いので、だれもその差に気づかないのさ」
「ぼくはその差に気づいているがね」とピースが言った。「ぼくが思うには、四十分……」
「いや、あんたは終りまでよく考えてはいないんだ、ウォレン。おれたちの旅は、一回のジャンプでは完了しないのさ」
「なぜなんだ」
「発進ステーションと着陸ステーションのあいだの距離をそんなに大きくはとれないからさ。ある範囲以上の距離にすると、信頼性が欠けてくるし、着陸が不完全になるという危険がでてくるんでね」ライアンの顔にまじめくさった表情がちらと浮かんだ。「そうなったら、ことは面倒じゃないか」
「それじゃあ、どれくらいの距離なら搬送できる」
「二百メートルさ」
「二ひゃ……！」ピースは身をふりほどこうとまたもやもがいたが、むだだった。
「ごめんよ、ウォレン——あんたを起き上がらせるのは危険この上もないんだ。おれたちが宇宙の中にとび出していて、あんたがもしこのドアを開けたら、全員が死んでしまうことをもっとよ

く理解できるまではね」
「わかったよ」あえぎ声でピースが言った。「その続きの話を教えてくれないか。銀河じゅうに物質搬送器のチェーンを設けてあるのかどうか……何兆箇所もだぜ……二百メートル離れたものを」
「いまじゃあんたはまったくの莫迦ものだ」とライアンが文句をつけた。「いまちょっと前にはあれだけ頭を働かせたのに」
「申し訳ないが——また言い争いたくはないんだ。どんな仕組みになっているのかを教えてくれないか」
「あんたみたいに学のある男に物を教えようとは思いもよらなかった、ウォレン。あんたは自分の力で問題を解こうとしているんじゃないのかね」
「そうさ、でも……」警戒おさおさおこたりないライアンの眼のうちをのぞきこみながらピースは、何かひらめかないものかと思った。「ヒントを教えてくれないか、ヴァーニー」
ライアンがほかの連中に目をやると、ほとんど全員が勢いよくうなずいたのを見て、ピースはほっと救われた気になった。「よし、それじゃあ、いいだろう。ところで、あんたがあの軍用車から降りたときに、この宇宙船で気がついたことを言ってみてくれないか」
「ええと」なんとか調子を合わせようとしてピースは言った。「両方の端に、低い一種の塔のようなもののある、長くて幅の狭い金属の函のようだったけれど」
「たいへんけっこう、ウォレン。よく見ていたね。それじゃ聞くけど、二つの塔のあいだはどれくらい離れていたと思う」

「二百メートルほどじゃなかったかな、でもよくはわからな……」ライアンが待ちもうけるように眼を輝かせたのに気づいて、ピースは口をつぐんだ。「二ひゃ……」言いかけてピースはまた話を中断した。一つには、心の中にふと浮かんだ思いつきが口に出すには莫迦げたことに考えられたのと同時に、また一つには、胸の上に乗っかっていたライアンがピースを励ますようにとび上がりはじめて、肺から空気が抜けていったためでもあった。
「先を続けてくれ、ウォレン」ライアンがうながした。「極上の頭脳が回転するところを拝めるのは、おれにとっちゃけっこうな恩典だし、楽しみでもあるものな」
「この宇宙船の後方にあるのが物質発進器で」ぼうっとした調子でピースが言った。「それに宇宙船の前方にあるのが物質受入れ器だ。そしてこの宇宙船はいちどにそれ自体を前方に搬送する。そして自分でそれを受け取る」
「立ってくれ、ウォレン」ピースになり代って誇らしげに顔を輝かせたライアンは、ピースの胸の上から身をどかせ、手をかしてピースを立ち上がらせた。「あんたのように切れる男なら、自分の力で考えつけることだと思っていたよ」
「ありがとう」声にならない疑念の叫びがピースの心の隅々にひびきわたったが、本心をさらけ出したらその代償としてこの部屋でもう一度先ほどの茶番劇を演じることになるだろうと考えた。
「言うまでもないけれど」当り障りのない言葉を探し求めながらピースはためらいがちに言った。
「それほど簡単なことではなかったがね」
「そこのところさ、ウォレン」ピースの服についた埃をライアンがはらった。「あんたの頭の中は、基本の原理にどんな意味があるのかを探り出すのに懸命なんだろう」

ピースはうなずいた。「当然さ」

「あんたはおそらく、おれにも本当のところはわかっちゃいないような問題の核心に探りを入れているんだ——ジャンプするごとに空間的な置換をおこす、恒星の場合と同様な宇宙船の重心周辺での物質凝縮の方法とか、光速と等しい見掛け上の速度とするために、一秒間に一五〇万回のジャンプをさせる必要の問題、あるいは人工重力発生装置についての問題なんかを……」

「そうだよ——そんな類いの問題を全部ひっくるめてね」か細い声で答えたピースは、向きをかえ、近くの座席に腰をおろした。そのときになってピースは、ライアンの話の中には多少とも真理がこもっていると確信するようになったが、なにしろ一秒のあいだに何百万回も自分の体がずたずたに引き裂かれては、また再構成されているのだとわかって、膝のところががくがくとしてきた。意識上の記憶がすべて消されたということは、世界像がピースの無意識の中に形成されていることになるので——無意識ばかりの自己は、現実の宇宙でものがどんなふうに動いているのかといったことも考えられない、無用の、空想的な愚か者と思われた。今まで軍団兵になったことを喜んでいたのは、銀河系の中での十字軍に参加しているという意識からであり——それと同時に——銀色に光る美しい宇宙船に乗れると思ったからであって、鉄製の弁当函の中で粒子の雲となって星から星へとさまようためではなかった。そのような考えをただすのはなかなかむずかしかったので、ピースは、気をまぎらわすのに煙草が一本欲しいと思った。

「どうした、ウォレン」ライアンがそばに坐りこんだ。「調子があまり良くないようだね」

ピースは跳び上がって、具合の悪いところはどこにもないということを示してみたが、ライアンの丸々とした顔に浮かんだ同情の表情には抗うすべもなかった。「なにもかもが駄目さ」とピ

ースが言った。「死ぬほど煙草が欲しくてね……それに、ケチャップのメーカーのために戦おうとしているとは思わなかったんでね」
「戦う話はごめんだ」何もかもわかっているといった顔でライアンが言った。「ともかくあんたは……自分の言ったとおりにしようとしているんだ……軍団のために。トリプル・エスは連隊に装備を与えるだけなのさ」
「あまり名誉なことじゃないな」
ライアンは少しのあいだ考えにふけった。「あんたみたいな男にとっちゃね、おそらく」
「ぼくみたいな男とは、どういう意味なんだ。記憶がないからって、別に特別なことでもないだろう」
「あんたは新兵の役が身についちゃいないという意味さ、ウォレン。話のしかたから察すると、あんたは大学に行っているんだろう。頭がよさそうだからね——あそこにいるコッピイなどとはちがってさ。あんたがこの軍団に入隊したときには、もう逃れる術もなかったんだ。あのコッピイの野郎はおれに、いつだって抜け出せると言いやがって、それを信じこませ……」
「大学って言ったね」ピースは心の中で、この新しく出てきた言葉についてとつおいつ考えてみたが、別になんの慰めにもならなかった。「大学の講堂からソースの仕事に移ったにしても」
「ソースの話は忘れるこった。なあ、事態が十七世紀以来ちっとも変わらず、この部隊が、以前はウエリントン公爵連隊と呼ばれていたと聞いたら、気も晴れるんじゃないか」
「たぶんね」
「よろしい。それじゃあ聞こう。自分でその連隊の装備をした公爵が、収入の大半を公爵家の不

動産に仰いでいたことに何か問題があるかね」
「いいや」
「それじゃあ、公爵の一番大手の賃借人がソース工場だったというのはどうかね」
「それは問題がちがうな」何かぺてんにでもかけられた気分でピースが言った。「それはとにかく、ウエリントン公爵だったら、ぼくの制服はこれよりずっとましだったろうな」
「いまのままでも、あんたの恰幅はりっぱなものさ、ウォレン」
「そうかね」お世辞を言われて気持が落ち着いたピースは、自分の体を見おろし、脚がもっと太いか、あるいは赤と金の色のブーツの寸法があと十サイズほど小さかったらよかったのにと思った。
「冗談じゃないよ、ウォレン――ナイチンゲール大将その人よりずっとスマートに見えるぜ」勢いこんだライアンは、そばのベンチに腰をすえたコップグロウヴ・ファーのほうへ向き直った。
「ピースがどんなふうに見える」
ファーがどんよりした目でピースをじろじろ眺めまわした。「脚がこんな様子じゃあ――散弾銃の空になった薬莢を二つ置いておいて、そこにかけすが足をつっこんでいるようなもんさ」
「なに言ってるんだ、コッピイ――ピースはなかなかにいかすいいなせだぜ」
「いかす何だって」
「わかるだろ、いかすいいなせだ」
そう言われて、ファーの顔がくもった。「なんだか知らねえが、よっぽど、いいなごに似てらあ」
「おい、こっちを見ろよ」ブーツが脱げないよう注意しながら、ピースがファーのほうへ歩み寄

った。「おれがどんな男だか、忘れちゃいないだろうな」
「忘れるもんかね」とファーが言った。「なかなかのもんだったよな」
「そうだ、だからな……」
「おめえがそれほどのごろつきだなんて、おれは信じちゃいないぜ」鼻でせせら笑いながらファーがあとを続けた。「おめえが下らねえことしか記憶しちゃいないってことは、みんな先刻ご承知だからな」
ライアンがまあまあとなだめるように片手をあげた。「ピースがクリート軍曹にどう立ち向かったか、知っているだろう」
「あんなことは誰だってできらあ」指を折りこんで身構えたファーの顔には、癇癪玉をいまにも破裂させそうな表情が現われた。「今度別の軍曹に出っくわしたら、おれは……」クラクションが突如鳴りひびいたので、ファーの言葉はかき消され、残りの新兵たちはくもの子を散らすように各々の座席にもどった。
「謹聴」拡声器から声が聞こえてきた。「当船は惑星ウルファに到着し、現在着陸態勢にある。座席に安全ベルトのある者は着用し、ドアが開くまでその場に着席していること」
ピースが自分のベンチを見下ろすと、背もたれに沿って一定の間隔にリング状の掛け金があるのは見てとれたが、帯状のものは何ひとつ見当たらなかった。ライアンやファーもまじえた一団は、ベンチの上の、ベルトがそれとわかる場所に人より先に坐らんものとひしめいて、ピースの周りでひと騒ぎしたが、それも一段落すると今度は、ベルトを締めようとした者のほとんどが、それぞれの席に帯紐が一本しかなく、自分を縛りつけることができないからと、また一悶着をお

こした。その光景を見てピースははっきりと悟った。午前十時の組を有効な戦闘部隊に仕上げるために軍団の現地士官は、自分たちの戦闘経験と指導力を最後の一グラムまで絞り出さなければならないだろうと。戦場に赴かなければならないことを考えるとうんざりだったが、長年前線で磨きをかけられ、練り上げられ、鍛えられた専門の指揮官の強力な手による手綱さばきが見られるのは、少なくとも救いと思われた。

床がゆっくりと傾いて、宇宙船がはじめて動きらしい動きを示した。ピースは背筋を伸ばして坐っていたが、制御機能の故障したエレベータがやっとおさまるときのように宇宙船が数センチ落下したかと感じられたので心臓がどきどきした。金属のドアがぱっと開いた。ドアの向こうでは青白いもやが渦巻き、その中から人間の恰好をした姿が走り寄ってきた。それは大きな黒い目をしており、鼻や口がついているはずの顔の中心部は短く皺だらけだった。見つめている新兵たちはこわがってさまざまに溜息をもらした。

ピースもびくっとしてライフルに手をのばしたが、すぐにその恐ろしげな姿は、ガスマスクに顔を掩った軍団の一将校だと見てとった。その士官がよろめくように宇宙船にとびこみ、後手にドアをぱたんと閉めると、青白いもやが部屋の中に小さな渦となって拡がった。しばらくのあいだドアにもたれ、はげしい息づかいをさせたあと、将校は防毒マスクをとり、ふちを赤くした眼で一同をぐるりと見わたした。

「本官はメリマン中尉だ」将校は、口笛でも吹くようなか細い声を出したが、その声は、最前線の古参であることを示すうす汚れた、埃だらけの制服には不似合だった。「おまえたちはちょうどよいときに到着した――ウルファ人は、全力をあげて我々を襲撃してきている」一息入れると、

涙の出る眼を手の甲でぬぐった。「防毒マスクはどこにあるんだ」
「防毒マスクですって、中尉」ピースはポケットからスポーツ用の防禦カップを取り出すと、その弾力のある紐を手にしてぶら下げた。「これがわたしたちの唯一の特別装備であります」
メリマンは我慢ならぬというように手をふった。「なしで何とかするんだな――全員、おれについて来い――戦闘に出るんだ」
「でも、中尉……」そう口にしただけでさえピースは、大脳の表面にいまではなじみとなったサンドペーパーをかける感じを味わったので、命令に従わない訳には行かないことを悟った。他の兵士たちも、顔に心の苦痛をあらわしながら不安気に足をひきずって歩きだした。
「いそげ」メリマンがかん高い声をたてた。もう我慢がならないという気持から、声が裏声の高さにまでなったのだ。
「すみませんが、中尉」ベンジャーが片手をあげて言った。「テラのために戦うときには、もっときびしくなくちゃだめだ」「なにかまちがっているんじゃないでしょうか――わたしたちは地球から来たんですが」
「そんなことはわかっている、この莫迦もん」
ベンジャーはその言葉にまごついて、周りを見た。「でも中尉は、どこかのためにわたしたちが戦おうとしていると言われたばかりじゃありませんか、わたしが聞いたこともない……」
「変なことを言おうとしているんじゃなかろうな」メリマンがベンジャーのほうに歩み寄って、バッジの名前を読んだ。「自分でつねりをやれ、三回だ、ベンジャー」
ベンジャーが気の毒にも自己懲罰を行なっているあいだを利用してピースは、メリマンをしげしげと見たが、戦争の油よごれの下から現われたこの中尉の素顔が、十八ぐらいの童顔をした若

者なのにはびっくりさせられた。碧い目は理想的な透明度をもち、少女のような唇は例外的な大きさをした角ばった歯で上下にわかれていた。前線に長いこと出ていて、磨きをかけられ、練り上げられ、鍛えられていたにしても、それが顔には出ていなかったのだ。そんなメリマンのように経験をもたない男のもとで軍務に服するなんて不安な話だと考えていたとき、ピースは、あたりにひとをじりじりさせる芳香の漂っているのに気づいた。信じられないといった調子でピースはそれをかいだ。

「とてもこれ以上、ぐずぐずしちゃいられん」メリマンが難癖をつけるように部下を見つめると、部下は部下で、間に合わせのマスクの縁から中尉を見返した。「眼を守るゴーグルさえ持っていないなんて最低だな。あっちに漂っているやつは、ひどく眼を刺激するんだ」

「すみませんが、中尉」ためらいがちにピースが片手をあげた。「煙草のけむりのような匂いがしますが」

メリマンがうなずいた。「すばやい反応だな、ピース——まさにそのとおりだ」

「普通と変わりのないただの煙草の煙ですね、中尉」

「普通の煙草の煙となにも違いはないさ、ピース」じれったそうにメリマンがそう言ったとき、楕円をした口の形が、内側の歯の壁のために少し変化をした。「あれは、人の成長を阻害するんだ。かなりの発癌性があるんだが、実際のところ、ニコチンは一グラムだって人類の知るかぎりで最悪の害毒になるのだということは知っていたろうが」

「煙草なんか、目じゃありませんよ——わたしは煙草が好きなんです」

「つまり……おまえは煙草のみだというんだな」

「はい、中尉。そう思っています、中尉」
「こいつは驚いた」そう言ってからメリマンは、許しがたいというように唇をぎゅっと閉じたが、それも一瞬だったのと、口の中の歯の圧力が外向きに強すぎたため、一度口がひきつったかと思うとまたぱっと開いた。ピースは、一杯に詰めこんだ雑嚢のファスナーを何とか閉めようと苦労していた男のことを想い出した。
「こいつは驚いた」メリマンはまたこの同じ強い言葉を繰り返すことによって、内心の怒りを吐き出した。「煙草の犠牲者じゃないか。スタミナなんかなくなっちゃうぞ。息切れしちゃうぞ。なんて憐れな連中をテラはまた送りこんできたもんだろうな」
「また言われましたね、中尉」しつこくベンジャーが口をさしはさんだ。「どこかにまちがいがあるんじゃありませんか。わたしたちは紛れもなく地球から来たんで、そのテラとかいう……」
「つねりをあと六回だ、ベンジャー」顔をふりむけもせずにメリマンがどなった。「いいか、おまえたち。時間を無駄にしすぎたから、すぐ出発だ。おれについてこい」
メリマンはガスマスクを顔までひき上げると、金属のドアを荒々しく開けた。外では青白い煙が渦巻き、ときおりオレンジ色の閃光がひらめいた上に、爆発音や古めかしい銃の音までが聞こえていた。メリマンはやみくもに右手を一回、うしろから前へスローモーションでふり廻すと
――それをピースは、二十世紀の戦争映画から借りて来た合図に違いないと思った――一度、身をかがめてから、走りだした。部下の新兵の一隊も神経を昂らせながら同じ姿勢を取り、メリマンのあとについてあわてて駆けだした。グリーンに輝く服とは不釣合に太っているライアンは、無理に鼻をならしてから歩調をとり、一方、ベンジャーは、まだ自分につねりをかけながら空中

にとび上がっては、痛みのあまりに叫び声をあげていた。

後方で、宇宙船のドアががちゃりと閉まる音が聞こえたので、ピースがふり向くと、長大な金属の構造体がかすみながらも弧を描いて、急速に空にとび上がっていった。瞬時にしてそれは姿を消し、ピースは頼みの綱を失った。あとはただ、冷酷な運命が網をはる困難な情況に向かって仲間と歩みを共にするしかなかった。

4

最初ピースは、体を二つ折りにしてかがむことに自尊心の抵抗を感じたが、身近に空気をつんざく金属の破片のうなり声を聞くにおよんですぐに納得した。そこでよつん這いになって他のものに続いたが、ブーツがぶかぶかなおかげで脱げそうになり、余儀なくしゃがみこんださまで前進したため、ウクライナの踊り手を不器用に真似る恰好になった。見てくれこそ立派だったが、このブーツがたいへんな足手まといになるとわかったとき、ピースは、自分の足にぴったり合った元の靴をはいたままにしていればよかったと思いはじめた。

体の位置を低くしていたので、周りの様子は少しも見られなかった。しかしピースの分隊は、広い葉をもつ一種類の植物だけが均一にはえる平地を移動していた。あたりでただひとつ気に入ったものは、あり余るほどの煙草の煙だったので、ピースはしめたとばかりにその芳香を吸いこんでは、あわてて懸命に仲間に追いついた。そんな苦労をしばらく続けているうちにわかったことは、これが決して局地的なガス攻撃ではないということだった。地球人はすべて、ニコチン入りの煙で戦闘不能になると信じたウルファ人は、戦術的なへまをやっていることになるのだが、作戦規模から察して、ニコチンのことは大して心配することもなかった。

ピースは危険をおかして立ちあがり、敵情をさぐってみようとした。ちょうどその瞬間、なまあたたかい微風が吹いてもやのカーテンをもち上げたので、起伏する平地が垣間見られたが、その平地は一様に黄色い植物でおおわれ、そのあいだから円錐形の低い丘がいくつか突き出ていた。その円錐形の一つは、かなりあざやかなピンク色に輝いていた。はじめて見たこの光景に心を奪われたピースは、もっとよく見ようと目の上に手をかざしてみたが、近くに金属熊ん蜂が群がっているとは思えなかった。

「しゃがめ、この莫迦もん」メリマンがどなった。「敵の砲火をひきよせるじゃないか」

ピースは植物のかげに体をひっこめてから、分隊の連中が身をよせている、掘ったばかりの待避壕にあわてて かけこんだ。そこにはもう二十名ばかりの軍団兵がごちゃごちゃとかたまっていたが、ガスマスクをつけているものが何名かいたので、ピースはもの珍しげにその連中をじろじろ見つめた。メリマン中尉などは問題にもならないので別にしても、この連中は、ピースがはじめて出会った戦争のベテランだったので、不潔な服装やだらしのない装備までもが粗野な魅力をまとっていた。この連中の側に立ってみると、援軍の到着など、ものの数にも入らないようだった。そのベテランのひとりの大尉が、メリマンのほうに歩みよってきた。ピースのそばまで来ると立ち止まり、マスクで覆われていない部分で紛れようのない軽蔑の念をあらわにした。

「どうして貴様はあそこで、おびえた兎のようにかがみこんでいたんだ」と言って大尉は、目を三角に吊り上げてピースをにらんだ。「なんてだらしのない兵隊なんだ、貴様は。誇り高きテラはどこへ行った」

敬礼をはじめたところでピースは気を変えた。「メリマン中尉なんです、大佐。中尉に言いつ

けられて……」
「貴様の胆っ玉がすわってもいないくせに、当軍団の将校のせいにするんじゃない」大尉が小声で言った。「ジュピターの名にかけて、貴様が誇り高きテラに住むなんぞは勿体ない話だ。誓って、テラのために死んでもらおう。約束したぞ」返事も待たずに大尉は、這って戻っていった。
「はい、大尉」ピースはその立ち去る姿におぞけをふるった。
「なんてひどい話だ」両手、両膝でいざりながらピースに近づいてベンジャーが言った。しかしその同情の言葉はすぐに、疑念の言葉にとって代った。「なあ、ウォレン。あのご仁たちがよく口にするテラというのはどこのことなんだろう」
「おれがそんなこと知るもんかね」事態のあたらしい変化に驚いていたので、他人のつまらない心配ごとには興味がなかった。
「地球のことさ」戦闘でうす汚れた軍団兵のひとりが口をはさんだ。「将校たちはみんな、地球の意味でテラと言うんだ。誰もその訳は知らないがね。あんたもその言葉に慣れたほうがいいな。でもね、誇り高きテラと言われたときは最低なんだぜ」そう言った兵隊は、ピースに向かって意味ありげに、目をつぶってみせた。
ピースはぞくっとした。「大佐の言ったことを言葉どおりに受け取れっていうのかね。大佐の名簿にぼくの名前が書き込まれたってことだろうか」
「ハンディ大佐は個人的な恨みなんかもちゃしないさ、あんたの考えているとおりに言うとね」
「そいつは助かった。ちょっとのあいだ、ぼくが考えたのは……」
「そんなふうに考える必要はないさ」とその軍団兵が先を続けた。「大佐はおれたちをどえらく

大勢、死地に追いやろうとしているんで、誰にだって特別扱いするわけじゃないのさ」
ピースは放線ライフルを握っている手にぐっと力をこめ、勇気をふるいおこそうとした。「みんながそうやすやすと死ぬわけでもなかろう」
「あっちにある機関銃座のどれかに向かってまっすぐ前進しろと命じられたら、あんたはおれたちと同じに、そのとおりするだろうし――そうすりゃ、実にあっさりと死ぬことにもなるのさ」
「もう話を聞いちゃいられないよ」ベンジャーが弱々しく言った。「なんだか吐き気がしてきた」
煙の中を這い出すとじきに音がして、ベンジャーの言ったとおりだったことがわかった。
「でも、自分の部下を無駄死にさせるのは、上官の勝手というわけでもなかろうさ」できるかぎりの情報をあつめたいと思ったピースは、その軍団兵のほうへにじり寄った。「あれ、あんたの名札はどうしたの」
「名前はバッド・ディンクルさ。バッジなんかはとうの昔に落っことしちゃったよ――元どおりにきちんとするのはどうしたらよいか、誰もわからないんだ」
ピースは自分のバッジを見おろしてみてはじめて、四角いプラスチックが小さな安全ピンと肌色の外科用テープだけで留められているのに気づいた。テープの粘着性がもうなくなって、バッジはかしいでいた。ピースはその角度を直してから、胸の上で押しつけ、即席の修理が役に立てばよいと願った。
「そんなことをしても何にもならないよ」とディンクルが言った。「常時、バッジをつけていろとは言われているんだが……」言いさしてディンクルは、一連の耳をつんざく爆発音がおさまるまで、指の爪を平然と見つめた。このときの騒ぎの只中で、かん高い叫び声が一瞬たしかに聞こ

えたと思ったピースは、心配してあたりを見廻したが、煙がまた厚くたちこめたので、四方にせいぜい二、三十歩の距離まで見通せるだけだった。
ピースはディンクルの袖をぐいとひいた。「このガス攻撃はいつまで続くんだろう」
「ガスだって」ディンクルが急に思いたったように防毒マスクをいじりはじめた。「どいつも、おれにガスの話なんかしなかったぜ。どんな種類のガスなんだい」
「あたり一面を取りまいているこの物質さ」
ディンクルはマスクを置いて、ピースをじっと見つめた。「おかしなことを言おうってんじゃないだろうな」
「そんなことはないさ。メリマン中尉が言っただけのことなんだけれど……」
「あの間抜けめ。あいつはあんたたちに、恒星がみんな、こんなものだとは教えなかったかね」
「恒星はみんなだって」
「これがウルファの普通の大気なんだ」ディンクルはいたるところに生えている黄色い植物を折りとって、ピースの鼻の下に差し出した。「これを嗅いでみろよ」
ピースは言われたとおりにしてみた。「煙草じゃないのか」
「そのとおりさ、坊や。ウルファの表面は全部、この煙草で覆われているんだ。その上にあの小さな火山が熔岩と熱灰をまき散らしたとしたら……おや、どうしたんだい」
「いや、なんでもないよ」両手をコップの形にして口にあてがいながらピースは言った。「事態がこんなこととは思ってもいなかった、それだけのことさ。でも、勝利の栄光はどこにあるんだろう。戦いの崇高さはどこにあるんだろう」

「おれをようく見てみろよ」ディンクルはつっぱなすように答えた。「おれはまさにここで戦おうとしているんだぜ」
「でもなんのためになんだ」
「おれが知っているのは、ウルファ人のほうがはじめにことを構えたということだけさ。連邦の中で地球がほかの世界の国々にただ一つだけ期待したのは、共同権利憲章と自由貿易協定を尊重することなんだ。公正な話じゃないかね」
「そう思えるけど」安心したようにピースが言った。「ウルファ人はなにをしようとしたんだい。奴隷制とか、拷問の導入かね」
「それよりもっとひどいことさ、ウォレン。自由貿易をやつらはまるっきりめちゃめちゃにしたんだ。何種類かの地球製品の割当分を輸入することを拒否しやがったんだ」
ディンクルの声に奇妙な抑揚のついていることがピースの興味をひいた。「どんな種類の製品なんだい」
「巻煙草と葉巻さ」
「巻煙草だって。葉巻だって」
ディンクルは落ち着きはらってうなずいた。「それだけじゃないんだ——やつらは、あとの連邦諸国にも、値下げ煙草の洪水をひきおこそうとしているのさ」ディンクルは、国を愛する気持からくる怒りで、顔をしかめた。「ああいったやつらは、いま身にふりかかっている災難を受けるだけのことをしているんだ」
「でも、あいつらの立場からの見方もあるんじゃないのかい」とピースが言った。「つまり……」

「あいつらの立場があるだと」ディンクルが目を細めた。「おい、おまえはなにものなんだ、ウォレン。相対主義者なのか。グリーノなのか」
「いいや、少なくともそんな連中の仲間じゃないさ。ところで、グリーノってなんだい」
「おれの思っていたとおりだ――これは心構えを知る一種のテストなんだ」とディンクルが言った。「おまえは並の新兵とはとても思えなかったよ、ウォレン。そこでだ、メリマン中尉のことをおれが間抜けと呼んだにしても、知っておいてもらいたいのは、間抜けというのが親しみをこめた言葉だということさ。一番の戦友にも間抜けと呼びかけるんだ」そう言いながらディンクルは隣にいる軍団兵の肩を叩いた。「そうだよな、間抜け」
言われた軍団兵がディンクルの喉首をひっつかんだ。「間抜けだなんて言いやがったのは誰だ」
ディンクルはその男の手を無理やりほどこうとしたが、その喧嘩はすぐに、メリマン中尉のハンディ大佐のそばに集まれという命令で中止された。部下たちは、歴戦の古参兵も新兵も一様に、低い土の壁に背をもたせかけて坐っているハンディとメリマンを囲んで半円をつくった。その場には煙草の煙が絶え間なく漂い、見えざる機関銃がいかり狂ったように連射されていた。たった二、三時間前に地球で安穏にしていたことがピースには信じられないくらいだった。この軍団に加わる以前の自分にどんなことがもち上がっていたのかは知る由もなかったが、今のような苦しい状況に比べたらずっとましだったにちがいなかった。
「おまえたち全員に、ハンディ大佐が親しくお話しくださる」マスクを慎重にちょっともち上げながらメリマンが笛でも吹くような声で言った。にっこり笑いながらだったが、そのために楕円形の口が横にひき伸ばされ、両端にことさらのように歯が一本ずつあらわれた。「本官がそうで

あるように、諸君がハンディ大佐を全軍団中のもっとも優秀なる将校のひとりとして尊崇しているものであり、そのために——大佐が時間を割いてこの地に来訪され、嘱望されている絶妙な指導力と技能と勇気とをもって親しく現戦局を指揮されることを——本官同様——名誉と思い、特典と感じていることは、ようくわかっている」

ハンディは、ひとことひとことにいちいちうなずいたすえに、喉のところにある包嚢状の指令強制器の塊りを叩いて言った。「わしがこんなものを身につけていたくはないんだと知ったら諸君は驚くだろう。こんなものは値段が高いだけのばからしい器械であるばかりでなく、まったくの無用の長物にすぎないとわしは信じているのだ。機会さえ与えられれば、諸君のひとりひとりは電子的に強制されずに、誇りたかきテラのために命を捨てるだけの心構えができていることをわしはよく知っているのだ」

「もう聞いた話だよな」ディンクルがかたわらの兵士たちにうんざりだというようにささやいた。「これはやつのいつものやり口で、誇り高きテラの戦士が隊伍を組み、おそれもせずに砲口に向かって行動するところを見せて敵に心理的な脅威を与えようとするときにぶちあげる話なんだ」

「静かにしていろよ」とピースが言った。「そんな莫迦げた指揮官なんかいるもんか」

「あれがハンディ大佐の知っているただ一つの戦術なんだ——それで名が売れているんだぜ」ディンクルは荒々しく唾を吐いて話を中断したが、時すでにおそく靴にひっかかったのがわかったので、爪先の唾をふきとった。

「なあ、おれたちは一巻の終りだ」

「……諸君を公平に扱おうと思っている」ハンディの話が続いた。「この戦区の状況は芳しから

ざるものがある。誇り高きテラの戦線はあまりにも手薄であり、あまりにも……ああ……激戦である。アスパトリアでのようにすぐに勝てるなどとはわしにも約束ができない。しかしながらわが軍には非常な利点がある。敵のもっていない偉大なる武器がある——それすなわち、負けることを知らぬ精神である。ウルファ軍はろくに訓練を受けておらず、弱虫の烏合の衆にすぎない。なんとか戦いはするがそのやり方というのは、覆いの下でこそこそすることであり、岩のうしろから発砲するだけのことである」敵はわが軍のような常識をもたないということにあらわな軽蔑の表情を示そうと、ハンディは話に一息入れた。

「この戦区でわが軍がこれから行なおうとしていることは、わが無敵の武器を、わが道徳上の優越性を、わが軍の精神を用いることである。ウルファ軍は、わが軍が自分たちと同じ胆っ玉の小さな方法で戦うだろうと考えている——だがわれわれは、まともに前進してやつらを驚かそうとしているのだ。頭を高々ともたげ、軍旗をなびかせながら、真正面から突進するのだ。誇り高きテラの戦士が隊伍を組み、おそれることなく砲口に突進するのを見た敵が心理的におじけづいて、どれほどの衝撃を受けるか、諸君にも想像できよう」

ハンディの話を聞いている者たちは、言われたことの意味を想像して、不安気にもじもじした。「もちろん、不測の事故がおこるかもしれない」好ましい反応がみられなかったことにがっかりしたのか、ハンディは話をつけ加えた。

「敵がしっぽを巻いて逃げだすまでには、かなりの打撃を受けるかもしれない。しかし戦史をひもといてみると、これと同じような栄光に輝く戦歴が数知れずある。かの光旅団（ライト）の突撃を想い出してもみたまえ」

ベンジャーが片手をあげた。「大佐、その光旅団が突撃する映画を見たことがあります。でも全員が戦死したのじゃなかったでしょうか。たいへんな失敗じゃなかったんですか」

「つねりを十回だ、ベンジャー」メリマンが命令したが、不愉快に感じたのか、舞台の背景をスポットライトがむだに照らしまわるように歯が動いて、口をもごもごさせた。兵隊のほとんどは気晴らしになるのを喜んで、ベンジャーが自分を罰する光景をふり返って眺めた。ちょうどそのとき、砲弾がすぐ近くで炸裂したので一同はいっせいに身を伏せた。破片が散って木の葉がざわざわ音をたてた。ピースが身をおこしてみると、二、三メートル先でひとりの兵隊が声もたてずに苦しがってのたうちまわっていた。赤十字の腕章をつけた男がふたり、その兵隊を拾いあげて、さっと後退していった。

「諸君はいまの砲撃を見たことと思う」ハンディ大佐がきびきびと言った。「諸君はいまの砲撃を見て、志気を鼓舞されもし、勇気づけられもしたと思う。敵が連邦の進歩した恒星間社会の一員としてとどまるのを拒否していることに感謝しなければならない。そのためウルファ人は、旧式な発射式の武器だけに頼らざるをえなくなっている。わが誇り高きテラの兵士はそれに反して、最新式の放線ライフルで武装しているのであって、着弾距離も無制限なら精度も卓抜しており、これ一挺が、敵のあわれな機関銃十挺ほどにも当たるのである。

そこで諸君に、ここからとび出していって、そのライフルを使ってもらいたい。うまく使ってもらいたい。とび出せ。誇り高く頭をもたげて、おそれることなく進撃し、あの汚いウルファ人をひとりでも多く殺せ。この銀河系社会を、正しい考えをもつものが住むのに適したところとするためにだ。すなわち住むのに……ああ……その中に」

メリマン中尉は、そんな必要がないのに気づかなかったのか、鳴りやまぬ拍手を鎮める男のように両手をふって言った。「諸君、わたしがそうであるように、おまえたちもいまのハンディ大佐の言葉に感銘をうけ、勇気づけられたことと確信する。だが諸君、話をしているようなときは終った——いまや塹壕からおどり出て進むときがきたのだ」

「やつはそれでいいだろうが」とピースがつぶやいた。胃の中に氷に似た冷たい塊りが生じた感じだった。「おれたちが塹壕からおどり出て進んでいるあいだ、やつはここに残っている気なんだろうな」

「いや、そんなつもりじゃないんだ」ヘルメットのあごひもを締めながらディンクルが言った。「突撃の指揮をとるのは、軍の学校を出た間抜けな若僧なんだぜ。だからあいつらは長くもたないんだ——はたち以上のやつなんか見たこともないものな」

「なんでそんなことが」

「伝統なんだろうな。あいつらはみんな同じことさ——間抜けという以上に、頭がおかしいんだ」

「たいしたもんだな」苦々しげにそう言いながらピースは、立ち上がり、片手を水車のようにまわし、崩れおちやすい土手をかけのぼるメリマンを眺めた。するとすぐに砲火の音がはげしくなった。束の間ピースは、その場にうずくまって、動かないでいようと思ったが、目に見えないワイアブラシが頭の内側をこすりつづけたので、状況がよくわからないままに立ち上がり、ウルファ軍の陣地めがけてかけ出した。

あいかわらず靴がぶかぶかしすぎて、なかなか前へ進めなかったので、前方にいるはずの隊員

たちは煙にかくれて見えなかった。ブーツをぴったりさせようと、がんばって足の指先をまき上げていると、以前に気づいていた靴の中のおかしな突起物のひとつがちょっと押しさげられた。そのとたんピースは、オリンピックのスキー競技でみごとなジャンプを披露する選手のように、ブーツの押しあげる力にのって空中にまいあがった。びっくりしすぎて叫び声もたてられなかったピースは、なんとかバランスをとろうとするとともに、ブーツがはなればなれの方向に動いて自分をひき裂きそうにするのでこわくなって懸命に両脚をそろえる努力をした。ブーツがみえざる力で戦友の頭上はるかに、人まかせの放物線をえがいてピースを運んだので、二、三秒もたつとピースにはどこが地面やらわからなくなった。すると急にこの星の地面が目の前にせり上がってきて、ピースは、片足で、腕をぐるぐるふりまわしながらの不様な着陸をし、煙草の草むらに投げだされた。

風に吹きつけられ、この体験に意気阻喪したピースはどっかと坐りこみ、おそろしげに赤と金のブーツを調べてみた。エクレス要塞の必需品事務官がこのブーツのことを星組騎兵七つ組みと呼んだが、おそまきながらピースにもその理由がわかってきた——片足ずつに超小型の反重力機が埋めこまれていたのだ。そのとき前方で木の枝がぽきっと折れる音がしたので、ピースが立ち上がっては危ないと思って見上げると、黄褐色の制服を着た男がひとり、もやの中を警戒しながら進んでいるのが見えた。旧式の銃をもっていたので、たちどころにウルファ軍の兵隊だと識別されたが、その男のほうもピースと同じくはっとし、あわてたように思われた。

男がまさに行動をおこそうとしているのにぎょっとし、むかついてきたピースは、それでも頭に埋めこまれた命令にそむくこともならず、敵よりはるかに優秀な自分の武器をとりあげた。こ

のウルファ人を素早く、あっさりと殺してしまおうと心臓に狙いをつけて引き金をひくと、殺人光線が一閃してほとばしり出た。ピースの心の一部では、はずれてくれればいいがと祈っていたが、この致命的な紫の光線は的をはずさなかった。ウルファ人は片手を胸に叩きつけると同時に、苦痛と驚きに叫び声をあげたが、つぎにはぐるりと向きをかえ、銃の狙いをつけてピースのほうに自動小銃を発射してきた。

絵ではあっても恐竜には効果があったと思った銃が中背の男ひとりを倒せなかった理由がなぜなのか見当もつかなかったが、ともかくピースは遮蔽物の中に身をこごめた。うまく行かなかった理由をあれこれ詮索している暇はなかった——旧式な武器だろうが何だろうが——ウルファ兵のライフルがピースの頼みとしている植物の遮蔽物をばりばりと刈りとり、弾がピースのこの軍団における短い軍歴を終らせるのは数刻に迫っていたからである。もうだめだと観念したピースは、その絶望の中で、この苦境に追いこんだ当の七つ組みブーツが逃げる役に立つかもしれないと希望を抱いた。

ピースはとび上がる心積りをして足の指を動かし、制御ボタンにさわってそれを押した。

深呼吸をする間もなく、反重力装置が作動しはじめたが、ブーツは——期待したように目のくらむような上昇はせず——平らな軌道をえがいてピースをまっすぐ前方に運んだ。かがみこんだ不様な恰好のまま、薄闇の中を自分のほうへうなりをあげてとんでくるピースを見て、ウルファ兵は口をぽかんとあけた。自分のくつがさらに勝手な方向へ動こうとするのにあわてたピースは、体の位置を安定させようとしたが、ブーツは重心よりさらに前へと波うって進んだので、行きがかり上、ピースの身体はうしろへかしがった。背中にはげしい衝撃を受けたので、よく見ると、

自分が敵兵の胸の上にぴったりと乗っかっているのがわかった。その衝突で赤と金のブーツは足から脱げ、重荷を支える必要もなくなったので、びっくりしたおうむのように空高く舞いあがった。ブーツが天頂のほうへ消えるのを錯雑した気持で見つめていたピースは、ライフルもないのに気づき、いよいよ死の危険が迫ったことを感じた。そこでおそまきながら敵兵の喉をひっつかんだが、ひどく息をつまらせて動けずにいるそのウルファ人が卑屈なほどの恐怖にとらわれて見上げる姿をあわれに思って、手をはなした。

「手出しをするんじゃないぞ」と言ってピースは立ち上がった。ピースが落ちている二挺のライフルをみつけて拾いあげたとき、あたりを取りまく煙の中から、ディンクルとライアン、それにファーが姿をあらわした。

「やあ、ウォレン。おれたちの先をどうしてこせたんだい。だって、あんたは……」横になってのびているウルファ兵の姿に気づいたライアンが目をむいて言った。「こいつは死んでいるのかね」

「いいや」そう言いながらピースが、ウルファ兵の黄褐色の制服をおかしいなと思って調べてみると、胸の左側に、かすかに焼け焦げた跡があった。ディンクルのほうに向き直り、自分の放線ライフルを手渡しながらピースが訊いた。「これになにかおかしなところがあるんだろうか。二十メートルくらいの距離からこの男を撃ったんだが、こいつを気違いのようにしただけだったぜ」

ディンクルが肩をすくめた。「よくおこることさ」

「でも聞いた話じゃこのライフルは、無限の射程距離をもっているうえに……」

「それは煙の中での話じゃないのさ――空気中の粒子がえらくエネルギーを吸収するんだ。もやの中でも同じことなんだ」

ディンクルは、いやな話を仲間にもらすという陰気なよろこびをかみしめていた。「とはいっても、もやがちょっとでもかかっていれば、クロケットのバットでだって自分を守れるというものさ。ましてや煙となれば……」

「まちがっていたらごめんよ」とライアンが口をはさんだ。「戦場というのはいつだって煙がかかっているんじゃないのかい」

「敵さんが鉄砲とか爆弾とか火炎放射器といった旧式の武器を使うときならたいていはね」

「となると、考えていた以上に事態はよくないようだな」丸々した顔を蒼くしてライアンが言った。「ほかに放線式の武器を装備している国はあるんだろうか」

「われわれの同盟軍だけさ――進歩した武器を装備しているのはね」自分の言葉にふくまれている皮肉が通じただろうかと三人の戦友をながめわたしてからディンクルは、さらに問題点をならべだした。「敵と仲よくしていて――争うのは味方とだけというような制度をわれわれが確立できた暁には――申し分がなかろうが、問題は……」

「そんなたわごとをおれは信じねえぞ」独得のしかめっ面をしながらファーが言った。「アスパトリアはおれたちがやっつけたんじゃねえのかよ。ハンディ大佐が手早くやっつけたと言ったじゃねえか」

驚いたことに、ディンクルが不安そうな様子を示した。「おれに言わせるなら、あの戦いを終らせたのはおれたちでもなく、アスパトリア人でもない――それはとびかかりじゅうたんだった

のさ。とびかかりじゅうたんとオスカーたちさ」
知っているかぎりでは、その言葉になんの不吉な意味合いもふくまれてはいなかったが、それでもピースは心にかすかな不安を感じた。「とびかかりじゅうたんとオスカーたちってなにものなんだ」
「知らなくて幸いというものさ――いちど、おれの相棒にとびかかりじゅうたんがとりついたのを見たことがあるがね」おそろしい記憶が列をなして目の前をとおりすぎているのか、ディンクルは眼の焦点が合わない様子だった。「木からとびおりてきて、とりついたんだ。相棒めがけてまっすぐにね。大きなじゅうたんのように包みこむと、相棒を消化しはじめた。あの悲鳴を忘れようったって、忘れられはしないさ。おれがそのそばにいたのは相棒にとってよいことだった。あいつはまだ幸運だったたんだ」
「あんたは、友達からなんとかそれをひきはがそうとしたんだろ」ライアンが先をうながした。
ディンクルはかぶりをふった。「何秒かのうちにはもっと苦しむんじゃないかと思ったので、その前に銃で撃ってなんとか死なしてやろうとしたんだ。でもそれだけのあいだ待つという危険はおかしたんだからな。まあおれが戦友にしてやれたのはそれだけのことさ」
ライアンがディンクルからそろそろと遠ざかりながら言った。「おれにはそんなご親切をしてくれるなよ。おれが苦しんでいるときには、そっぽを向いて……」
「ここでなにをしているんだ」幾重にもなった煙のカーテンをかきわけてよろめきながらやってきたメリマン中尉の声がガスマスクのためにこもって聞こえた。「おまえたちはどうして前線へ移動しようとしないんだ」

「兵卒ピースが捕虜をつかまえたんです、中尉」ディンクルが横倒しになっているウルファ人を指さすと、その男は息をふきかえしそうな様子を示した。「いま、訊問しようとしていたところなんです」

「りっぱな働きをしたな、ピース。よく頭をつかったものだ」戦功を認めたといった目つきでメリマンはピースを見た。「将来はまちがいなく、おまえを前線にはりつけておくようにするぞ」

「ありがとうございます、中尉」このあらたな情況の展開はちっとも歓迎すべきことではなかったが、たったいま、ディンクルが話してくれた戦闘中の出来事が奇妙なほど心にひっかかったので、ピースは、ウルファ軍の弾を身に受けるかも知れぬ、ということなど少しも怖くはなくなっていた。とつおいつのそんな考えが中断されたのは、ブーツもくつもはいていない脚が地面にべたべたとくっつくように思われたからだ。足もとを見おろすと、地下から滲みあがってくる黒いタール状のものの上に立っているのがわかった。苦労して靴下をつかみ、もっとましなところに移動した。

「捕虜を訊問するとするか」メリマンが足先でウルファ兵をつついた。「いいか、地球の外に住むこの臆病犬め。この地区にいるおまえたちの軍隊の兵力と配置について、おまえの知っているかぎり話してみろ」

ウルファ兵はおき上がって片肘をついた。「撃とうというのかね、拷問にかけようというのかね」

「厚かましい奴だ」あきれたようにメリマンがぐるりを見わたした。「テラは捕虜をそんなふうには扱わんよ」

「そんなら」ウルファ兵が気楽になって言った。「あっちへ行け」
かっとなったメリマンはガスマスクをひきおろしたが、煙っぽい空気を肺いっぱいに吸いこんだので、また元に戻さざるをえなかった。メリマンはむせて、咳きこみはじめたが、その発作のたびごとにゴムのマスクがものすごい勢いで顔をうったり、ふくれあがったりしたので、顔の露出した部分がすもものように深紅色にかわっていった。
「あんな言い方で話したってだめですよ」そう言いながらディンクルは中尉の背中をこぶしで叩いた。「わたしに別のやり方をさせてみてください」
「どう……」メリマンが眼の涙をふいた。「どうしようというんだ」
「昔ながらの、同情をかけるというやり方ですよ、中尉。失敗しっこありません。見ていてください」ディンクルはポケットから平らな容れ物を二つ取り出すと、捕虜のかたわらにひざまずいた。片方の容れ物を開けると、たばこのような白い細長い筒状のものが一列あらわれた。ディンクルはそれをウルファ人につきだした。「一本どうかね」
「ありがとう」ウルファ人は円筒の一本を取りあげて唇にくわえ、熱心に吸いはじめた。その顔には満足気な表情があらわれた。
「なにをしているんだね」メリマンが問いただした。「火もついていないじゃないか。何を捕虜にやったんだ」
「ウルファ人はたばこの代りにあれを使うんです、中尉」ディンクルは立ち上がって、中尉に容れ物を見せた。「先週、トラックの荷物を一台分、とりおさえたんです、地元の連中は年がら年中、たばこの煙を吸っているんで、この長いフィルターを通して純粋の空気を吸いこむといい気

持になれるんです。こっちの商標のは、強く空気を吸うもの用なんです。でも――一部のウルファ人、ことに女は、こっちの弱いほうを特に愛用しています」ディンクルはもう一方の容れ物をあけ、一列にならんだ筒状のものを見せた。地球と同じ形の、フィルター煙草をひっくり返したようなもので、一本一本は主としてフィルター部分からなっており、反対側の端に煙草の詰まった短い部分があった。

「胸のむかつくような習慣だな」とメリマンが言った。「ところで、奴からどれだけ訊きだせるかだ」

ディンクルが捕虜のほうに向き直って、その手に容れ物を二つわたした。「たくさん取れよ、あんた――わが軍団からのあいさつ代りだ」

「ありがとう」ウルファ兵は平らな受け皿をすべらせて開け、中味をあらためた。「あれ、クーポン券がないな」

ディンクルは気がとがめて、一束の青い券を渡した。「さあ――少しは協力してくれるかね」

ウルファ兵は息を深く吸いこんでから言った。「あっちへ行け」

捕虜にそれなりに強い興味をもっていたピースがこのときかっと怒って、煙、と、り、を取りあげようと前に進み出た。するとウルファ兵は縮みあがって、恐怖に顔をゆがめた。

「あの人をわたしのそばに近よせないようにしてください」わめいた男は、眼でメリマンに哀願した。「あの人をとびかからせないようにしてください」

メリマンは疑わしげな目つきでピースを見た。「この男に、おまえは何をしでかしたのかね」

「わたしはただ……そのう……あいつにとびかかっただけです、中尉。見てのとおり――武器を

持たない闘いだったんです」
「ウォレンはどこか特別なところのある男だって言ったろ」ライアンがコップグロウヴに言った。
「まちがいなしにウォレンは、おれたちに必要な情報を手に入れるぜ」そう言ってからライアンはピースのほうを向いた。「さあ始めろよ、ウォレン。あんたがあいつにとびかかるところを見せてくれ」
「話しますよ」メリマンの脚にしがみつきながらウルファ兵が言った。「ねえ、もう話をしているんですからね。二、三の工兵と斥候のほかには、この地区にわが軍は一兵だっていやしません。砲火はすべてロボット兵が発射しているので、あなたがもし迂回して背後にまわれば、ロボットのスイッチを全部、切ってしまえるんです」
「一兵もいないんだって」とメリマンが言った。「どうしてそんなことがありうるんだ」
「あの物質ですよ」ウルファ兵は、ピースの立っている粘着質の部分を指した。「ここはタール分の多い地区なんです――わが軍の兵隊は大部分が、いまここを取りまいているような煙を吸いたくないんです。でも個人の資格で言いますが、この煙はあなた方になんの害も与えないんです。わたしの祖父はこれを毎日吸っていたんですが、九十歳まで長生きした。つまりわたしが言わんとすることは、もしあなたがたが……」
「黙れ」とメリマンが命じた。「いまのおまえの話は信じられんね――ずるがしこいウルファ人のわななのじゃないのか。われわれにとって物騒なのと同じくらいに、おまえにとってだって、ロボット兵はたいへんに危険なはずじゃないか」
捕虜は首をふった。「わたしたちは、コード化された敵味方識別信号を発する送信機をもって

歩いているんです。もしよろしかったら、わたしの送信機をお貸ししましょうか——その近くにいつもいていいというお許しさえあればね」
「奴のそばへ来てからは、まったくもって物音ひとつしませんね」とピースが言った。「銃弾ひとつ、砲弾ひとつ、わたしたちの近くにはとんで来ていません」
「でかしたぞ、兵卒ピース」メリマンのそれでなくてもか細い声が、防毒面の中で消え入るようだったが、いまの話に昂奮していることは紛れもなかった。「このことが、全戦局における転換点となるだろうから、すぐにハンディ大佐に報告申し上げよう」そう言った中尉は、腕につけた通信機を口の前にもちあげた。メリマンが大佐と話しているあいだに、ライアンはピースの手をにぎって、力強く握手した。ファーでさえ、しぶしぶながらも友好的になったように見えた。
「たいした奴だな、ウォレン」とライアンが言った。「いままでの状態のままでいっていたら、おれたちは一週間ともたなかったろうよ。ところがいまじゃすっかり、戦勝祝賀会でもやっているような気分さ。おれはいつも、戦車の脇に乗って街なかを走れないかと夢みてきたんだ。女たちがおれに花を投げる……女たちがおれに煙草を投げる……女たちがおれに娘っ子を投げる……」ライアンが話を急にやめた。メリマン中尉のかわしている無線の会話にかすかだが疑いようもなく言い争う調子がしのびこんでいるのに気づいたからだ。予期していなかっただけにその意見の衝突が目だって聞こえた。
「あらゆる観点からしまして、大佐」とメリマンが言っている。「わが軍が隊伍を組んでおそれることなくロボットの銃に立ち向かって進んでいることをウルファ軍が聞いたときに、やつらが心理的に衝撃をうけておじけづくとはとても信じられないのであります。かえって、笑いとばす

のが落ちだと思いますが。上官殿の戦術理論を立証するいま一度の機会がえられず、失望なさっていることは、ようく理解いたしておりますが……」
メリマンは話を打ちきらざるをえなかったのか、しばらく聞き手にまわって、うなずくように頭をふった。「そんな意味で申しあげたんじゃありませんが、上官殿が……」
メリマンはまた聞き手にまわり、はいはいと答えていたが――意外なことに、肩を落しはじめた。「はい、大佐。テラのために死ぬのは名誉なことと存じております」
ライアンがピースの腕をつかんだ。「あんな言葉つきからすると何かありそうでいやだな、ウォレン」
メリマン中尉は通話を切って、顔を他のものたちに向けた。ガスマスクをはずした中尉は、咳きこまないようにいささかの努力をしたが、口が歯の防火カーテンの前で上へ、右へと移行したのでコンマ（1）のような形に見え、暗いかげをおとした。
「ハンディ大佐が祝福の言葉を送られた」一呼吸おいてから中尉が言った。「かくも価値ある、智謀にすぐれた戦闘隊であることが立証されたので、おまえたちはただちに恒星スレルケルドに転進することになった。その地には、二、三時間以内に到着する。もちろん、わたしもおまえたちと一緒だ」
ライアンが指をゆり動かして、中尉が注目するようにしむけた。「スレルケルドというのは、休暇と休養のとれる世界なんですか、中尉」
「死と破壊の防ぎ方について、自分なりの考えが持てないかぎり、そんな世界の話は関係なしだ――あっちでは、地球から送りこむ以上に、どんどんと兵員が失われているんだ」

「ああ、なんてこった」ライアンがピースのほうに向き、咎めるように顔をこわばらせた。「おまえが悪いんだぞ、ウォレン――つぎの戦場へ向かうんだ、コーヒー一杯飲んじゃいないっていうのに」

ピースは、憶い出せるかぎりの罵言でそれに応じたが、心にひっかかるところがあってそれもぼんやりした調子でだった。今度のことが、まともな人生を送る唯一の機会だったということがピースにはっきりとしてきたからだ。任務がどれほど不可能に近いものであろうと、行く手にどれほどの困難が待ちうけていようとかまわないが、自分はなんとか記憶を取り戻して、軍団との契約を無効にしなければならないと考えた。ただ問題は、どこから手をつけていいかがわからないことであり、いまは地球にいるわけではないので、以前の生活で自分を知っていた人間を見つけ出す機会などはおよそ皆無に近いのではないかということだった。

そんな思いを胸にピースは、他の連中と一緒に乗船地点に向けてとぼとぼと歩いていたが、考えることはどうしても自分の過去にまつわる秘密にとかえっていった。悪にどっぷり漬かっていたにちがいないと周りの人々は確信をもって言い続けているが――心の中で棚卸しをしてみても――そこには反社会的な欲望というものが皆目、見いだせなかった。こんな情況がピースに哲学的な難問をつきつけた――犯罪的な傾向を一揃い皿に盛って差し出されたにしても、ピースにはそのうちのどれひとつを認めることができようか。意識して自分のことを〝悪〟と考える男がどこにいようか。冷酷な悪者がなにかわるいことをおかそうとしたときでさえも、その男は社会の他の構成員と同じくらい、自分は正当なことをしているのだ、〝正しい〟のだと感じているのではないか。

ピースの思弁は、四角い亜鈴の形をした宇宙船が現われたので打ち切られた。宇宙船は、ぼやっとした弧を描いて空から降下し、軟らかい地面の定位置にどしんと着陸した。人影もなしに中央のドアがぱっと開くと、メリマンが全員に乗船するよう命令した。ピースはみなと一緒に乗りこんだが、なにも穿いていない脚が冷たい金属の床にふれたので一瞬たじろいだあと、用意された座席ベルトの奪い合いに加わることもなく、気落ちした様子でベンチに腰をおろした。宇宙飛行の危険は、戦場の危険に比べたらなきに等しかったが、冷静に現実をみつめてみると、全軍団のどの新兵よりもピースには逃げだせるという希望がなかった。過去の秘密を解明する鍵ひとつ見当たらないピースは、恰好がわるく、見たところはどれも同じような宇宙船に乗って、銀河じゅうをあちこちとふらつくよう運命づけられ、そして……

ピースの眼は突然、目の前の床にある青くて小さい品ものに釘づけになり、そのことからピースには、この宇宙船が実のところ、ウルファへ来るときに乗ったものだとわかった。この前ピースが見たこの小さなプラスチックのひき蛙は、潰されて平らになってしまっていたが、その分子がもつ記憶から、元の形に戻っていた。自分も同じように不死身でありたいと望んでいるピースは、小さなひき蛙を取りあげ、親近感をおぼえながらそれを見つめた――もしひき蛙がピースに話しかけることができたなら、ピースのなじみだった人たちのことを語ってくれたろう。

「なにを見つけたんだ」そばに坐っていたが、ピースの拾いあげたものが何だかわからなかったディンクルは、よく見ようとして身体を横に傾けた。「ははあ、誰かが豪遊したな」

ピースが、まさに跳びはねようとしたひき蛙をうまくつかんだ。「どういう意味なんだ」

「アスパトリアの〝青いひき蛙〟でこんなものをくれるのさ」

「〝青いひき蛙〟だって」ピースは自分が昂奮してくるのを感じた。「そいつはバーなのかね、レストラン？　ナイトクラブ？」

ディンクルがうなずいた。「タッチダウン市じゃ一番すてきなところさ。それどころか、アスパトリア一だろう。新兵の給料であんなところへ行きたがるなんてね、参った、参った」

「そりゃ、あんたのとりようしだいさ」そう言いながらひき蛙をポケットにしまいこんだピースは、心の奥である決心をした。「そういった場所に足をふみ入れないわけにはいかない奴だっているのさ」

5

さまざまな観点からしても、空が黄色い恒星、スレルケルドは、ピースが思っていたほどの悪夢の星ではなかった。

ウルファでの戦争は、意見が違うからと地球を出ていった植民者に対する警察行為であったが――さらに言えばピースは、人間が人間と戦うという考え方にびっくりしたが――スレルケルドでの軍団は、ジャングル大陸が採鉱作業に安全になるようにするだけのことだった。そのうえ、この星には気のきいた土着の生物がいなかったので、野生動物を狩りあつめるといった商業主義の繰りひろげられる余地もなかったことが、ピースにとっては気休めにもなった。そのうえ、このスレルケルドでは、軍隊生活のよい点をならべたてていた自分なりのリストが、突然打ち切られることにもなった。

スレルケルドのジャングルに住む動物は、あまりにも獰猛で醜く、種類も多かったので、自然がこの世界を、反吐のでるような動物の展示場にしているのではないかという印象をうけたほどだった。自然は精妙にも、植物に見せかけて餌をつかまえる動物だとか、動物に見せかけて餌を捕える食肉性の植物をつくりだしていた。脚でふみつぶすと逆に繁殖する昆虫もいた。というの

は、その内分泌液が一秒以内にプラスチックの靴底をとおしてしみこみ、それに含まれた卵が肉の部分にふれるやいなや何百という貪欲な蛆虫にかえって、人間の足を一分もしないうちに骨ばかりにしてしまうからであった。

電気蛇とか、縛り首蛇、匕首蛇(あいくち)というのもいた——みな、その名のとおりだったし、擲弾鳥、まさかり鳥、頭蓋骨つつきという鳥たちも、その名のあらわすとおりだった。もっと変わった生態を示す装甲化け物もいて、光線メスでこま切れにされたときでさえ、ばらばらの四股は半日ばかりも狂った大長靴のようにとびはね、ひとつの体だったとき以上に害を与えることがしばしばあった。

二〇三連隊の兵にはそれぞれに、大嫌いな動物があり、しかもそんな動物は周りにうようよいたのである。ピースにとって一番いやだったのは〝かみすぎ(マルチチュー)〟ときまっていた。一種の合成動物で、はじめて見ると巨大な芋虫のようだが、一つ一つの分節はそれなりの動物でもあった。それぞれの部分は大まかに言うとチーズの形で、それに短くごつい四本の足が生えており、顎は狂暴そうで、上面と下面のあいだはくすんだ中間層となっていた。それぞれの分節は一つの個体と同じくらいに危険で——あわてて逃げだすときのいやらしい足台はライフルで撃つのがむずかしかったが——それがさらに十か十二も集まると一本の鎖のようになり、その分だけでものすごくなって、押しも押されぬ〝かみすぎ〟となった。この合成動物を倒すには少なくともその半分を殺す必要のあることがピースにはわかったが、その際でもやられなかった分節はすぐにはなれればなれとなり、まわりじゅうからあらためて攻撃してくるのだった。このような状況がわかってきたとき、ピースは、飾りになるばかりで機能性におとる装備ではなく、防禦カップに乏しい資金を

投じてくれた美味蝦ソース会社に、おそまきながら感謝した。
　ピースはまた、逃亡計画をあらためて進める決心をしたが、それはつぎのようなものだった。
　まず第一段階としては、ちょっとしたことだが重要な情報をメリマン中尉からほじくり出すことだった。だが中尉は愛国の熱情をあきらかに取り戻して、目覚めているときの大部分を、動物たちとの格闘が最高頂となるようにしていたので、会って話をするのがむずかしかった。スレルケルドについてから三日たってピースは、中尉をなんとか野戦調理所の近くでつかまえることができた。自分がうまくはめられたことがわかったとき、メリマンは不愉快に思って口を何度か押しつけようとしたが、うまくは行かなかった。
「いまはおまえと話している暇なんかないんだ、ピース」笛のような声でそう言ったメリマンは立ち去ろうとした。「お喋りしながらつっ立っていたって、テラの役には立たないんだぞ」
「でも、そこんところなんです、中尉」若い将校の興味をひきつけられると思える言葉だけを口にしながら、ピースはさからった。「われわれにもできるって信じているんです」
　メリマンがふり返った。「心に思っていることは何なんだ、ピース」
「はい、中尉。あの〝かみすぎ〟のために多くの兵士を失っています、それで……それで……」
ピースは、自分の口が勝手に嘘をついているのにびっくりしながら耳を傾けた。「あいつらと戦うのにずっとましな方法を思いついたんです」
「よし、聞こうじゃないか」
「では」ピースの心の中では、アイディアを求めて追いかけっこをしていた。「では申しあげますが、あいつらは十四かそこいらが一緒になったときが一番危険なので、そんなことが起こらな

いようにするのが何よりです」
「どんなふうにしてだ」
「オイルをふきかけてやるんです、中尉。そうすればあいつらは互いに滑ってしまいます。なんかの潤滑油でいいんですが——日焼け止めオイルだって役に立ちます」
「それは」険悪な調子でメリマンが言った。「愚劣な考えだ」
まさに同じ意見だと思ったピースは、メリマンの腕をつかんだ。「あるいは、お互いの分節間の神経信号を遮断するようなものでもやつらに噴霧したらいいんじゃないですか。すぐに乾燥するワニスならいいと思いますが。ヘアスプレーはどうでしょうか」
「日焼け止めオイルやヘアスプレーを要請しはじめたら、テラにいる連中はこの連隊のことをどう思うかね」メリマンは、ピースがつかんでいる腕をふりほどき、疑わしげにピースを見つめた。
「これはある種の破壊分子グリーノが仕掛けたわなじゃないのかね」
「どうかそんな言い方はしないでください、中尉」熱心に言ったので、ピースは最後にはこの会話が望んでいるとおりの方向にかわってきたのを感じた。「軍団に対し、中尉殿に対しこれほど忠誠を誓っているものはいません。知っておいていただきたいんですが、中尉殿の命令にわたしが服従するのは指令強制器なんかじゃありません——それはわたしが……その……テラを愛しているからですし、将校としての中尉殿に敬意を払っているからであります」
「おれにお世辞なんか使うんじゃない」
「本当のことです、中尉」
「本気でそう言ったのなら……」

「もちろん本気で言っているんです、中尉、本気です」
「そうか、ありがとう、ピース、まったく初めてのことだな、誰かが……」メリマンは幾度か目をしばたたいてからハンカチを取りだし、鼻をかんだ。「最高司令部のもっと多くの将校がナイチンゲール大将のように、自分の軍管区での指令強制器使用に反対してくれたらいいのにと思うことがときどきあるんだがね。つまりだ、自分には生来の指導力があるのかないのかをどうかして知りたいのさ」
「そいつはたいへんな問題ですね、中尉——誰かが中尉の喉に小さな、莫迦げた振動板をとりつけたばっかりに……どれくらいの周波数だって言われましたかね。毎秒八千でしたっけ、一万でしたっけ」
「一万二千だ」ぼやっとした調子でメリマンが言った。「なあピース、おまえと話していると楽しくてな。おまえがこれほど鋭敏だとは思わなかったし……どこへ行くんだ、ピース」
「前線に行かなくちゃならないんです、中尉」ピースは、人間が制覇している区域の境を示す緑色のジャングルの壁を手振りでさした。放線ライフルの光の束が、おおいかぶさった植物の暗がりの中で不規則に光っており、ときおりきらめく紫の光は、光線メスが使われていることを示していた。兵士たちの叫び声や、自分の生まれた土地から徐々に追い出されて行くさまざまな生き物のほえ声や、がんがん、しゅうしゅういう声が大気中に満ち満ちていた。火線のほうへ走って行くとき、中尉を心理的にあやつったことについてピースはいささかの罪の意識を感じたが、たとえ生き残れたにしても、自分のやり方がいつだって良心的とばかりは言っていられなかろうと思った。

注意ぶかく周囲を見わたしたピースは、ものの数秒とたたないうちに次なる段階に必要とされる大切な品物——電子部材の入手先をつきとめた。それは放線ライフルの形をとってジャングルの下草の中によこたわっていたが、なにかの暴力的な力で異様に変形していた。これを以前所持していた人物も自分と同じような心理状態にあったことをピースは少しも疑わなかったので、使う前に有機物の残りをこの武器から拭きとらなくてすむとわかってほっとした気持だった。そのライフルを拾いあげたピースは、光線発生器のパックをかちりと音をさせて取り出し、ポケットにおさめた。

そのとき、成熟した一匹のむちうちかみつきが、名前どおりの二つの動きをせわしげにしながら、木の下のほうの枝からピースにとびかかってきたので、ピースは、自分のライフルを使えず、肩にかついだまま、手中の毀れた武器でその生き物を叩きのめすのに数刻をついやした。たっぷり汗をかき、あわてふためいてわけのわからない言葉をくちばしったすえにピースは、なんとかその動物を気絶させ、光線を五秒間、浴びせかけた。

この出来事は、充分に警戒をしていないとどんなことがおこるかわからないということを思いしらせた。ピースは、大脳の働きがもっと活発になって充分役に立つような条件になるまでは、逃亡計画を頭の中から追いだしておこうと決心した。つぎに注意しなければならないようなことが一時間後におこった。名前を聞きそびれたが、昂奮しやすいラテン系の新兵がピースの二、三メートル先で鱗におおわれた化け物にすくいあげられ——断末魔の、絶望的な金切り声で「ぼくのママ」と叫びながら——洞穴のようなその口につめこまれていった。

暗闇がその日の闘いに終りをつげたとき、メリマン中尉の部隊で生き残ったものたちは野営地

の退避所に連れ戻されて、それぞれにお粥が一杯ずつ与えられ、干草の束のうえに休むことが許された。草は一カ所にかたまりがちで、ひとりでに動きまわり、根が身体のへこんだところに忍びこんだりしたので、疲れていたけれども新兵たちはほとんどのものが寝つけなかった。

ピースは隅っこに腰をおろし、藁の人をまさぐるような蔓先をつみとるだけにとどめて、ライフルの光線発生器パックを分解しはじめた。テントの中の照明は、複雑な仕事をするには暗すぎた。しかしピースは、自分の指が回路をいじくりまわすのに天性の素質をもっていることがわかってうれしかった。このことがなにを意味したかというと、ピースが自分の頭の中で推測して行くエレクトロニクスの知識が、宇宙船について推測したときのように現実ばなれのしたものであったら、ピースの計画もおじゃんになっていたろうということだった。

ピースは二時間も仕事をしたが、ボタン式の接点が全面的につかわれていたのはありがたかった。ハンダづけの道具がなくても回路を組みたて直せたからだ。二時間近くたったころ、かぎられた範囲内のものではあったが、軍団の指令強制器を作動させる周波数レンジ内のすべての音波振動を無力化する小型の装置がつくりあげられた。ヘルメットの中にはめこむ工夫をするのにそれから十分ばかりかけてから、ピースは、うまくいったことに満足して、ひとねむりしようと横になった。

それとなく興味をもって見守っていたライアンが、起きあがって片肘をついた。「おい、ウォレン——たったいま、ヘルメットの中にしまいこんだものは何なのかね」

「声を低くしろ」ピースが小声で言った。「みんなに知られたくないからな」

「でもそいつは何なんだい」

「これはな……その……小型のハイファイなんだ」数秒のあいだピースは、想像上のオーケストラを指揮していた。「でかけるときには、耳に音楽を聞きながら行きたいんでね」

「おれにもそういったものが作れたらな」敬服したようにライアンが言った。「おれがハイファイについて知っていることといったら、メイン・スピーカーとトイータがあり、そのふたつを結んで確実に……」

「メインはメイン、トイータはトイータさ」とピースが口をはさんだ。「古くさい洒落さ、ヴァーニー。こんな物言いは、キップリングが思いついたときからろくなもんじゃなかったんだ。ところで、ちょっとでも寝ようじゃないか」

「おれたちを元気づけようとしてくれているんだろう、ウォレン。さる芝居の洒落はきらいかね」

「いま、さるぐつわがあったら、ぎゅっとまるめて、それから口にかま……」言葉が終る前に、ピースは疲れ切って深い眠りにおちこんだ。その夜は以後、三日前に個人的な記憶を失った男らしく、短くて簡単な夢を見た。

将校の声の中にある特殊な倍音に感じなくなったことは、ピースをかなり自由にした。直接命令が下されるたびごとに、速やかにそれに従っているふりをしなければならなかったが、将校が視野から消えるとすぐにピースは——戦闘地区の混乱の中にあっても——安全に自分自身の仕事に戻れた。このことでは指令強制器のシステムが絶大な助けとなった。というのは、司令部の幹部を構成する理想主義的な若い中尉たちは、申し分なくきびしげで断固たる顔つきをして周りを歩きまわっているかぎりは、ピースの行動について訊きただそうとは思いもしなかったからであ

る。
　比較的闘いがゆるやかで余裕のあった最初の日にピースは、宇宙船の着陸につかわれている平地にでかけて行ったが、この乗り物についての自分なりのあたらしい考え方がある一つの重要な点でまちがっていることに気づいてがっかりした。宇宙船が、優美に輝く尖塔のように見えるものだという考えをすてたピースは、四角い構造体の両端に、目的地をしらせる手動の巻きとり式標識があるにちがいないという考えをするようになっていた。だが物質搬送塔の特徴のない金属壁をみたときには、自分の思いついた標識は別の輸送方法に使われるべきものだと認めざるをえなくなっており、そのことからまたあらたな考えがみちびきだされた。
　エレクトロニクスに関するすぐれた知識をまだ保持していることは立証されたが、エクレス要塞でピースに対して使われた機械は――ピースの犯した罪とそれに関する後悔の念に関連したすべての記憶を消すように設計されたものだが――宇宙船の工学技術や操作についてピースが知っていなければならないことまでもすべて消去したようだった。このことは、ピースの生活が宇宙船と密接に関係していたことを意味するのだろうか。ピースはパイロットだったのだろうか。あるいは宇宙船の設計家だったのだろうか。
　ピースは、いま現在まったくなにも知っていない題目をならべたてることによって、逆に過去に自分が専門とした知識の領域を確定できるかもしれないという考えをもてあそんでいたが、やがて、ひとりでにわからなくなったことと、仕向けられて無知になったこととのあいだに区別をつけることはむずかしいと悟った。点状シンバ虫の繁殖習性についてなにひとつ知らないという事実は、木喰い虫を取ることを業としている人間だったことを立証しているのだろうか。

自己を反省するより行動するほうがましだと思ったピースは、現在に注意を向けることにした。心の中ではアスパトリアに到着することを念じていたので、正しい目的地に行く宇宙船に乗って密航できたらと、離着陸場の周辺までできるかぎり足をはこんでときをすごした。最初は、乗員たちに目的地はどこなのかと聞く計画だったが、宇宙船が何十回となく到着したり離陸したにもかかわらず、ただひとりの宇宙飛行士もみかけなかったので、乗り物の操作は完全自動になっているのではないかとピースは不審の念をつよくいだくようになった。そこでピースは、出発しようとする新兵をつかまえては、目的地はどこだと聞くようにした。こういった行動は、異常に警戒心のつよい士官に目をつけられる危険があったが、それは別にしても——信じられそうもないことだったが——スレルケルドなぞをまるでピクニックに行くところとしかねないほどの激戦地が他にもあるのだという情報をもたらすことになった。

指令強制器を無力化する機械を組みたててから三日後、ピースとその部隊は宇宙船に乗ってトーヴァに出向いたが、その雨ばかりの土地で、陰気な男だったコップグロウヴ・ファーが、毒きのこを蹴とばしたために身の毛のよだつような死に方をした。毒きのこが爆発をおこして、何百万という胞子がファーの衣服を、肌をつき抜けたのだ。十分たって仲間の軍団兵が埋葬をしたが、そのころにはファーの身体は、頭の先から足まで一面にきのこがはえていた。ピースの脚が細いことについてなんのかのといちゃもんをつけていたファーだったが、死んでしまったのでピースは勘弁してやることにした。このとき以後ピースはまた、アスパトリア行きの宇宙船を見つけることに前に倍する努力をするようになった。

それから一週間たって、メリマン中尉とその部隊はハードノット星に移動したが、そこでは不

運な兵卒ベンジャーが一団の装甲アルマジロから逃げだしてある木によじ登ったあげく、木そのものにすぐにむさぼり食われてしまった。ピースはベンジャーの靴をゆずり受けることにした。送り主が残していったものすべてを靴の中からふり払うと、実にぴったりとピースの足に合ったが、そんなこんなをかえりみると、ピースはやけっぱちな気持になった。夜床につくと、眠りがおそってくるまでの何秒かのあいだにいつもそうしていたように、ピースはあれこれ物思いにふけった。軍団の軍務契約書を作成した悪徳弁護士たちは、ピースが確実に三十年、四十年、あるいは五十年のあいだ働くようにするために、なぜあんなにも骨を折ったのだろうか。いまの二〇三連隊の状態では——自殺を強要するにもひとしい命令に従わなくてもすむ工夫をピースがしたにもかかわらず——毒がまわって死ぬか、押しつぶされるか、身体をばらばらにされるか食べられてしまうのは時間の問題で、たかだか数週間の差にすぎないことは統計的に必至と言えたし、そういった運命すべてに一時にでっくわす可能性だってあった。

部隊の仲間と同様ピースも、泣き叫ぶときがあったりして、来る日ごとに不機嫌となり、神経質になった。最初のひと月が終るころまでには、太っていたヴァーニー・ライアンもまるまるとしたところがなくなり、グリーンに輝いていた服がずたずたになって身体のまわりにぶらさがってまるで海草でもかぶっているかのような印象をつくりだしていた。ピースやライアンよりずっと長いこと闘っている兵卒ディンクルは顔面神経痛になって十字を切る習慣がつき、人類最後の戦場ハルマゲドンについて陰気な調子でぶつくさ言うようになった。

「ディンクルがハルマゲドンについて話すものの言いようは」ある日、朝食のお粥の椀ごしにライアンがピースに小声で言った。「まるでこの世の終りが来るようだとは思わないかい」

「そんなあくどい冗談は言うなと言っておいたろう」そう応じながらピースは、裂けているライアンの服から手頃な切れ端をつかみとると、それをライアンの頭にまわしてねじった。力を加えだしたときピースは、自分のしていることの獰猛さに気づいて、手をゆるめた。「ごめんよ、ヴァーニー。神経がまいっちゃったようなんで」

「いいんだよ」と喉をさすりながらライアンが言った。「知ってのとおり、おれはもとは喜劇役者だったんだが、時流に乗ったときだって、おれの冗談はひとにはいつも同じ効果しかあげられなかったんだ」

「おれには時流に乗ったときなんて想い出せないな——それが問題なんだ。自分のことに関しては、いつだってそんなところさ」ピースはポケットの中の青いひき蛙をまさぐった。このちっぽけな仲間は、以前ピースにわずかながら希望の灯をともさせたものだった。「だからって、あんたに辛くあたることの弁解にはならないけどね」

「まあそんなことは忘れるこった」

ピースはみじめな気持でうなずき、心の底からの願いをきき入れてくれる力をもった精霊でも喚びだせないものかと、拇指でひき蛙のすべすべしたプラスチックの肌をさすった。

ごったがえすテント入口の垂れ幕をもちあげて、その三角に開いた口からメリマン中尉が入ってきた。顔つきがなにかただならなかったのでピースはぎくりとしたが、すぐわかったのは、中尉が戦闘服をぬいで、新しいしゃれた制服にきちんと身をくるんでいることだった。臆病そうに見える軍曹が一緒だったが、その手には茶褐色の小さな封筒がいっぱいにつまった函をもっていた。軍曹はまた、薄手の青い服を腕いっぱいにかかえていた。

「ここに集まれ」とメリマンが大声で言った。「さあやってきたぞ、おまえたち全員の待ちに待っていた日がな」
「どんな日だって言うんですか、中尉」とライアンが用心ぶかく言った。
「休暇の日だ、もちろん。言っておかなかったかな」
「はあ、聞いていません、中尉」ライアンは目をくりくりさせて、さぐるようにみんなを見た。「休みがもらえるんですか」
「なんていう質問だ」にやにや笑うつもりでメリマンは口を開こうとしたが、唇のまわりで使える筋肉の量がかぎられていて力を入れることが不可能だったので、唇の両隅が素早く何回かふるえるだけに終らざるをえなかった。「なんて莫迦げた質問なんだ。おまえたちを指揮する将校が遠くから高見の見物をきめこんで、おまえたちがどれほどの過労をつづけてきたかを見抜けなかったとでも思っていたのか。とんでもない話だぞ、諸君。おまえたちが戦闘の疲れをなんとかかとろうと苦労していることなど、くつろぎ、元気を取り戻し、心の傷をいやす時間がほしいと思っていることなんぞ、われわれ将校はようくお見とおしなんだ」
「そいつはすばらしい話ですね、中尉。ところで、どのくらいの休暇がもらえるんですか」
メリマンは腕時計を見た。「そうだな、ライアン。おまえは三十日間、軍団にいたから、三時間の休暇をもらう権利がある」
ライアンはすこしあとずさりをした。「くそくらえだ」
「言葉に気をつけろ」眉をしかめながらメリマンが言ったが、すぐにはればれとした顔になった。「心配するな、ライアン——おまえやピースが忠実につとめを果した褒美に、休息や気晴らしの

時間を特別に与えるかどうかは、おれの判断にまかされているのだ。だからその心積りだ。部隊のあとの連中とは別に、おまえたち二人は一番長い休暇を楽しむがよい。四時間だ」
「四時間だって」とライアンが小声で言った。「信じられないね。長すぎらあ」
「長すぎるということはないぞ——おまえたち二人はそれだけの働きをしたんだからな。もっと喜ばせてやろう。その四時間には旅行する時間が含まれていないんだ」にこやかにライアンを見つめたメリマンは、自分の慈悲ぶかさに得意気だった。「おまえの四時間は、アスパトリアで宇宙船から一歩、足をふみだすまでは始まらないんだからな」
二人の会話に興味ぶかく耳を傾けていたピースは、アスパトリアと聞いて心の中があらあらしくゆすられるのを感じた。ピースは、ゆえなく人の注意をひきつけるようなことはしまいと心に誓ったが、それとときを同じくして手の指が自然に開き、粥の椀を自分の膝のうえにひっくり返してしまった。すぐに立ちあがって、ぼろになった靴下からこぼれた粥をブラシで払いおとそうとしたピースを、メリマン中尉は気に入らぬという目つきで眺めた。
「なんのことでそう昂奮しているんだ、ピース」とメリマンが言った。「アスパトリアで軍務を放棄したいと思っているんではなかろうな」
「もちろん、そんなことはありません、中尉」まったき忠誠心と軍務への献身の気持をすこしでも顔にあらわせるようにと願いながら、ピースは作り笑いをしてメリマンを見かえした。
「いや構わんよ。なぜと言って……」メリマンは喉のところのでっぱりに指をあてがった。
「……おまえには、軍団の戦場へ戻るための宇宙船に乗るよう、直接に命令をくだしておこう——おれたちがタッチダウン市に着いてから四時間以内に——帰る用意ができるようにだ。さて

と。整列して給料の紙包みをうけとり、いままでの服はここに残して行け」

ピースが部隊の仲間と列をつくると、名前を書いた封筒とともに、素材がちりめん紙に似た上下の背広を支給された。こざっぱりした服を支給してくれた軍団の配慮にピースは感謝したが、いざ紙包みをあけてみると、ピースに支払われるべき三百モニットの中から、紙の背広の代金百モニットがさしひかれており、さらに四十モニットが、軍団の退職基金に組み入れられていた。この最後の項目は、軍団での平均余命をかんがえるとかなりの不正行為がありうることを暗示していたが、少なくともレストラン〝青いひき蛙〟ですてきな食事をとるだけの金額はまだ手もとにのこった。

そして運をたのみに、二時間かそこいらを専心たずねて歩けば、ピースの過去についての決定的な鍵をひろい当てることだってできるだろう。ピースには、なにを見つけだしたいのかに関するはっきりした考えはなかった——おそらくはピースを覚えている給仕がおり、おそらくはピースの名前と住所がクレジットピュータのカードに記録されていよう——しかしそれだけがピースにとっての唯一のチャンスであったので、ピースはその機会を両手でしっかりつかみとってやろうと決心した。軍務から離脱したことが軍団の知るところとなった場合は身をかくす必要があったが、この三世紀にわたって存在するタッチダウン市は四百万の人口を擁するほどに膨脹してきているので、数週間か数カ月のあいだは見つけられないですむとピースは確信していた。望めるなら、見つけることのできた鍵からその先を追求するのにたっぷり時間がほしかった。だからといってピースがアスパトリアの近辺に実際にいたことなどはなかったとか、小さなプラスチックの土産物を自分でみつけたか、あるいはもらったという可能性だってないわけではなかったが、

そんなことは深く考えても詮ないことだったので忘れることにした。
　メリマン中尉は、ふぬけのようになった一団を待機中の宇宙船のところまで引率した。今度の宇宙船は乗客室がずっと広く、洗面所やシャワーの施設をそなえたロッカー室まであって、ピースが知っていたものとは機種がちがっていた。クラクションが鳴るとすぐに、機は慣性を使わない飛行をはじめた。ピースはロッカー室に行ったが、そこには洗面所の付き人としての役もうけもっている軍曹が待ちかまえており、冷たいシャワーなら五モニット、温かいシャワーなら二十モニットのどちらにするかと訊いた。ピースは料金の高いデラックスのほうをえらんだが、このひと月の軍隊勤務ではえた赤金色の短い髯をそるのはやめて、髯そり器の貸出し料は節約した。鏡をのぞくと、顔はすっかり瘠せこけてきつい感じとなり、想い出せる以前の顔よりはずっと成人らしくなっていた。
「髯はそらなかったんだけれど、どう見える」紙の背広をぴったりと着こなしたライアンにピースが訊いた。
「その髯のおかげで、なんとも言えないちょっとした風格がでているな」とライアンがこたえた。
「でも、その髯の意味なんか、おれにはわからないよ」
　ピースは戦友を見つめた。「それもまた、あんたのいわゆる洒落かね」
「〝いわゆる〟っていうのはどういうことだ」とライアンが憤慨したように言った。「おれがそばにいておまえを激励しているなんて、幸運なんだぞ」
「おそらくあんたの言うとおりだ」ピースは、自分がライアンに真の愛情を感じているということに気づきはじめた。おもいだせるかぎりではライアンがただ一人の友人だったし、万が一、計

画がピースの思いどおりに行くとしたら、まもなく永遠に別れることになる。はじめは命を熱烈に軍団に捧げたピースが、早々に逃亡しようとしている一方で、一週間を健康道場ですごすような軽い気持で軍団に加わったライアンが、死ぬまで兵隊としてはたらくことを運命づけられているということは皮肉な話だった。すこしのあいだそのことに思いを至したピースは、危ない橋をわたってみることにした。部屋じゅうを見渡して、自分がしようとしていることに誰も気づきそうもないと確かめたピースは、ロッカーからライアンのプラスチック・ヘルメットを取り出し、自分のと取りかえた。

ライアンはまごついているように見えた。

「どういうつもりなんだ、ウォレン」

「つくりつけのハイファイ・セットをあんたにやろうというんだ」ピースは、指令無力化装置を指さしてから、ヘルメットをひっくり返してそれを隠した。「おれにこれはもう要らなくなりそうだからね」

「でもあんたが戻ってきたときには、どうするね」ピースが頭を横にふっているのを見て、ライアンは声を呑んだ。「ウォレン、あんたがこう言うだろうとおれが思っていることを言おうとしているのかね。あんたが頭の切れる男だとはわかっていたが、これはまたあまりにも……」

ピースは、ライアンに黙っていろと合図をおくってから、自分の工夫したものがどのような働きをするかについて、ひそひそ声で説明した。「これは、あんたがぷいと姿を消すチャンスをつかむまでは生きのびるのに役立つと思うよ」ピースが説明をしめくくった。「できればこれを戦闘区域で使うんだな。そうすればやつらはあんたを、おそらく死んだものとして軍籍を帳消しに

するだろうさ。あんたを探すような手間はかけっこないもの」
「どうしてあんたがそうしないんだい」
「おれはアスパトリアに用事があったんだ」とピースが言った。「少なくとも、あると思っているんだ。あっちであんたに会えるかもね」
「それはいい。それに、あんたが探し求めているものが見つかるといいね、ウォレン」
二人は握手をした。ピースは、はたして自分の求めているものが見つけられるのだろうかという悩みを心にいだきながらいそいで乗客室に戻ると、兵卒ディンクルのわきに腰をおろした。床をぼんやりと見つめていたディンクルは、ピースが隣に来たことに触発されて、大仰に十字を切りはじめたが、またすぐに憂鬱そうなうつらうつらの状態に戻った。
「元気をだせよ、バッド」とピースが言った。「休暇をもらったんだぜ」
ディンクルがもそっと身動きした。「アスパトリアでの休暇だって。よしてくれよ」
「アスパトリアはひどくなっているのかい」
「ひどくなっている以上のものさ――あの八三年にアスパトリア人を徹底的にぶちのめしたときからずっとね」
「そんなところへ行くのはおもしろくないって言うのかい」
ディンクルはゆっくりと首をたてにふった。
「想い出すことが多すぎるんでね」
「こっちにとっちゃ、その想い出というのがなさすぎるんだ」
「あんたがとびかかりじゅうたんに覆いかかられた戦友を撃たなきゃならない羽目になったとし

たら、とてもそんなことは言えないとおもうがね。男がどうすべきかと考えることには、限度があるってものよ」
ピースは説明しようのない寒気を感じた。軍団での短い勤めのあいだに、不愉快ながら一寸先のわからぬ未来を切りひらく方法を数多く身につけはした。しかしディンクルが描いてみせる場面にはいつも、ピースの身体を流れる血球を、かちかちと鳴る何百万という氷の粒にかえてしまうだけの効果があった。ピースはすこし身ぶるいがしてきたので、気分をかえて陽気になろうとした。
「なされたことは」とピースは言った。「なされたことさ」
ディンクルは陰気な目でピースをじっと見すえた。「それが高邁な哲学とでも言うのかね。人間の思考力の範囲をあんたがいま拡げてやったと言うのかね」
「そんなふうにとらなくたっていいじゃないか」気に障ったピースが言った。「おれがなにを言いたかったかというと……過去はすんでしまったんだし、もう縁はないということさ」
「オスカーたちの問題はすんでしまったことじゃないし、縁が切れているわけでもないぜ、坊や」ディンクルがいま一度、十字を切った。
ありったけの不安がピースの心にたち戻ったが、一方では好奇心が頭をもたげた。
「あんたが言いつづけているオスカーというのは何者なのかね」
「超人たちさ、坊や。禿頭で筋骨隆々とした大男がいたるところにいるんだ。しかも奴らは、みがきあげたブロンズででもできているように見えるのさ」
「銅像のように聞こえるけど」

「銅像が動くかい」ディンクルの声にはうつろな調子があった。「それどころか、オスカーたちは風のように早く走れるし、かと思うと、素手で木をこなごなにして、しかもかすり傷ひとつ負わないんだ。放射線、鉄砲の弾、砲弾——そんなものはみんな跳ねかえしちゃうしね。奴らこそが、まさしくアスパトリアでの戦争を終らせたんだ。将校連だって奴らを怖がっているんで、おれたちを内陸の森林地帯から退却させたんだ」

「よくはわからない話だな」とピースが言った。「オスカーというのはアスパトリア生まれなのかね」

「あんたみたいな学生タイプの男には、銀河系宇宙のほんとうの姿がわかっちゃいないんだ」ディンクルは過去を思いわずらうのをやめ、侮るようにピースを見た。「アスパトリアは人間の植民地で——一番古いもののひとつだ。事実、そんなところから戦争がおこったのさ。三世紀かそこいらたっているのと、地球から数千光年はなれていることのために、独立したってかまわないとばかりに税金を払うのを止めたんだ。連邦はどうなると思うかね、もしトムやディックやハリーのそれぞれが決心して……」

「それはそうとして、オスカーとは何者なんだい」ピースが話を遮った。「そいつらはどこからやってきたのかね」

「本当のところは、誰も知りはしないさ。八二年か八三年ごろにアスパトリアに現われたんだ。突然変異体（ミュータント）だと言うやつもいるけれど、おれのほうがよっぽどよくわかっているんだ」ディンクルの顔がひきつり、声が大きくなった。「悪魔の兵士たち——それがあいつらの正体さ——善と悪とのあいだの最後の大戦争をしむけているんだ。なあ、ウォレン、黙示録に出ている善と悪と

の大決戦が近づいていて、おれたちは負けの側についていているんだ」
「静かに」乗客室の反対側にいる男たちがディンクルのほうに目を向けはじめたので、落ち着きをなくしたピースが言った。時がたつまでは黙ったままで、噂の種にならないようにしておきたかったのだ。しかしディンクルの話は、催眠術のようにピースを魅了した。「オスカーたちが悪だということに、あんたはなんでそんなにも確信がもてるのかね」
「やつらが大活躍のところを見たことがあるからさ」ディンクルはまた十字を切ったが、目はどんよりとしてきた。「ある日おれは、自分の部隊とはぐれ……林をぬけて帰る途中にあの物音が聞こえたんだ……何事かと思ったおれは、身を伏せ、そっとのぞいてみようと這いつくばって、空き地の端まで行ったら……見えたんだ……五人ぐらいのオスカーたちがそこにね……奴らは、おれの仲間の兵隊何人かと一緒で、仲間は地べたに横になっていた……
　おれの仲間たちは怪我をしていたんだ。うなり声をあげ、うめいて、慈悲を乞うていたんだが、そんなものは役に立たなかったのさ。オスカーたちは、そのまま作業をつづけた……」ディンクルは顔を両手で掩った。「とてもその先はつづけられないよ」
「つづけてくれなきゃ」氷のような風がうなじの髪をふと巻きあげるように見えたが、ピースの心は、ぞくっとするディンクルの打あけ話にすっかりとらわれていた。「で、そのオスカーたちはなにをしていたんだ」
「おれの仲間たちを食わせていたんだ……とびかかかかかりじゅうたたんに」
　ピースは胃がむかつくのを感じた。「畜生、そんなことって……」
「ほんとうの話さ、ウォレン。オスカーたちはとびかかかかりじゅうたたんを何枚か集めたんだ……自

分たちにはなにひとつ害はないんだから、なあ、オスカーたちにはそんなまねもできるのさ……仲間が地べたに横になっているあいだに、その上にじゅうたんを投げつけるってわけだ。仲間が叫び声をあげて、早く殺してくれと懇願している声がまだ聞こえるようだ。とびかかりじゅうたんが消化するあいだ、仲間がのたうちまわっている様がまだ見えるようだ。それに……」ディンクルはピースの膝に爪をたてた。「ほかにも話があるんだ、ウォレン」
「なんのことかね」
「オスカーたちは笑っていたのさ。生きながら食べられている善良な男たちを見ながら、楽しがっていたのさ。おれが勇敢な人間だったら、ライフルを持ってその中にわけてはいり、仲間を苦境から救いだしてやるところだったんだが――おれは臆病者なのさ、ウォレン。おれが同じような目にあったんじゃたまらないと尻ごみしちゃったので――這ってその場をはなれ、わが身を助けたんだ。生きている値打ちなんか、おれにはないね」
立ち上がると、ピースは耳鳴りがした。「なあ、バッド」話題をかえる手はないものかと考えて、ピースが言った。「あんたはどうして、身体も洗わず、休暇服も着ないのかね。ずっとさっぱりするのにな」
ディンクルが頭をふった。「休暇服なんか願いさげだ。おれはまた離陸するまで、ずっとこの宇宙船の中にいるよ」
「どうして、また」
ディンクルは、ライフルの細長い支えをつついた。「おれはどんなオスカーにも出くわしたくないからな。奴らは、ここが自分の土地だとでもいうような顔で、いばって歩きまわっているし、

だれもが怖がっているんだ。聞いた話だが、やつらには人の心が読めるというんで、あの日にお
れがやつらを見たことが……」ディンクルは続けざまに何回も、十字を切ってから身体をゆすり、
ハルマゲドンと来世の応報、最後の審判について、むやみやたらとつぶやきはじめた。
そのことに驚きもし、あわてもしたピースが、ディンクルからあとずさりしてコーヒー沸し器
のかげに難をさけていると、数分たってクラクションが鳴り、宇宙船が着陸態勢にはいったとア
ナウンスがあった。床が例のとおり、最後にがたんとよろめくとすぐにピースは、出口にむらが
る一団の仲間入りをした。ひとをじりじりさせる間をとってからドアが横に開くと、一面が太陽
に照らされた草地があらわれた。発着場のかわりに、牧草地が使われたものらしい。空気は暖か
くておいしく、遠くのほうで、調和のとれた柔らかい色調に輝いているのは、市街地にある優美
な建物だった。
アスパトリアで目にするものすべてが、とたんにピースの気に入ったので、自分が以前この土
地をよく見知っていたためにそんな気持がしたのだろうかとピースはいぶかった。ほかの連中と
一緒に外に出、柔らかい芝地に立つと、肺をかぐわしい空気で満たし、肉体的には危機を脱した
ことを喜んだが、一方では別の危険が待ちかまえているのにも気づいた。というのはメリマン中
尉がまたもや、煙草とアルコールの害について部下に一席ぶったが――この男には同じことを何
度でも繰り返し言うくせがあったので――いずれ宇宙船には四時間以内に戻れという命令を反復
することはほとんどまちがいがなかったのだ。このときのピースは、指令無力化装置に守られて
いなかったので、もしもその命令を耳にしたら、選択の余地なく従わざるをえなかったろう。
「あちらに行けば宇宙空港大型バスがあって、おまえたちをタッチダウン市に運んでくれる」低

い家並みがかたまっている方角を指しながら、メリマンが言った。「たくさんの美術館や画廊があるから、せいぜい見てまわるといい。だが決して忘れてもらってはならないことは……」
これはあぶないという警戒信号が頭の中で犬が泣くようにくんくん鳴ったのでピースは、両手で叩くようにして耳を掩い、体を低く折り曲げたうえで、いそぎ足に宇宙船の脇を通って逃げだした。トランスシーバー塔のかどを曲がろうとしてふり返ってみると、確認できたわけではないが、青い服を着た人間が何人か、向きなおって逃げだしたピースを見つめているような印象を受けた——逃げだしたことで疑惑を受けたとは言えないまでも、すこしあやしく思われたにちがいない。計画のこんなにも初期の段階でへまをやらかしたことが自分ながら呪わしかった。逃げ道はないかとあたりを見まわすと、この草地のはずれまでは全速でかけぬけるとすぐに行きつけることがわかった。逃げる途中でも追いかけてくる声や叫び声がいつでも聞こえるよう注意しながら、ピースが草地の縁めがけて走ると、五連の針金をまわした囲いのところに行きついた。電気が流れていないことを念じながら針金をよじのぼり、囲いより丈のたかい草の中にわけ入った。その先はゆるい登りになっていたので、全速力でかけのぼり、そのてっぺんでうしろをふり返ったが、メリマン中尉も、その同僚たちも宇宙船の四角い胴体のかげにかくれて見えなかったのにはほっとさせられた。

すこし気をゆるめたピースは、周りをじっくりと眺めわたしした。地面はピースの目の前から下っていて、その先は長くてかなり急な草の土手になっている。土手の一番低いところにはりっぱな道路があり、市街地の方角へと曲線をえがいている。その道路を、けばけばしい黄色に塗った、

紛れもなくタクシーとわかる車が走っていた。市内に行くにはタクシーを使うほうが早くもあり、楽でもある方法だとピースは考えたが、残りの金をとっておく必要があるという理由で、タクシーには乗らないことに決めた。斜面をななめに歩きはじめたピースは、ゆっくりした歩調をとって心の落ち着きを取り戻すつもりだったが、繁った草のために足もとがすべりやすく、ころばないよう傾斜面に対しなんとか身体の平衡を保っておこうと努力したので、すぐに腿がぴくぴくとふるえてきた。そこで早く、早くと歩きはじめると、一歩ごとに足がもつれ、長い土手を首を折らんばかりの猛スピードでころげおち、なにがなんだかわけがわからなくなった。

「この経験から、なにも得るところはあるまい」風が耳もとでうなりを発し、足が地面にふれるかふれないかの勢いでとばしていながらも、それとは無関係に心を平静にたもとうとして、ピースはそんなことを考えていた。

「ひとは、予期できないことをいつも予期すべきなんだ」

そのとき、ピースが考えたことの結論を確証するかのように、予期せぬことがまたおこった。下の道路を走っていたタクシーの運転手が——すべり落ちながらピースが手をぶんぶんとふりまわしているのは、自分を呼びとめるためだろうと思ったらしく——ヘッドライトを点灯し、ピースがここへ降りてくると判断した場所に車をまわした。この運転手は、ピースのおりてくる角度と方角を鋭く見通したにちがいない。というのも、ピースは止まることも、速度をおとすこともかなわず、まともに車に突き当たりそうになったからだ。

「おい、だめだ、だめだ」とピースは叫んだ。「そこをどけ、この莫迦もの」タクシーの形が、おそるべき速さでピースの視野いっぱいにふくれあがった。

運転手は客がついたのを歓迎するそぶりで横手の窓からピースを見たが、そこでおそまきながら自分に危険がせまっているのを知って口をぽかんとあけた。あわててハンドブレーキをはずそうとする間もなく、ピースが両手をひろげた恰好でタクシーにかけより、猛烈ないきおいで横の窓にぶち当たった。車の尾根に顎をぶつけたピースは、痛いと感じるまもなく、草のうえにもんどりうってたおれた。
「この気違い！」ふるえる手で、紙吹雪のように浴びたガラスの破片を髪や肩からはらいおとしながらタクシーの運転手が言った。「なんのつもりで、あんたはこんなことをしたんだ」
「おれがこんなことをだって」ピースが口をぽかんとあけて言った。「なんのつもりで、あんたはこんなところに車をとめたんだ」
「あんたは手をあげておれを呼んだじゃないか……それにだ、どこに車をとめようとおれの勝手だ」
「おれは手なんかあげなかったし、どこに歩いて行こうとおれの勝手だ」
「あれが歩いていたって言えるのかね」あたらしくできた車の脇の裂け目ごしに、運転手があざ笑った。「地球からやってくるあんたみたいな制服のおばかさんは、みんなこんな調子だぜ。八三年のときのことはまだ苦々しい想い出だがね。いまだってあんたたちがどいつもこいつも申しあわせたようにたっぷりきこしめして、休暇でこの国にやってくると、自分の体重をあっちこっちとぶつけはじめるのよ。よく聞いておけよ、制服のおばかさん——こんなことをすると、あんたにつけがまわるよ」
「なんでおれたちが苦々しい想い出につながるんだ……おれにつけがまわるとは、どういう意味

なんだ」
「窓をあたらしくするのに百モニット、それにおれの時間をつぶしたことに対して二十モニットだ」
今度はピースがあざ笑う番だった。
「あんたが笛を吹いて、人を呼んだってかまわないぜ」
「そいつは、おあつらえむきだ」首にかけた紐につるしていた、複雑そうな大きい笛を運転手が取りあげた。「このサブエーテルの笛を使うとするか。あんたは知っちゃいまい、この笛で呼ぶとだれが最初に応えてくるか――警察なのか、オスカーなのか」運転手はその装置を唇にあてた。
「払うよ、払うよ」ピースは、せきこんでそう言ってから立ち上がり、よれよれの札束を取りだした。言われたとおりの金額を数えると、それを相手に手わたしした。
「そうしておくのが無難だな」と運転手がぶつぶつとつぶやいた。「いまどきの奴らときたら、わけがわかりゃしない――手をあげてタクシーを呼んだかと思うと、すぐにそんなことはしないと言いはったりしてな。こんなのが新手の流行なのかもしれない」
「車をこわしたりして、申しわけなかった」とピースが言った。「ところで、市内まで連れていってもらえないか」
「十モニットだね――それでも半値なんだ」
「オーケー」いままではゼロに近い手もちの現金が気がかりだったが、タクシーの運転手というものは、アスパトリアのその日その日の動きについてはよい情報源にちがいないとピースはふっと考えたので、タクシーを利用する気になったのだ。前部の座席の空いた場所に乗りこんだピース

は、新しい背広の袖のところに、もうちいさなほころびができているのに気づいた。単磁（ユニマグネット）エンジンがすすりなくような低い音をたてながら、車はぐんぐん波打って進み、きらびやかなあさぎ色の風景があとへあとへと流れて、目にするものすべてが光の交錯する前衛芸術（ライト・ショウ）のようになった。

「よい日よりですな」前のことはとっくに容赦し、すっかり忘れてしまったかのように運転手が言った。髪の毛のうすい、顔の長い男だった。「よい所ですぜ、休暇をとるには」

「たしかにいいな」あたりを見まわしながら、ピースはうなずいた。「タッチダウン市のことはなにも知らないんで、ぼくは……」

「心配はいりませんや――ぴったりのところへお連れしますから」

「あんたがかい」

「そのとおり。わたしには、なんの含みもありませんがね、もちろん――手数料といったものはとりゃしません――でもね、あなたがお読みになるかもしれない本の中で、ビッグ・ネリーがわたしの名前のことを書いているってことを確かめといてください。トレヴって呼ばれているんです。おぼえておいてくださいよ――トレヴだってね」

「あんたは考えちがいをしているよ、トレヴ」ピースは、自分が憤然としていることをさとられまいとした。「〝青いひき蛙〟に行きたいんだ」

「そんなところへは行けませんぜ、兵隊さん」トレヴは親しげだが意味ありげに、ピースを肘でつついた。「ねえ、あなたはきっとお腹が減っているんです――わたしが拾う兵隊さんはみんなきまってすきっ腹でね――それによい音楽だって好きなんでしょう」

「よい音楽だって」話の糸が切れたようにピースは感じた。

「そうです。わたしのいとこが、ヘンデル・バーというのをやっていますがね。高級なところですぜ――高尚な作曲家やなんかの名前をあらゆるものにつけていますからね――それでいて安いんです。わたしには、なんの含みもありませんがね、もちろん――手数料といったものはとりゃしません――でも二十モニットも出せば、奴の特別料理にありつけますがね、ソナタ・ケチャップをそえた〝ショパンのボロネーズ〟という料理とか、あるいは……」

「すばらしいところのようだね」とピースが言った。「でも、ぼくは〝青いひき蛙〟に行かなきゃならないんだ」

「身分をわきまえなきゃ――なにも含みがあって言ってるわけじゃないんで――それとも、手早く軽食なんかとりたいんなら、シュトラウス・モルトとかが……」

「オスカーのことを教えてくれないか」ピースは運転手の言葉を遮って、話題を、こわいものみたさで興味津々の方向へと転じた。「あんたが警備用の笛を吹くと、奴らが応えるんだと言ったね」

「ときには、そういうこともありまさあ」商売になるかとあれこれ誘ったのに、それを断られてむっとしたトレヴは、しばらくのあいだ、黙ったままだった。「だがときには、そうじゃないこともありますがね」

「でもいったい、奴らはどうしてそんなことをするのかね」

「誰も知りゃしません。オスカーは誰にも、なにも言いませんからね。でも、オスカーには気にくわないこともあるんです――特にひどい犯罪なんかがね。そこで、くわばら、くわばら。オスカーの気にくわないことでもなにかしてごらんなさい。とてつもなく厄介な問題がもちあがりま

すぜ」
「自警団かなんかなんだろうか」
「自警団からは逃げだせたって――オスカーからは逃げられっこなしですね」
バッド・ディンクルが話していた残虐な場面を、犯罪というと大騒ぎする謎の超人という考え方と重ね合わせようとしながら、ピースは、このあらたな情報を胸にたたみこんだ。
「人の心が読めるというのは本当なのかな」
「そういう人もいますがね」トレヴは、なにか心にひっかかるものがあるという目で、ピースを見つめた。「だからって、あなたに関係があるわけでもないんでしょう。あなたが盗っ人とかなんかだとでも」
「もちろん、そんな人間じゃないさ」とピースが返事をした。自分が会った不幸な目の数々をかみしめているあいだじゅう、ピースはふさぎこんで黙っていた。すべての記憶と身もとをわからなくされたこと、この異邦の惑星にひとりぼっちでいること、一文なしで寝る所さえないこと、さらにはじきに宇宙軍団から追跡される逃亡兵であることばかりでなく――自分がアスパトリアで罪を犯したことがあるという記録だってじきにわかってしまうだろう。そしてもしそれが実情なら、ちょっとした気晴らしに負傷した地球人を怪物に食べさせてしまおうと考えている、向かうところ敵なしの、テレパシー能力をもつ超人が、自分をしつこく追いまわして罰することだってありえた。
「元気を出しなさいよ」トレヴがそう言ったとき、タクシーは、タッチダウン市の中心を貫通している街路へと向きをかえた。「あなたより悪い人間はいつだっているものですよ」

そんなことを言われたら、一悶着おこしたいところだったが、ちょうどそのとき――ほかの看板から際立ってはっきりと――巨大な青いひき蛙のかたちをした三次元光の彫刻が見えた。ピースは、タクシーがその建物の前に止まるまで、風船のようなふわふわと浮きあがっている光の彫刻を、またたきもせずに見つめていた。自分の真実がきわめられる瞬間がまぢかに迫っていると も言えたが――一方そうなった暁には――数十年のあいだ人を安心させる嘘をつかれているほうがかえってましだったという状態になるのかもしれなかった。

タクシーの支払いをすますと、神経が参ってしまう前に行動をおこしたほうがよいと気づいて、肩をそびやかし、なめらかに動く、〝青いひき蛙〟の高価なドアをあけて、中に入った。

6

ピースの立っていたロビーは、織りもののじゅうたんと、古めかしいクロームパイプの家具がとくに目につく飾りだった。それを見たピースは、今までに注意されていた言葉は正しかったとすぐにわかった。この〝青いひき蛙〟では、空気さえ高価そうな香りをただよわせていた。ポケットに残っている十モニットでは一杯のコーヒーをたのむことだってあぶないものだと思いはじめたピースは、だます方法でも考えつかない以上は、この場所にいられる時間はひどく限られたものになるだろうと推測した。

「お客さま、なにかご注文でも」飾り格子のかげから現われた給仕長は、旧世界では派手な服装だったデニムのずぼんに、ポロネックのセーターというでたちをしていた。うす碧色の目が、ピンク色のふとった顔の中心から冷ややかに見おろしている様から察すると、ピースの社会的立場とか金銭上の状態についてなんらの思いちがいをしているのではないことが明らかだった。紙背広の袖にできた裂け目を本能的に手でかくしたピースは――給仕長が心の中で考えたほどには――自分の心理的立場が不利なものだとは思わなかった。一群のたけり狂う動物、かみすぎと闘って退治した男なら、相手がどんなにりっぱな装いをしていようとも、年配の給仕なんかにおび

やかされるいわれなんてないんだと覚悟をきめていた。
給仕長が咳ばらいをした。「お客さま、なにかご注文でも」
ピースは、驚きといらいらの入りまじった目つきをした。「食事だ、もちろん。外科用の脱腸帯を買いにくる人が多いわけでもあるまい」あらさがしでもするように、ピースはあたりを見まわした。「それともこのおれは、まちがったところへでも来たんだろうか」
給仕長が顔をこわばらせた。「お食事なら、左手の部屋になっていますが、お客さま」
「わかっているよ」ピースはポケットからプラスチックの青いひき蛙を取りだし、上にかかげて軽くたたいてみせた。「おれに見覚えがあるかね」
給仕長がピースの顔をしげしげと見た。「いいえ、ございません、お客さま」少しほっとしたような顔で言った。「覚えていなくてはいけなかったんでしょうか」
「気にすることはないよ」失望の色を隠しながら、ピースは食堂のほうへ歩いていった。「席をひとつ——窓ぎわにな」
正式のデニム姿をした、年下の食堂係りの給仕がピースに座席を示してから、メニューを手わたした。
「メニューなんかにわずらわされることはないね」気やすく給仕を肘でつつきながら、ピースが言った。「おれのいつものものさえ、もってきてくれればね」
その給仕が、何回も目をしばたたいた。「あなたさまの、いつもの何でしょうか、お客さま」
「知ってるだろ、ほら」ピースがまた、しかし今度はもっと強い力で給仕の肘をつついた。「おれのいつものやつ——おれがここへ来るたんびにとっていた」

給仕は、ピースの肘のとどく範囲から身をひいた。「ご定連の方々は全部、存じあげておりますが、お客さまは、そのご定連に入っておりません。お客さまがメニューとご相談なさったら、まちがいなく……」

「メニューなんかと相談したくはないね」小声だがあらあらしくピースは言った。「なあ、誰かいるだろう、調理室の中に、おれを知っているのが。おれが、いつものが食べたいと言っているとそいつに教えてやってくれ」

給仕はちょっとのあいだ、困ったような顔でピースを見つめたが、事情がのみこめたという兆しが目にあらわれてきた。「お客さまのおっしゃることが、いまになってわかりました」と給仕が言った。

「よかった。それはうれしいね」正確にはなにがわかったかいぶかしかったが、ピースは望みを託して給仕を見つめた。

「お客さま、わたしにおまかせください」給仕はピースのほうに腰をかがめ、メニューを開いてから、共謀するかのように小言で、口先なめらかに言った。「読めないということは、ちっとも不名誉なことじゃございません——頭のいい方でも、文盲の方はおおぜいいらっしゃいます——もしお客さまがメニューをお調べになるふりをなさりたいなら、一行一行がなんの料理を意味しているのか、わたしがお客さまに申しあげましょう、そうすれば……」

「メニューなんか自分で読めるよ、この間抜け」ピースは、ぶ厚いメニューを給仕からひったくると、かまをかけて探ることを一時あきらめ、印刷されたページに目を走らせた。料金は、共通のモニット単位にまとめて書かれている代りに——法外な値段をつけるにはいつもお定まりの

――通貨単位で書かれているのを見て、ピースは心が沈んだ。数字をながめわたし、コーヒー一杯が三十モニットで、席料が最低百はするとわかったとき、ピースの一番おそれていたことがはっきりしてきた。将来の方針をたてるために、また自分の過去を知るためにピースが頼みとしていたのは、このレストランにできるだけ長くいすわって、できるだけおおぜいの定連や店のものと顔を合わせることだった。つまり、勘定を払うことなどできないので法律や徳義などは無視し、知っているかぎりたくさんの料理を注文し、それが出されるまで結果がどうなるかは考えないというよりしようがなかった。たやすいことではなかったが、そう決心すると、胃がひどくすいて、苦しくさえなった。まるまる一カ月というもの、お粥か、革紐のような干し肉しかとっていなかったからだ。

息を深く吸うとピースは、一番値段の高い料理の一つ――輸入シャンパンに漬けこんで調理したアスパトリア海老の特別料理を中心とした七品のコースを注文した。食前酒を三杯、ごくごくと飲みこみ、つぎに出されたスープの大方を気前よく腹におさめたとき、ピースは、自分の大切な目的がこの建物の中にいる時間をひきのばし、人々の出入りを油断なく見はってては声をかけることだということを想いだした。そこでスプーンの動きをもっとゆったりした速度におとし、部屋の内外を見まわして、他の人たちがいい按配にピースの顔を見られるようにした。午後もまだ早かったので、まばらに散っている他の客は自分たちの昼食に気をとられて、ピースには注意を払おうともしなかった。ピースは、一日じゅう街中にかくれていて、夜になってこの〝青いひき蛙〟にやってきたなら、自分の仕事はもっと忙しくなるのではないかと思いはじめた。

とつおいつの考えは、給仕がやって来たために中断された。給仕は、側面がガラスばりの水槽

をのせた手押し車をころがしていたが、その水槽はきらきらと輝く金属棒の奇妙な枠に取りまかれ、その中には——水の中でゆったりと前後に走る——ピースの小指ほどの寸法をした、ピンク色の甲殻類動物がいた。とまどったピースは、しばらくのあいだその小さな生き物を見つめていたが、やおら目をあげて、教えてくれるよう合図した。

「あなたの海老でございます、お客さま」と給仕がしらせた。「いつごろのがよいか、おっしゃってください」給仕が、銀の針金で籠につながっているスイッチを押すと、装置全体がかすかな音でぶんぶんとうなりをたてはじめた。

「ちょっと待ってくれ」水槽の住人を指さしながら、ピースが言った。「これは小蝦じゃないか、それも赤ん坊の」

「これは、アスパトリア海老の赤ん坊でございます、お客さま」

「でもおれは、成長したやつが食べたいんだぜ。大きなやつがね」

給仕が愛想よくほほえんだ。「お望みの大きさで召しあがれるんです、お客さま——あなたの目の前で、いますぐに成長させてごらんにいれます——でも、年をとり過ぎていないほうがようございましょう、風味の点から言って」

輝く篭の中全体の空間が雑然とまたたきはじめるのをピースがびっくりして見とれていると、水槽の中の海老の動きが急に速くなった。突然ピースは、ゆらゆら動きまわっている甲殻類が、一秒ごとに大きく成長していることを理解した。形がずっと複雑になり、足やはさみ、触手や眼のついた柄を惜しげもなくのび出させていく様は、どんな地球の海老も顔をあからめ、あるいはおそれをなす感じだった。

「いまがちょうど二歳ぐらいでございます、お客さま」給仕が助け舟を出した。「お客さまの何人かは、これくらいの頃が、アスパトリア海老の味としては最高だとお考えですが、三歳のものを、あるいは四歳のものをお好みの方もいらっしゃいます。いつごろがいいかだけ、おっしゃってください」

「なんだね、これ……」水槽を取りまく篭に目を移して、篭が作られているきらめく棒が奇妙な角度で交叉しているのを見たピースは、音をたてて唾をのみこんだ。その幾何学的な図柄をたどろうとしたら、それがあたかも他の次元へ通じているかのような、奇妙にねじれた感覚を目におぼえた。鈍くなった頭に、異様な考えが浮かんだ。

「これは」小さな声でピースが言った。「これは一種のタイムマシンかね」

「もちろんでございます、お客さま――わたしどもの、食通の方へのサービスの中心でございます。前にご覧になったことはございませんのですか」

「いや、ないと思うよ」とピースが言った。「棒が奇妙な角度で交叉し、奇妙な感覚を目におぼえるのに気づいたときに、おれは……」

「ちょっとごめんください」なにかに気をとられたように給仕が言った。あとずさりし、おかしいなという目でタイムマシンを調べてから、給仕は、両手で枠をつかみ、隅がきちっとし、全体が真四角な元の形になったかと思われるまでそれをねじった。その場の手作業で安定したのか、タイムマシンは、またうなりをたてつづけた。

「先週、コック長がこの上に坐ったものですから」と給仕が説明した。「それ以来、調子が出なかったんです」

ピースは、タイムマシンの技術も、自分に理解できないことの中の大切な分野なのだろうかと、少しのあいだわれとわが身に尋ねてみた。「こんな装置が見られるとは思わなかったな」

「ああ、この機種ですか。これは――単動式の内向性マシンで――アスパトリアでは、法で認められているんです。ウイスキーを熟成するのにもたいそう役立っているのですが、ところでお客さま。わたしの言うことに耳を貸していただけるのなら、海老にこれ以上、年をとらせないほうがよろしいようで」給仕はタイムマシンのスイッチを切ってから、海老挾みを使って、いまでは大きく成長した海老を水槽の中から取り上げた。敵意をむき出しにした海老が、触手を波うたせ、はさみを鳴らしながらピースをにらんだ。

「こんなものは食べないぞ」とピースが大声をあげた。「これは化け物だ――あっちへもって行け」

「これは殺して、お客さま、料理するんです、あなたの……」

「そんなことはもういい。あっちへもって行って、代りにステーキだ」

給仕は海老を水の中に戻しながら、なにも言わずに顔だけをしかめ、水槽を調理場のほうへごろごろところがして行った。余分な時間をついやして一つ勉強をしたおかげで、昼食どきの客や店のものに顔を見られたが、ピースを識っている者からのまばたきの信号ひとつなく、自分の記憶もなにひとつよみがえらなかったので、ピースは夜にまたここへ出向いて来るべきだと暗い気持で決心した。ただ問題は、ある種の奇蹟にちかいことでも起こらないかぎり、この〝青いひき蛙〟にはふたたび足をふみ入れさせてはもらえそうもなかったことだ。

ステーキがくると、それをゆっくりゆっくりと食べ、時をかせいでいるうちにピースは、食事

や、それと一緒に出されるワインとリキュールの味に、こまかいところまでだんだんうるさくなってきた。しかし口の中の味をかえようと三度目につまようじを頼むころになると、ピースのとった戦術は不幸な副作用をもたらしはじめた。コック長がことの成りゆきを正確に見抜いて、それぞれの戸口に給仕を配置したのだ。そのひとりひとりがピースの目には、呼び出しをかけられた任務を遂行するには必要以上に、背もたかく、筋骨も隆々としているように思われた。この給仕たちがひたとピースを見すえているあいだにも、レストランの中からは客がだんだんに減っていって、大きな部屋の中にピースだけが給仕たち相手に取り残される瞬間が、避けようもなくやってきた。この三時間というもの、ピースの用をたしてきた給仕が、きびしくなにかを待ちうける素振りで近づいてきた。古くさいベークライトの盆を手にしていたのだが、その真ん中にはピースの勘定書がのっていた。

給仕はこちこちのお辞儀をした。「これでおすみでしょうか、お客さま」

「いいや」ただ一言だけで答えておいてピースは、つぎに言うべき適切なことばを考えつこうとした。「いいや、まだ全部じゃないね。とてもとても、どうしたって終っちゃいないね」

給付が驚いて眉をあげた。「なにをお望みなんですか、今度は」

「もってきてくれ……」なんとか霊感をえようとしたので、ピースの眉がちくちくと痛んだ。

「もってきてくれ、おれに、また同じものを」

「残念ながらそれはできません、お客さま」給仕は勘定書をピースの前に置き、腕を組んだ。

ピースがその伝票をひっくり返し、目をとおすと、軍団に勤務してもらう給料一年分のほとんどをすでに食べてしまっていたので、腹が冷たくなるように感じた。しかしその感情は、ひどく

不愉快なものではあったが、逃げだすことも可能だということを暗示していた。
「あの」立ち上がってピースが言った。「洗面所をおしえてくれ」
給仕は大きな音をたてため息をついたが、それでも部屋の向かいにあるパネルばりのドアを指さした。そちらへゆるゆると歩いていったピースは、うしろをふり返りはしなかったが、並はずれた背丈の給仕が警備して、自分のうしろをふさいだなという印象をうけた。ドアのところを通り、後手にそれをぱたんとしめるとそこはせまい次の間で、輝く十二本の腕をもった自動販売ロボットだけが置かれていた。一本一本の腕の先は、ひと巻きのトイレットペーパーで終っていた。
「すばらしい食事を堪能なさったことと存じます、お客さま」へつらうような低い音で、ロボットが喋った。「わたしの呼気分析機によりますと、あなたはステーキを召しあがりました。そこであなたのお楽しみを仕上げるために、わたしどものパルプ三層レバノン杉のスーパーエクセという、しなやかでも破れない紙のご使用をおすすめします、この外側の皮膜は……」
「ひっこんでろ」ピースのほうにのびてきた、折りたたみ式の腕先についたピンクの塵紙をふり払いながらピースはうなった。もうひとつのドアをあけたピースは、便所へと走りこんだ。両側に小さな室があり、反対側には洗面器が一列に並んでいた。その上にただひとつついている窓をピースはむさぼるように見つめたが、その窓はぶ厚い鉄棒に守られているのがわかった。あたかも、怒ったゴリラを閉じこめるために設計されたかのように見えた。
あまり時間をかけられないと感じたのでピースは、右手にある一番遠い便所へ走り、戸をしめた。靴をぬぎ、爪先がちょっとだけ戸の下側につき出るようにしておいてから、ピースは――や

けっぱちの気持からくる敏捷さで――便所の壁によじ登った。そして、足場に足をかけそこなったらどんなことになるかはあえて考えずに、便所と便所の間仕切りを踏み石としてあぶなかしげにつっぱしり、この洗面所では入口に一番近い小室で下におりた。戸が半分開いていたので、ピースは、その戸がつくる三角形の隙間に身を押しこんで隠れた。何秒かたつと外におおぜいの足音がし、そのあとで、ピースが錠をおろした便所の戸を怒りにまかせてはげしく叩く音がした。

追跡者たち全部が、自分のいる前を通りすぎたなと判断するやいなや、ピースは隙間から外へとびだし、えたりやおうと駆けだした。ピースが筋肉に過度の力をかけた効果で、すぐにわめき声があがった。それから、一種の機械的な無気力さで全部の手をいっせいにふっている自動販売ロボットのかたわらをひらりと体をかわして通りすぎ、食堂にとびこんだかとおもうと、出口をめざした。ロビーでは給仕長にぶつかったが、この男は、年のわりにはおどろくほどの反射神経で、両手いっぱいにピースの上着をつかんだ。

「つかまえたぞ」給仕長が勝ち誇ったように大声をあげた。

青い紙の服のかなりな部分をひっつかんだままの男をその場に残して走りつづけたピースは、なんとか無事に通りに抜けだした。車が往きかう道路や、買物客がごったがえす通路の全景はピースにとってまったくなじみのないものだったが、本能の導くままに左に折れると、その先ちょっとのところに裏通りの入口があった。七つ組みブーツに勝手気ままに前へ押しだされたように、苦もなく何回かとびはねてその入口に達したピースは、ふり返ってみた。

「逃げおおせっこないぞ」〝青いひき蛙〟の入口にあたる庇の下から給仕長が叫んだ。「警察がおまえをつかまえるし、オスカーが……」

たかまる恐怖にうちふるえながらも、裏通りを全速で駆けだし、何回か角を曲がると、前方に別の街路があらわれた。歩みを普通の速度におとしたピースは、午後もおそくなった陽光の中に足をふみだし、通行人の流れの中にまぎれこもうと懸命に努力したが——なにしろ靴もはかず、上着にはぽかんと穴があいた姿では、それもむずかしいことだった。そこで思ったのは、暗闇がおりるまで身を隠しておくところを探し、しかもそこが〝青いひき蛙〟のそばで、夜くる客をよく眺められる有利な場所にすべきだということであった。そうだ映画館が一番いい。ポケットにまだ残っている十モニットで充分入場券が買えるだろうとピースは思いついた。

心をきめたピースは、用心ぶかく建物ぞいに南へ歩き、細い道を反対側にわたると、角から百メートルほど先に一軒の映画館があるのを目にとめた。迷いもせずに目的の場所をみつけられたことに内心驚いたので、ピースは何回となくまばたきをしたが、ともかくたいへんな一日の中で、あらたな希望の灯がともされたのは、これがはじめてだなと感じた。以前の生活でタッチダウン市をよく知っていたものなら、足繁く出入りしていた場所を見れば、自分の記憶にまた火がつくこともあろう。こういった考えにいささかなりと元気づけられたピースは、映画館に近づき、なにか入場料のことを書いてはいないかと、種々雑多な広告に目をやった。懐にしている十モニットで中に入れることはすぐにわかったが、広告に書かれている料金以外の文面から察すると矛盾したところもあり、頭の中が混乱するようだった。

看板には〝大家族ショー〟とあった。と同時に〝激越な処女たち——成人のみ。子供のおたのしみ——虹の世界のフルウト付き〟と書きたしてあった。

建物は、二つのシネマ劇場がはいれるほど大きいとは思えなかったのに、どの広告も、成人映

画と児童映画の両方を特集した家族むきの娯楽だと銘うって、くどいくらいに宣伝していた。文字が明るく照らしだされているのにピースが顔をしかめていたとき、十二歳ぐらいと思われる天使のような碧い目の男の子が近づいてきた。この子は、銅色のシャツと靴下をこざっぱりと身につけ、清潔さにかがやき、よい環境で大切に育てられたという印象をあたりに発散していた。いかがわしい映画小屋にまといつく子供に、父親に似た関心をいだきはじめたピースは、自分自身のさし迫った問題を心の隅に追いやった。

「すぐ暗くなるよ」ほほえみながらピースが言った。「うちのお母さんやお父さんのところへどうして駆けてかえらないいんだね」

「どうしててめえは」とその天使が言い返した。「てめえの血なまぐさい仕事にとりかからねえのかよ」

ピースは口をぽかんとあけた。「そんな言葉づかいは、誰が教えたのかね」

「いらぬ口だしを誰がたのんだ」男の子は、頭の先から爪先までじろじろとピースを見まわし、悪がしこく値ぶみをしてから、表情をかえた。「あんたが五十モニットかせぐってのはどう」

「生意気言うんじゃないよ」侮辱されたと感じてピースが言った。

「それだけあれば靴が一足買えるよ——ぼくと一緒に映画館の中に入ってくれればいいだけのことなんだけど」

「なんて始末におえないじゃりなんだね。それにおじさんは……」通りの遠くのほうに一台のパトカーが巡回し、歩道に目を光らせているのをみつけたので、ピースの舌がもつれた。「中へ入ろう、坊や」劇場のロビーに入り、切符を買うあいだピースがいらいらと貧乏ゆるぎをしている

と、二人に、大きなサングラスのようなもののはいっている殺菌袋が手わたされた。ピースには灰色の眼鏡、男の子には黄色の眼鏡だった。ともかく、だれにも見つけられない薄くらがりの中に早く行こうと内側のドアをあけたとき、ピースの目にパトカーの鼻先がうつった。あいている座席をみつけるのは思ったより簡単だった。映写幕が明るく輝いていて、客席全体に強い光が投げかけられていたからだ。

中央の通路をおりて行きながら明るすぎるくらいの映写幕に目をやったピースは、そこになんの意味もない映像だけがごちゃごちゃとうつしだされ、映像にともなう音もなにひとつ聞こえてこないのに気づいて途方にくれた。上映になにか大きな手ちがいでもあるのかとピースには思われたが、百人ちかくの客はそんなことに頓着なく、有頂点になって楽しんでいるそぶりを見せて席にしがみついていた。老いも若きもが一様に、奇妙な形をした同じサングラスをかけているのに気づいたとき、ピースは、なにがおこっているのかをうすうすながら感じた。うらはらな気持で興味をそそられたピースは、小さな友人の隣に腰をおろし、切符売り場でもらった殺菌袋をあけはじめた。そのとき男の子がピースの手のものをひったくり、自分の黄いろい眼鏡がはいった袋と取りかえた。

「どういうつもりなんだ」とピースが小声で言った。

「これが取引だよ」男の子が、十モニット札を一枚、ピースの手にすべりこませた。「五時間かかるんだけれど、一時間ごとに十モニットを払うよ」

「でも、おじさんは……」

「黙って映画を見ようよ」男の子は灰色の眼鏡をかけ、ふかぶかと坐りなおして画面に熱中しは

じめた。
腹を立てたピースは、少しのあいだその男の子をにらみつけたが、やおら黄いろの眼鏡をとりあげてかけてみると、映写幕はすぐに普通の明るさにもどり、毛のふわふわした仔猫が蝶を追いかけている漫画があらわれ、それに合わせた音が、眼鏡の横枠を通して耳に伝わってきた。この仔猫の道化芝居を一分間も見ていたろうか。ひどく飽きてしまったピースは、眼鏡の真ん中にみつけた小型のスイッチにさわってみた。すると漫画映画は音とともに変わって、オレンジ色のハウンド犬が油のべとべとした柱に登ろうとしては失敗している画面があらわれた。スイッチをかちゃかちゃと前後に動かしてわかったことは、もう見てしまった、同じようにつまらない映画が二本選べるだけだということだった。少しのあいだその機構がどうなっているかを考えたあげく、眼鏡のレンズがストロボスコープの役をしていて、おそらくは一秒に百サイクルの振動で交互に不透明と透明になるのだということがピースにはわかった。スイッチを動かしてストロボの発光間隔をかえ、同調させると、映写幕に同時に投映されているいくつかの映画の別のものが、眼鏡をかけている者の目にうつるのだ。
ピースは、この小型の装置に組みこまれている機構が理解できたことに満足してうなずいた――旧式の映画の場合、観客は実際には、駒と駒とのあいだの暗いところを時間の半分も見ていたわけで、その時間を他の映画をうつすのに使うことは理の当然だったのだ。またこのことから、ストロボ眼鏡の透過効果を使わずに直接見たときに、映写幕が極度に明るく見えることも説明がついた。はたしてそうなのだろうか。映写幕はとても明るく、普通の輝きの四倍はあったろう。そのとすると、外の看板で広告していた〝激越な処女たち〟はどこにひそんでいるのだろう。そのと

き、ピースの隣に坐っていた天使の顔から、喜びのあまりの低いうなり声がもれた。
あやしげな少年だと思ったピースは、その子から灰色の眼鏡をひったくり、自分の鼻にかけた。すると、むっちりもり上がった肉が乱痴気騒ぎをしている光景が襲いかかってきた。とともに音響効果までが加わって、もし出演者の誰かがほんとうに処女であるなら、そんな喜ばしい〝処女マリア〟の状態がすぐにも失われてしまうのははっきりしていた。とはいえ、ピースの顔一面には、あたたかい感情がみなぎった。
少年がピースの腕をぐいと引いた。「ぼくの眼鏡を返してよ」
「いいや、返さないよ」ピースは眼鏡をはずすと、たたんでしまった。
「でもそのためにぼくはお金を払ったんだよ」
「そんなことは屁とも思わないね」きっぱりとピースが言った。「こういうものを年少者に見せてはいけないという法律があるはずだからね」
「それはあるさ、この石頭。でもなんでぼくが金を払っていると思う。さあ――眼鏡をこっちに渡せったら」
「そんなことは、してやれないね」ピースは、黄色い眼鏡を男の子にさし出した。「フルウトを見たほうがずっと面白いよ」
「フルウトなんてくそくらえだ」と少年が言い返した。「さあ、おっさん。眼鏡をわたせよ。さもないとあんたはひどい目にあうぜ」
ピースは相手を莫迦にしたように笑った。「おじさんはいろんなことを経験してきたつわものさ。いまさらどんなひどい目にあわせられると思うのかね」

「手をはなして」と少年が金切り声をたてた。「ぼくにさわらないで！　あっちへ行って！」
「ちょっと待ってくれ」びっくりしてピースが言った。「二人でたぶん……」
「いやだよ、おじさんの成人用眼鏡でなんか見たくないんだ——おそろしいことをやっているんだもの。見させないようにしてよ」説得力のある少年の声は、ヒステリーじみていよいよ高くさえなった。「ぼくはただ、茶色のハウンドとフルウトが見たいだけなんだ。手をはなしてよ。なにをするんだよ」
「本当のことかね」ピースのすぐうしろで、しわがれ声がした。力の強い手がピースを座席から浮きあがらせたかと思うと、ピースは急に両腕を後手にねじあげられ、通路におし出された。そのとき座席の端にいた女たちは、しっしっと言って前を通るピースをののしり、手にしたハンドバッグで痛くなるほどに正確なパンチをくらわせた。ピースは身をふりほどこうとしたが、つかまえている男は手に余るほど強かったので、肉弾戦の訓練を積んでいるにちがいないと思われた。男が、ピースの体を重い開き戸にはずませるという簡単な方法でそれをあけると、二人はロビーに出た。銀青色の髪をし、鼻めがねをかけた。経営者とおぼしき女が、騒ぎの音につられて脇の事務室から出てきた。
「こいつをとり押さえましたぜ、ミズ・ハーレイ」ピースをつかまえている男が報告した。「子供にいたずらした痴漢で、現場を押えましたがね。特別手当はもらえるんでしょうな」
ピースは頭を懸命にふった。「莫迦げてますよ。ぼくは男の子に手ひとつ、さわっちゃいませんぼくはただ……」
「だまりな、おまえさん」大男が、軽いむちうち症になるほどの勢いで、叱りつけるようにピー

スをゆさぶった。「この男、見たことがあるね、ミズ・ハーレイ。おれの特別手当についちゃ、ミズ・ハーレイ、考えといてくれてる……」
「おそらく、一人前の男が言うべきことを言っている言葉には、耳をかたむけなければならないでしょうね」ミズ・ハーレイが分別をわきまえた語調で言ったので、それがピースの耳には音楽のように聞こえた。鼻めがねを調節しながらその女が近づいて、ピースの顔に焦点をあてると、頬から突然、血の気がひいた。
「あなただったの」あとずさりしながら、あきれたという声でミズ・ハーレイが言った。「また例の癖をむし返そうというの。あなたにかかっては、どんな子供だって安全とはいえないわ」
「なんですって」ピースは言い返したが、相手の言葉があまりにも衝撃的だったので、あきらかに自分の過去と一縷のつながりが見いだせたことにも、満足が感じられなかった。「夢にも見たことがない話で……」
ミズ・ハーレイは、ピースの顔を指さして非難した。「変装しようとしていたのでしょう。髯で変わっているように見えるけれど、ちっとも変わっちゃいません。以前もここに来て、子供に手だしをしましたね。あなたは、化け物です」
聞き慣れた化け物という言葉が、心の中に何回となくこだましたので、ピースはもう、たくさんだと思った。そこで、自分では笑ったつもりの微笑を精一杯顔に浮かべて言った。「ねえ、このことは、あなたの事務所で穏やかに話し合えないもんでしょうか」
ミズ・ハーレイはかぶりをふった。「同時上映映画の評判にきずをつけるのはあなたのような人たちなんです」そう言って視線を、ピースの背後にいる大男に向けた。「あなたの笛を吹きな

さい、シンプキンス」
サブエーテル笛をもつ大きな手がピースの視野の隅に現われたかと思うとすぐに、あらゆる種類の超音波振動数がまじっていると感じられる、つきさすように震える音が発せられた。劇場に入ってくる人たちが立ち止まっては互いにささやき合い、嫌悪の情をあらわにしてピースをじろじろと見つめた。自分の気ままに過ごせる時間も終りに近づいたと悟ったピースは、がっくりと肩をおとした。警察はここに来る途中だろうし、何分とたたないうちには、子供にいたずらをした前歴があるということ以外はピースについて知りもせずに、軍団に引きわたすだろう。所詮、自分は化け物にすぎない——とすると、将来自分におこることはすべて、甘んじて引きうけねばなるまい。
「今日は街にいるオスカーが少ないのね」ミズ・ハーレイが気やすく言った。「でも、あの人たちが一番最初にここに駆けつけてくることはまちがいないわ」
「そう願いたいもんだ——警察は手ぬるすぎるからね」つかまえている男が、またピースをゆさぶった。「おれたちは八三年に、地球から来たこの手の制服のばかもんを、わが惑星から全部追っぱらわなきゃいけなかったんだ。政府に文句を言わなきゃなるまい。戦争で奴らをやっつけたのに、とどのつまり奴らがこの周りをうろついて、罪もないじゃりたちをふるえあがらせるなんて結果になるなら、あんなことをしてなんの意味があったろう」
「罪のないじゃりだって」オスカーの名があがったことで血が凍りつきはしたが、男の言葉に刺激されて抗議を申しいれた。「あのこわっぱが……ちょっと待ってくれよ。おれたちは、八三年の戦争で勝ったんじゃないか」

「あれ、そうかよ」大男が低い声で笑った。「そう見えるだけじゃねえのかね。この国の子供たちが靴もはかずに歩いているのを見たことがあるか。この国の子供たちが浮浪者のような下等な服を着ているのは見たことがあるか」自分がとりあげた話題に熱くなった男は、ピースをつかまえている位置を、上着の両肩に移した。「この生地を見てみなさいな、ミズ・ハーレイ。こりゃまあ、ひどいもんで……紙ですぜ」

大男のお喋りが一段落をしたのをうまくとらえたピースは、話が人物評から着るものに移って、押えている力にも変化が生じたのを感じた瞬間、映画館の出口めがけて走りだした。するとものの引き裂ける大きな音がして、その日の逃避行ですっかり弱っていたピースの上着が、完全にばらばらになった。半袖のシャツと軽い靴下だけの姿になったピースは、外の道路に向かって突進したが、こんなことはすべて前にも起こったことなんだとする奇妙な感覚が生じたまま、左に折れ、脚に地面を感じることもなく羚羊のように走った。逃走をさまたげようとするお節介焼きがいたらうまくすり抜ける心構えをしていたのだが、奇妙なことに、せまい通路をつっぱしっていても、誰も妨害するものはいなかった。午後もおそくなったころの買物客たちは、普通ならば、まともに服も着ていない男が街中を逃げまわっているのを見て好奇心をそそられるところだったが、このときばかりは壁にぴったりと身を寄せ、ピースが駆けている方向のはるかかなたにいるなにものかを見つめるだけだった。低く斜めにさす太陽の光をうけて目を細めたピースが、足をすべらせて急に立ち止まったとき、ある衝撃をうけて口をゆがませた。

隆々としたブロンズの筋肉を肩のところにきらめかせてこちらにやってくる光は、二人のオスカーではないか。

ピースには、それと同じ存在を過去に見たおぼえはなかったが、ディンクルが話してくれたことと結びつけるのはさしてむずかしいことではなかった。分厚い胴体がほっそりした臀部と力のありそうな腿へと先細りとなっており、髪の毛のない頭の丸屋根、全体が金属的な輝きを発する裸体、いずれも見あやまりようがなかった。楽々と飛ぶように走っていた二人が立ち止まり、一秒か二秒、相談したかと思うと――ほんとうにテレパシーの能力があって、ピースの心がのぞけたかのごとくに――おそろしいルビー色の眼をぎらぎらさせながら、ピースのほうに駆けだしてきた。

「こいつは困った」ピースは身体がふるえた。永遠に続くかと思われるほどの長いあいだ、立ちつくしたままだったピースは、思いなおして二軒の店にはさまれた裏通りにとびこんだ。その走りはじめの速度は、アドレナリンに昂奮させられたようなものすごさで、ぐんぐんと大股に何歩か駆けただけでも、スーパーマンの速さにまさるとも劣らなかった。銀河系内の短距離競争でも記録を破っているにちがいないと気づいたピースは、危険を冒してうしろをふり返ってみたが、長い通りのどこにも人影がなかった。自分に祝杯をあげる気分になりはじめたとき、ピースのすぐうしろの壁がばらばらと崩れて煉瓦の雨が降り、建物を斜めに近道することでカンニングをした二人のオスカーが、足もとに現われた。

金切り声をたてたピースが、スポーツ選手のように加速をかけたおかげで、金属の指につかまえられることだけは辛うじて免れた。道の角をはねかえって曲がったとき、目のすぐ前に、妙になじみがあるような感じの戸口が見えた。その戸口の上には、消えかかってはいるが、〝アクメ・レインコート社〟と読める看板がかかっていた。ドアをぱっと開けてそこに逃げこんだピー

スは、暗い階段をかけのぼった。古ぼけた踊り場で立ち止まると、目の前にまた別のドアがあり、そこには辛うじて判読できる文字で〝婦人便所――アクメの社員専用〟と書いた札がはってあった。

前のこともあるので、〝もうこれ以上は、便所の中になど隠れたくはない〟とピースは思ったが、ちょうどその瞬間、建物の外のドアが、木っ葉微塵に砕ける音とともに開き、二つのブロンズ像が、暗がりの中で眼を赤くかがやかせながら階段をどんどんとのぼってきた。

ピースが肩でおしわけて便所に入ったとたん、これは罠にかけられたなと思った。ピースの今いる小室は不潔で、あきらかに百年かそれ以上も使われておらず、他に出口はなかった。ただ一つの光源は、蜘蛛の巣のはった明りとりからのもので、たとえそこによじのぼれたにしても、小さすぎてくぐり抜けられはしなかった。向き直ったピースは、藁にもすがる思いでドアに懸け金をかけた――だがあまりにも手おくれだった。

オスカーたちは、すでに戸口に立ち、かがみこんで上框（がまち）の下からピースをじっと見ていたのだ。

ピースはあとずさって、黙ったままかぶりをふった。踵が床から突き出たものにふれて躓いた。ピースは、骨がきしむくらいの勢いで、その古めかしい便所の座席にすわりこんだ。

すると、奇妙な、ぶんぶんとうなる音が部屋じゅうから聞こえてきた。そして――ピースがびっくりして目が信じられないと思うより先に――自分を脅やかしているオスカーたちの姿が透明になり、完全に消え去ってしまった。

7

ピースは、何秒かのあいだ、まばたきをしながら、あのブロンズの巨人たちになにが起こったのだろうかといぶかった。あれだけのがっしりした大きな存在が実体をなくし、完全に消失することなどはありえないことと思われたが、自分自身の眼がそれを証拠だてていることは否定しようがなかった。あるいは自分の眼がおかしかったのだろうか。

奇妙な死刑執行延期のショックがおさまると、ピースは身のまわりをもっと正確に眺められるようになったが、この小さな部屋の中も奇妙なことだらけなことに気づいた。壁や天井が前よりきれいに、新しく見えるようになり、漆喰のひび割れが消え――自然の順序とは逆に――塗装もひとりでに塗りたてに近くなり、色さえ変わった。

力強くうなる音があたりに漲り、頭の上の窓では、雑然とした光が明滅していた。ピースは、この音と光のだす効果を、自分の以前の経験から拾いあげられるものと結びつけようとして、下唇をかんだ。赤ん坊のアスパトリア海老が水槽の中を動きまわっている図がふと頭の中に浮かんだ。あの音と光だと思ったが、そのすぐあとに続いたピースの苦難がどんなものだったかがよくわかっていたので、恐ろしさのあまりに呻き声をあげた。

そこでピースは考えを変えた。オスカーたちは無の中へと消え去ったのではない。二人は実体のままに残っていて、二三八六年にしっかりとつなぎとめられているのだ。一方、彼——ウォレン・ピース——が、二人の視野から消え去っただけなのだと。

ピースは、逃亡中のタイムマシンのなかで途方にくれていた。

「こんなことが、おれに起こっていいんだろうか」そう声に出したピースは、考えられないといったように何度も頭をふったが、そのときまた、関連のある記憶が頭の中にすくいあげられた。〝青いひき蛙〟の給仕は、あの持ち運びできるタイム・マシンのことを、単動式の内向性マシンだと表現していたが、そのことは他の機種があることを暗に示しており、中には——どんなものかはわからないが——複動式の外向性マシンだってありえた。内向性マシンがその機械本体内の時間の進行率を変え、外部の世界になんの影響も与えないものなら、外向性のマシンは——ピースはこの慣れていない思考と格闘した——内面的には正常な時間が流れ、外部の世界を年とらせ、あるいは若くする方向にもって行くことだってできるだろう。〝複動式〟という言葉からは、操作者が時間を後退するほうにも、前進するほうにも選べることを想像させた。しかしピースは、自分がまちがって入ってしまったこの機械を操作しているわけではなかったので、制御器がどこにあるのか、いま自分が旅行している方向がどっちなのか、あるいはなぜ誰かが、気違いじみたようにタイムマシンを真っ先にレインコート会社の便所に隠さなくてはならなかったのかについては、皆目見当がつかなかった。

針でつつくような、さし迫った感覚にうながされて、ピースがとびあがった瞬間、ぶんぶんとなる音はやみ、部屋の中の光は落ち着きを取り戻して、上からの正常な輝きだけになった。ふり

返って、ぐらぐらする便座を考え考え見ていたピースは、だれかが坐るとタイムマシンが作動する押しスイッチが便座の中にあるのだという考えは捨てた。このごろのピースは頭の中が混乱してはいたが、それにしてもどこかに限度というものがあったからだ。この装置の影響範囲の外に出たいと思ったピースは、踊り場に出てあたりを見まわした。建物は静まりかえっていたが、どこかに人の住んでいる気配があり、それが建物の状態がよくなっていることとあいまって、過去に旅しているのだとピースに仄めかしていた。問題は——どれだけ遠くに遡ったかだった。

頭を絞りつくしてぼうっとし、まだ身体がふるえてはいたが、ピースはドアを左にあけ、ききみみをたてて住んでいる者の音がしないのを確認した上で、ある種の科学研究のために設備をした大きな部屋に入っていった。ピースは、裁縫ミシンが並んでいるだろうと半ば予期していたので、装置類のキャビネットやケーブル、電気シャーシが散らばっていることには少しも注意を払わなかった。近くの壁にかかっている仕事用のカレンダーのところに近よったピースは、それを見て膝が突然、がくがくとふるえるのを感じた。日付が二二九二年と書かれていたのだ。ということは——もし数字をそのままに受け取るとすると——ピースが歴史を九十四年も遡ったことを意味していた。

ピースは眉に手を当てて、自分の今の立場をあらためてよく調べてみようとした。過去のことと思っていた事柄が今では未来に属するとすると、その過去についての知識をどれだけ取り戻しているものだろうか。父親と母親がまだ生まれてもいないに違いないときに、自分と両親とはどう結びつく機会があるのだろうか。

あたりをひとわたり見まわすと、作業台にのっている新聞紙が目についた。ポークパイと思わ

れるものの切れ端がその上一面に散らばっていたので、それは床に捨てた。紙面の上部にある日付は、〝二二九二年六月三日〟となっていたので――カレンダーで見つけた数字が確認された形となった。すっかり気落ちしてピースが数字に目をやっていたとき、研究所に入るドアのぱっと開く音がした。

「手を空にあげろ」と男の声がした。「おかしなまねをするんじゃないぞ。わしの銃が、おまえの第四背椎骨にぴったりと向けられているんだからな、だからな」

ピースがすなおに両手をあげた。「ねえ、わたしは泥棒なんかじゃありません」

「この場合は、わしが裁判官だ」とその男が言った。「おまえは、泥棒のような行ないをしたと見える、見える」

「ありきたりの新聞紙一枚を盗ったことが」運命が積み重ねて行くあらたな不幸に、また自分に手を上げさせている見えない男の、おわりの言葉を二度繰り返す神経質な性質に、いらいらしながら、ピースが大声をあげた。「そんなおおごとですかね」

「あの新聞には、大事な公式を書き留めておいたに違いないんだ、違いないんだ」

「たしかにですか」

「いいや、でもおまえはそんなことを知らないはずだ。こっちを向いて、顔を見せろ」

ピースはひとつ、大きな吐息をついてから向きをかえた。

「あれ、あんたなの、あんたなの」と男がつぶやいた。

「もちろんぼくはぼくさ」ピースは劣らずびっくりしたが、落ち着きを保って主導権を握った。

「ところで、ぼくっていったい誰なんでしょうか」

「あれ、自分のことを知らないのかね」とその小男が言った。主導権は取り返されていた。
「もちろん、知ってますよ——ただ、あなたが知っているかどうかがわかればと思ったもので」
「どうしてわしがそんなことを知っている。今まであんたに会ったこともないからね」
「でもわたしの顔を見たときに〝あれ、あんたなの〟と言ったばかりじゃないですか」
「わしはそんなこと言わなかったからね」
「いいや、あなたが言ったのは、正確には〝あれ、あんたなの、あんたなの〟だったじゃないですか」
「ひとが悩んでいる癖を、あざ笑おうというのかね」小男の血色のよい顔つきに、軽蔑の表情があらわれた。「そんな類いの非情さは、十九世紀に絶えたと思ったがね」
「あざ笑おうとしたんじゃなくて」我慢しきれないというふうにピースが言った。「ただ、起こった事実だけを言おうとしているんだ、いるんだ」
「ほら、まただ」小男がピースの鼻先にピストルをつきつけた。「わしはこれを使うのを怖がっちゃいないんだ、わかるかね、わかるかね。ところで、あんたは誰なんだね」
「わたしに前に会ったことがあるなら、知っているはずですがね」
「あんたに会ったことなどないね——あんたは、前に知っていた男に、ちょっと似てはいるがね。ところで、名前はなんて言うんだ」
「ウォレン・ピースです」
「とても本当の名前とは聞こえないね」小男は真っ赤にさえなりながら、怒って叫んだ。「警告しておく——おかしな言葉を使うのは止めることだな」

「でも、それがわたしの名前なんです――すくなくとも自分ではそう思っています」ピースは、自分を憐れに思う気持からくる声のふるえを押しとどめた。「いいですか、わたしは自分の記憶を失っちゃったんです」
「もっともらしい話だ」
「いいえ、本当のことです」
「あんたが、わしのアイディアを盗もうとするスパイだってほうが、もっと、もっともらしい話だな。わしが誰だか知っているかね。アーマンド・レッジ教授さ、発明家の」
「自分が誰だかもわからないわたしが、あなたのことを知っているわけがないでしょ」つっぱなすようにピースが言った。「本当の話、わたしには自分の過去の生活に関する記憶がなにもないんです」
レッジはピースをしばらくのあいだ見つめていたが、顔に出ていた敵意がだんだんに、度を越えた一種の喜びにかわっていった。「どうしたらいいのかがわかったよ」顔面をかがやかせながらレッジが言った。「もっと前に、なんで思いつかなかったんだろう。あんたを、わしの真相マシンにかけるんだ。あのマシンを試してみる絶好のチャンスだからな」
「真相マシンですって。試してみるですって」ピースはレッジを見返したが、狂った科学者の掌中に迷いこんだことからくる恐怖が、じわじわとたかまってきた。レッジはあたかも、トマトのような頰をし、サフラン色の髪の毛が頭の鉢を巻いている陽気な坊さんのように見えた。しかし外見は当てになるものではないので、ピースをつかまえている男はあるいはおそらく、農家の主婦が玉葱の漬け物をつけるのと同じように、ときおり人の大脳をもち出してはホルマリンの壜に

ぽんと漬けたりする精神に異常をきたした実験者なのかもしれなかった。この男が喋るときのおかしな欠点は、ピースには、音声をだす機構で歯車がからまわりをしているロボットのように聞こえたが、そのことも男がまったくもって非人間的であることを示しているといえよう。
「わたしをマシンにかけちゃいけません」きっぱりとピースが言った。「そんなことをしてはいけない法律があるでしょ」
「だからといって、誰が見つけるもんかね」
「オスカーたちが……」およそ一世紀もたたなければ存在するようにはならない生き物を取り上げてレッジをおそれさせることがなんの役にも立たないと気づいて、ピースは口をつぐんだ。
「心配しなさんな——全然痛みは感じないんだから。服を脱いで、そこに坐るだけでいいんだよ」レッジは連発拳銃を使って、部屋の隅にある、ピースが前には気づきもしなかったマシンを示したが、そのマシンは、不安になるくらい電気椅子に似ていた。
ピースは、銃口でこずかれながら残り少ない衣服を脱ぎ、木の椅子に坐って、前腕とくるぶしに分厚い帯がまかれるままにまかせた。レッジは、小さな制御函にコードで接続しているクロムのヘルメットを取りだしてピースの頭にかぶせた。それから楽しそうに口笛を吹きながら作業台の抽きだしをあけ、レース製のピンク色をしたブラジャーをひっぱり出したが、その左手のカップには小型の電子部品がぎっしり詰まっていた。レッジはブラジャーをピースの胸のまわりでしめつけてから、時間をかけて慎重に、その中にある機械類の位置ぎめをした。六本の小さなガスボンベをくりつけた持ち運び可能のワゴンが椅子のまわりにすえつけられ、そのノズルがまっすぐピースに向けられて、一本のレバーで操作ができるようにされるにつれて、ピースの不安が

高じた。

「勘弁してください」誇りをうち捨ててピースが哀願した。「勘弁してもらったら、二度とあなたに迷惑をかけるようなことはしませんから」

「さあ坊や、なにも心配はいらないよ。それどころか、わしはひどくご機嫌なのさ」

「わたしはそうじゃありません」

「問題があるとでも言うのかね。研究所にこそこそと忍びこんだ奴は、なにをやられてもそれだけの報いを受けるだけのことはあるのさ」

「でもわたしは、ここがレインコート工場だと思っていたんですよ。外にそう書いてありましたからね」

「誰でも知っているぞ、二、三年前にアクメが会社をたたんだとき、ここを買ったのはわしだということをね。だから、そんな言いのがれを言っても、気にもかけやしないさ」自分の機械に最終的な調整を加えているレッジの目に、狂的な光があらわれた。「さあ、ぐずぐずしているのもこれでおわりだ。いよいよ時が来たのさ、レッジ真相マシンがもうひとつの考案品にとって代れるだけの値打ちのあることが証明される時がね、あのレッジ式きおく……」この小男は急にお喋りを打ちきり、ひどく軽率なことでもしたかのように片手を口に当てた。

「なんて言おうとしたんですか」興味が湧いたのでピースが訊いた。

「いやなんでもない。ちっとも、ちっとも」レッジはいそいで制御函のスイッチをいくつか入れ、六本のガスボンベを調節するレバーを握った。「十、九、八、七、六……」

「わたしになにをしようとしているんです」

「第一段階として、あんたの精神電流反射が起こらないようにするんだ」とレッジが答えた。
「五、四、三、二、一、一」ぎゅっとレバーを押しさげると、しゅっという大きな音がして、ボンベの中味がピースのほうに放出された。
「ガスなんてだめですよ。ガスには降参なんです」灰色の霧に取りかこまれたピースは、自分を縛りつけている帯と格闘したが、急に静かになった。信じられないことに、安物の香料のにおいを嗅いだからだ。「あれ、これは、〝ばらの国フレッシュ防臭剤〟のようなにおいがしますね」
「まさにそのとおりさ」とレッジが言った。「匂いがお粗末で申しわけない――でも、角のスーパーマーケットで特売していたものだからね。スタンプが三倍もついていたし」
「それにしても……」ピースがくつくつと笑った。「なんで防臭剤を」
「防臭はつけたりなのさ――わしは発汗防止効果だけに目をつけているんだ」
「意味がわかりませんね」
「あんたの精神電流反射が起こらないようにするためだ、お人形さん。今までの嘘発見器の原理は知っているだろう。その働きは、被験者が嘘をつくと、感情にストレスがおこって、汗が出る――その結果、皮膚の電導性がたかくなるというものだったよな。同じストレスが心臓の鼓動をはやめ、大脳のリズムを変えるんだ。嘘発見器(ポリグラフ)はこういったことをすべて検知し、被験者が嘘をついているかどうかを示すんだが、それだけでは片手落ちで問題を半分しか解決していない。つまり、嘘がわかることと、真実が語られていることとは同じじゃないんだ」
「そうですかね」とピースが言った。
「もちろん、その二つは同じじゃない。そこでわしは、嘘発見器のシステムをあべこべにしたん

だ。今はほら、あんたは汗がかけないだろ。毛穴に発汗防止剤が詰まっちゃったからさ。速度調整をするスーパー・ペースメーカーが紐でくくりつけられているから、心臓の鼓動だって早くはならないんだ。それにあんたがかぶっているヘルメットね、それが大脳の脳波の型を正常なままにしている。

さてそこでわしがあんたに質問をする。するとあんたは――古くさい、嘘につきものの心理的反応がすべて押えられて――真実だけを答えるようになる。どうだ、よく考えた、精妙なものだろうが」

ピースはちっとも感心しなかった。「なにか言うのを拒否したら、いったいどうなるんです」

レッジが銃を取り上げた。「その場合は――これをお見舞いする」

「いやじつに、よく考えた精妙なものですね」とピースがそっけなく言った。「でもこれは、まったく時間の無駄づかいだということがわかってくださらなきゃね――だってわたしには、真実を隠す理由なんてないんですから」

「わたしに嘘をつくんじゃないぞ」

「あなたの真相マシンにかかっているわたしが、どうして嘘をつけます」

「忘れてた、忘れてた」レッジは虚をつかれて、うろたえたように見えた。「あんたは、かなり頭がよさそうだね、ノーマン」

「いいえ、わたしはそんな男じゃ……」ピースはもう一方の男をつきさすような目で見つめた。「なぜわたしのことを、ノーマンと呼んだんです」

「うーん……あんたの名前がノーマンと言うんじゃないかと思ったものでね」

「わたしはあなたには、まったくの赤の他人と思いますがね。あなたはわたしのことを、泥棒だかスパイだかと思っている――それなのにあなたは、わたしのことを姓でなく名前で呼ぶ間柄だと思っている。辻褄が合いませんね、教授。さあ――前にわたしに会ったことがあるとお認めなさい。わたしが誰だか知っているとお認めなさい。お認めなさい、あなたは……」感情が激してピースは言いさしたが、一つには、論理では勝ったと思って身を前にのり出したその鼻先に、まともに防臭剤が噴射されたので、くしゃみをしたくなって能弁の効果が減ったためであり、また一方では、自分が厳密に言って、まだ生まれていない時代にいることを想い出したためでもあった。ただ、レッジが以前に、ピースとどのように識り合えたものかはわかりにくかった。それにまだ……

「どうしたね、インテリさん」とレッジがあざけった。「専門用語でも言いちがえたかね、あんた、あんた」

「わたしのことをどうしてインテリなどと呼ぶんです」とピースは言ったが、自分のかかえている問題が解決に近づいているというかすかな希望がきざしただけに、かえっていらいらした。そのときふと思いついたのは、なんとか自由の身になった上で、もしこの珍妙な機械が役立つものなら、逆に教授が考えたこの真相マシンにくくりつけてやろうということだった。その方針にそってピースは、自分を捕えている者のご機嫌をとりはじめることにした。

「インテリなんてわしは嫌いだね」レッジはあとをつづけた。「誰かが何年か大学に通い、二、三の学位をとっただけのことで、十五歳で学業をおえた普通の男よりずっとものを知っていると思いこむなんてね」

「たしかに莫迦げた考えです」とピースが言った。
「言わしてもらうなら、わしは誰よりもすぐれた科学者であり、考案家なんだ。なあ、アインシュタインが偉大な科学者になれたのは、高い知能指数のおかげでも、すてきな教育のおかげでもなかったのだよね。問題への取組み方が単純で、子供っぽかったからさ――そこでわしの取組み方だが、おそらくアインシュタインよりもっと単純で、子供っぽいと言えるだろう」
「疑いなく、そうでしょうね」
「ありがとう」レッジは気持をやわらげたかに見えたが、直面している仕事が大切なことを想い出すと、厳しい表情が顔に戻った。「訊問をつづけなきゃ――あんたが記憶を失ったというのはいったいどうしたわけだね」
「本当の話ですよ、教授。わたしは、自分がなにものなのか、わからないんです。わたしに関するかぎり、生活はひと月くらい前にはじまったばかりなんです」
「うーむ」レッジは制御函を見てから、うなずいた。「そんなことは、映画の中で起こるものだとばかり思っていたよ。なにがあんたの記憶をなくさせたかについては、どう考えているのかね」
「それなんです。なにかを忘れるために宇宙軍団に入隊したら、軍団がわたしの過去の生活を一切合財、消してしまったんです」
「軍団だって」レッジはいきいきとしてきた。「わかった、わかった。軍団は、ほんの一年間かそこいらの記憶心像を消去するだけなんだ。だがたぶん、あんたの場合にはへまをやったんだろう」

ピースはかぶりをふった。「二三八六年に入隊したんですが——そのときまでに軍団は、その機械について一世紀近くの経験を積んでいたんです」

「でもそれは……うむ……九十四年も未来の話か」レッジは、何気なく便所のある踊り場に目をやった。「あんたはまさか……」

「そうなんです。追われていたんで、この建物に駆けこみました——理由もなしに——そして便所の中に隠れたんです。つぎに気づいたら、二二九二年のここにいて、あなたが銃でわたしを狙っていたんです」

「また起こったんだな」陰気そうにレッジが言った。「大半の責任はあのスミルコフのやつにあるんだ」

なんのことかわからなくて、ピースは苦い顔をした。「スミルコフって誰なんです」

「ディミトリ・スミルコフだよ——アスパトリアでも一番けちな奴さ」ピースの言葉が信用できることに満足したレッジは、マシンのスイッチを切りはじめた。「奴は不法なタイムマシンを作って、便所の中に隠したのさ。籠を壁の中にかくまったんだ、かくまったんだ」

ピースにはますますもってわけがわからなくなった。「でも、そんなばかげたことをするなんて」

「あのレインコート会社をやっていたのは、スミルコフなんだ、いいかね。女たちが便所の中でひまをつぶす時間まで給料を払わなくちゃならないことにかっかときた奴は、まだこの場所をひとりじめしていたあるクリスマスの日に機会を見つけたので、タイムマシンのキットを持ってここへやって来て便所の周囲にそれを組みこみ、その上で壁を塗りかえたので、誰も気づきようが

なかったんだ。その改修費のために、女たちの生産割増し金まで削ろうとしたとも聞いているよ。けちを絵にかいたようじゃないか」
「でも、それでどうしようという考えだったんですかね」
「そこだよ。マシンは外向性マシンだった――官庁だけが動かしてもいいやつだ。スミルコフはこう考えた。誰かが便所でどんなに長いことひまつぶしをしても――たとえば本を読んだり、煙草をすったり、お喋りをしてもだ――そいつが外に出てきたときには、外の時間はたったの一秒しかたっていないだろうと、だろうと」
「やれやれ」心得ちがいも甚だしいアイディアマンの才能にピースは度肝をぬかれた。「それでも……レインコートの生産は上がったんでしょうね」
「それが大違いさ、あんた。あのうすのろは――科学の知識をもっていなかったので――マシンをまちがって据えつけちゃったのさ。調子が安定しないで、おかしなことになり、女たちは消えはじめた。そこでこの場所にお化け屋敷という評判がたって、誰ひとりここで働こうとする者がいなくなり、スミルコフは商売がなりたたなくなってね。おかげで、わしが研究用にこの建物を買いとることになったというわけさ」
「マシンが働かないようにはできないんですか。機能を停止させるわけには」
「莫迦言っちゃいかんよ」レッジがピースのかかとに締めていた帯を解きはじめた。「主装置のところまで行くには、中に入らなきゃならんじゃないか。今とは別の世界の中に投げだされる危険にさらされるなんてごめんだよ。わしは気が狂っちゃいない、そうだろう、そうだろう」
「少なくとも、ドアに釘をうちつけて、閉めきってしまうべきじゃないんですか」

「そんなことをしたって、人がほかの時間からやってきて、その便所の中で肉体を取り戻すことを防げっこないし、連中は餓えて死んじゃうかもしれないじゃないか」レッジは、いやなこったというように顔をしかめた。「死体でいっぱいの部屋のそばで働くなんて、あんたの好みに合うのかね」

「いや、とても」とピースは認めざるをえなかった。自分の命に対する直接の脅威はうすらいだので、だんだんと高まる興味につられてピースは、周りを仔細に見まわした。ひどく散らかってはいたが、この研究所の中には高価な機械類がたくさんあったので、自分の仕事のために一つの工場の建物をまるごと買える考案家ないしは私的な研究者というのは、たいそう成功した男にちがいないと思われた。その結論を、えらく狂っていると思えるレッジ自身の行状と折り合わせるのはむずかしかったが、男が狂っていると同時に頭も切れるというのは、ありえることだった。前腕の帯がほどかれたピースは、やれやれ助かったとばかりに指をぽきぽきと曲げてから立ち上がった。

「実に大したところですね」とピースが言った。「ここで、どんな種類の仕事をなさっているんです」

レッジは、椅子からあとずさり、銃を拾いあげた。「あんたにそれを喋るほど、わしの頭が狂っていると思うかね」

「でも、わたしがスパイじゃないということははっきりしたんじゃないですか」

「スパイが知りたがっているようなことを、あんたに喋らなくちゃいけない理由でもあるのかね」

「そんなことはありませんけど」この小男が銃を手にしているあいだは、これ以上いらいらと落ち着きをなくしてはもらいたくなかったので、ピースは二人の話を害のないほうに操って行こうと心に決めた。胸からピンクのブラジャーをはずすと、それをもち上げてみせ、心にもないほめ言葉をうそぶいた。
「もうすこし手を加えたら」とピースが言った。「マシン全体をこの中に組みこめるでしょうにね」
「このけがらわしい、セックス過剰の豚め」レッジが大声をたてた。顔の色が赤から、危険この上ない暗褐色に変わっていった。「よくもわしの娘を侮辱してくれたな」
「教授、わたしはそんなこと知りませんよ……」
「反吐が出るほどだ、と言いたいね」レッジが銃を波うたせると、その銃口は人を脅かすような輪を描いた。「わしはできるかぎり楯になってやったんだ、わしの小さな娘の、わしのかわいい小さな子の、わしの汚れを知らない小さな……」
「娘さんは、そんなに小さなはずはありませんよ」その場の、感情的に激した熱を冷まそうとして、ピースは筋の通ったことを言った。
「なんだと、きさまの好色と淫乱にはとめどがないのか。銃をつきつけられていてさえ、きさまの考えられることといったら、ブラジャーの寸法が……」言葉を途中で飲みこんだレッジの目には、ほかの手を使おうとする決心の光があらわれて、ピストルの狙いがぴたと動かなくなった。
「とてもきさまには我慢がならない。いよいよ言うときが来たな、おさらばと、おさらばと」
ピースはふるえ上がって身をひいた。「武器を持っていない人間を撃つなんてことはできませ

んよ」
「そんなこと信じたってだめだ」レッジの声に、不穏な冷たさの響きがあらわれた。「さあ来い――歩くんだ」
「どこへですか」
「あのタイムマシンに戻るんだ、もちろん。きさまがそこらをうろついているあいだは、わしの娘が安全ということは決してありえないからな」
「わたしを、あんなものの中にもどすなんて、できっこありませんよ。あなたがそんなに冷酷なはずないですものね」
「歩きはじめるんだ、はじめるんだ」
絶望的にピースはあたりを見まわした。「せめて服でも身につけさせてくださいよ」
「きさまは、わしが莫迦ものだとでも思っているのか」とレッジが言った。「〝煙草を一服すってもかまいませんか〟といった古い手は、わしには通じないね――そんな映画は何回だって見ているものな、お若いの。きさまが煙草入れのボタンを押すと、わしの眼に催涙ガスがとびこむなんて寸法さ」
「わたしは、煙草を欲しがっているんじゃありません」とピースが答えた。「着るものが欲しいだけなんです」
「するとシャツのボタンから催涙ガスがわしに向けて吹き出すというわけかね。さあ、動け」
レッジをうしろに、ピースはドアのほうへ歩きはじめた。ドア近くの作業台まで行ったピースは、前にポークパイの切れ端をふるい落して日付を調べた新聞紙を取りあげ、せめてもの体面を

保とうとして、それで腰をくるんだ。それからあえて抵抗せずに踊り場まで連行されていったが、将来が未知であることに対する恐怖よりも、もし中へ入ることを拒否したらレッジはピースに対して何をするだろうという関心のほうが高まって、便所のドアの前で立ち止まった。
「ちょっと」小男に向き直ってピースが言った。「この階は地面から相当高いところにありますね——そこで、もしわたしが、この建物の建てられる以前の時代まで戻ったとしたらどんなことが起こるか、あなたの考えを教えてくれなきゃあいけませんね」
「よしわかった。わしなりの考えを教えて進ぜよう」レッジは少しのあいだ考えこんでいたが、そのあとで顔に微笑を浮かべた。「うん、これは気に入った、気に入った」
「まさかあなたは、わたしがここから落っこって死ぬのを見たいというわけじゃないんでしょうね」
「残念だけれど、そんなすばらしい光景になることには否定的だ。どんな場合にもタイムマシンは、振動を減衰する位相に向かうだろう——振動にはそういう傾向があるからね。あんたはおそらく、自分がここに入った頃に近い未来に出ることになるんじゃないかな」
「それは教授だけの当て推量にすぎないんじゃないですか」とピースが言いがかりをつけた。
「まあそれはともかく、わたしは、あなたがその引き金を引くだけの神経を持ち合わせないと考えるようになったので、そこで……」
「そこで、なんだね」
「そこでわたしは、タイムマシンの中に入ることをお断りします」
レッジが肩をすくめた。「それじゃ、あんたの葬式をだすことになる」まさに殺人を犯す気に

なっている男の表情をみせたレッジは、ピストルの撃鉄をおこした。ピースは、これはたいへんな判断の誤りをしたかなとあやしく思いはじめたので、不承不承ながらも一歩あとへ下がった。頭が芯まで疲れる沈黙がつづいた後に、銃口がゆらゆらと波うちはじめた。それを見たピースは、ほっと安堵の息を吐いた

ちょうどそのとき、すぐそばの、上の階へ行く階段で足音がし、カールクリップを髪にさか立て、刺し子のナイロン服で身をふくらませた、レッジ教授生き写しの、ピンク色をした大柄の女が視野に入ってきた。

「あら、おとうさん」姿に不似合なバリトンで女が言った。「あたしの一番いいブラジャーをまた使っているのね、おとうさんのおめでたい……」ピースを目にして口を閉じた女は、信じられないことが起こったといった喜びを顔一面にたたえ、両手をいっぱいに拡げてピースのほうへどしんどしんと音をたてて近づいた。「ノーマン、またあたしのところへ戻ってきてくださったのね」

ピースの反応はまったくもって本能的だった。

あとずさって便所にとびこんだピースは、足がかりを失ってがたがたの木の便座に尻もちをついた。するとぶんぶんと大きな音がし、光が明滅しはじめて、戸口にいるレッジ教授と娘の電球のような姿が視野から消えはじめた。新聞紙をまとっただけのピースは、またふたたび時間を通りぬけて旅をしているとわかって、不安のあまりに呻き声をたてた。

8

ピースが心を奪われたように熟視していると、小さな部屋の壁が色を変えはじめた。周囲のおおよその状態が、古ぼける方向に向かっているのを見て、主な心配の一つは消えた。つまりピースは、未来に向かって旅をしているのであり、建物が突如存在しなくなって中空に置き去りにされる過去の方向ではなかった。ごちゃごちゃになった頭の中を整理する息つぎの余裕があることに喜んだピースは、しばし緊張をゆるめたが、すぐに、建物全部がいつかはとり壊されることになるのだと思い至った。未来へあまりにも遠く行きすぎると、地面に投げだされるか、あるいはもっと悪いことに新しく建て替えた建物の壁で身体を二分されることになろう。

人生が熱いフライパンの次に火の中へとびこむのと同じようなつづき具合を示していることに心配し、悲しくなったピースがあわてて立ち上がると、すぐに時間旅行にまつわる音と光は止んだ。埃まみれの明りとりからの輝きがまた落ち着きを取り戻し、部屋がピースの目には、はじめて見たときとまったく同じに見えた。恐ろしい金ブロンズの巨人が二人、ルビー色の目をぎらぎらさせてにらんでいる図が見られることになるのではないかと思って、ドアのほうに目をやったが、外の踊り場には人気がなかった。静寂があたりを包み、墓場のようだった。ただ外で、街の

雑踏の音がかすかにしていた。
間に合わせのキルト・スカートを腰にあてたピースは、注意深く踊り場に進み出た。あらゆるものに埃が層となってかぶさっていたので、主観的にはたった一分前に生きていたレッジとその娘が、おそらく運命の割りふった人生を見おさめにして、いまでは墓か骨壺の住人になっているだろうと考えられたので、ピースはうなじがむずむずとしてきた。左に折れ、ドアを開けて、レッジの研究室だった大きな部屋に入った。作業台のいくつかは元のままだったが、ごちゃごちゃとした機器類は――いくつかの小さな品や電線は別として――とっくに撤去されていた。時間が猛威をふるった壁を見まわしながらピースは、自分が知っていたことの半分でも反芻してみようとつとめた。
レッジ教授の娘はピースを知っていたし、ノーマンと言って呼びかけもした。とすると自分の名前は本当にはノーマンなんだろうか。あるいは、以前の、レッジ親子が生きている時代への旅で使った別名なんだろうか。そんなことをする理由でもあったのだろうか。レッジ教授がピースのことを知っていたとすると、その事実をなぜ隠そうとしたのだろうか。そこまで考え至るなら、自分が実際には二十三世紀後半の市民ではなくて、二十四世紀も後半にともかくも移しかえられた人間だと、どう確かめられるのだろうか。あるいは二十三世紀の法律に追いかけられて、未来に逃げこまざるをえなかったのだろうか。自分はどんな罪を犯したというのだろう。自分は――とても考えるにしのびないことなのだが――映画館の女経営者が言っていたように、本当に小さな子供たちに痴漢をはたらく常習犯なんだろうか。
ピースの性格には現実的な側面があったので、自分が無益なことを思いわずらって時間をむだ

に浪費していることにはっと気づいた。まず第一に必要なのは着るものと金、それに自分がいまいる時を正しく確定することではなかったのか。そこでいくつかの戸棚の戸をあけると、そんな幸運はとても信じられないことだったが、研究所で働くものが愛用する、もとは白衣と思われた服が錆びた釘にかかっているのが見つかった。丈があまりにも短かったが、この部屋で物品がしまえる場所をいくら探しても、それ以上の宝は出てこなかった。上の階に移り、誰もいない居間を歩きまわっているうちに、ふわふわした寝室用のスリッパを一足見つけたが、その大きさから察すると、以前はレッジの娘のものだったと思われた。そのスリッパはあまりにも年代もので、ばらばらになる寸前だったが、ピースの足にはぴったり合ったので、足を守る役に立った。この一揃いは、ピースの感じるところ優雅さに欠けてはいたが、もしこの建物にお化け屋敷の評判さえ立たなかったら、いずれは地元の餓鬼たちがやって来てなにもかも引っさらって行くにちがいないから、そうなればピースは前と同じ状態の、裸でいなければならなかったろう。

少年が自分の収入の足し前とするために使う伝統的な方法を想いだしたピースは、研究所の埃に埋まっていたずらに役立たなくなっている雑多な金物の残りに目をつけた。そんな品物のひとつは、ピースの知っているかぎりで言えばブンゼン灯だった。ブンゼン灯はいつまでも使用に耐えるので、半ば骨董の地位を得ていたのだ。そう気がついて慌てて大きな研究室に駆け戻り、例の新聞紙をひろげたピースは、銅のコイルや電子部品のがらくたを一山、その上に積みあげた。ブンゼン灯は頑丈な上に作りもよいという感じを与えたので、十九世紀の真鍮の顕微鏡とは同日に論じられないにしても、流行の先端を追う蒐集家に血道をあげさせることが充分に想像された。

分捕り品をひとまとめにくるんだピースは、研究室をあとにし、階段をおりて道と同じ階まで

行った。それから錆びついた閂とすこしのあいだ格闘したのち、ドアを開け、冷たい紫色の薄明りの中に足をふみ出した。裏通りには誰も見当たらなかったが、往来の物音から察すると街ではまだ買物客もしきりで、そんなこんなが季節は春か秋、時刻は午後もおそくであることを物語っていた。オスカーに出会った通りをはなれて右に折れたピースは、反対側の街並みを目ざして歩きだした。

角まできて周りを注意ぶかくうかがったピースは、通りすぎる車が自分の覚えているとおりなことに気づいて——つまりそのことが、未来も遠い時代にとびこんだわけではないことを示していたので——ほっとした。明りのついた店の窓も、かたわらをピースに一瞥もくれることなく急ぎ足に通りすぎる歩行者同様、ひとを安心させるかのように正常なものと見えた。それに勇気づけられてピースは、人の流れの中に合流し、どこかにあるはずの古道具屋を探しはじめた。ふわふわとした寝室用のスリッパがぬげないようにするため足をひきずる恰好となったので、歩みはぎこちなくなった。またピースにとって脅威だったのはいたずら者のそよ風が軽い白衣の裾をたえずもちあげようとしたことで、そのため何度となく立ち止まっては、着ているものを脚のあいだにたくしこまなくてはならなかった。それにも増して、包みを抱えこんでいるために脚をあげることも膝をはなすこともできないでいるピースは、ここそ歩き回る、服装倒錯者のせむし男に見られかねないことを不愉快ながら認めざるをえなかった——その光景は、この市でもっともわきまえのある住民のあいだにもとかくの噂を立てさせざるをえない態のものだった。

怖れていたとおり、男も女も通りすがりに立ち止まってピースを見つめるようになった。そこでピースは、人に害を与えない白痴だという印象を与えようとにたにた笑ってみせたが、面白が

った観客はすぐに、一団となって金魚の糞のようにピースにつき従った。おそかれ早かれ警官もこの列に加わると判断していよいよ悪夢のように感じたピースは、露出度がどれくらいになろうとかまうものかという気持で、あわやまっすぐに突っ立ち、駆け出そうと身構えたとき、二、三軒先に、〝R・J・ペニコック——古物商〟と書かれた看板がかかっているのを目に止めた。しんからほっとしたピースは、あわてて小走りにその物わかりのよさそうな店まで行き、中にとびこみ、ドアを後手に閉めた。ドアによりかかって鼻息もあらくはあはあ一息いれていると、一群の猟犬から逃げのびた狐のような気がしてきた。

「ここからすぐ出ていかなかったら」とガラスのカウンターのうしろから声をかけたのは、冷たい眼をした若い男だった。「警察につき出すぞ」

「わたしにそんなことはできっこありませんよ」かぶりをふりながらピースが喘ぎ喘ぎ言った。

「どうしてそうできないのか、わけを知りたいね」若い男がサブエーテル笛を取りだし、唇にあてがった。

あたりを見まわしたピースは、本当に高価な買物でもすれば明朝の壺などはおまけにつけてくれるくらいの、同じ骨董品でもトップクラスの物が引き受けられる店に逃げこんだことがわかって、心が沈んだ。急に自分の腐蝕したブンゼン灯の威信がゆらいだように思われたが、図々しくふっかけて、時間をかせぐより他の方法を思いつかなかった。

「単純な理由ですよ、ペニコックさん」カウンターの前に進みながら、強い印象を与えようとしてピースが言った。「というのは、売りたいものがあるんです。最初にちらっと見ただけでは値打ちがわからないかもしれませんが、一生に一度、おがめるかどうかという代物をわたしは持っ

ているんです」カウンターの上に包みを置き、開けて拡げると、現われたものは——ピースの目にさえ——シャベル一杯分の金属のスクラップにすぎないものと見えた。この蒐集品中の白眉であるブンゼン灯も分解されてしまっていた。

ペニコックがこの雑多ながらくたを見おろした。その頬にさしていたかすかな色けのあとがさっと消え、一秒とたたないうちに莫迦にしたような表情が変化して——信じられないという様子から喜びへ、むさぼりつく方向へと移り——丁重に注意を払うようになった。「売られようとしているのは、あなたの持ち物ですか」

「もちろんです」

「どこで手に入れられました」

「拾ってきただけなんです」ピースは、業者の顔で演じられる感情の変化を見つめていたが、中古の背広を買ったらお釣りがくるほどの金額が保証されているはずの古いブンゼン灯に気を入れすぎて、へまをやったかなと心配になりはじめた。「拾ったところへ行けば、もっとありますよ」鼻のわきをたたきながら、ピースは大丈夫というように言い足した。

「これに千、出しましょう」ペニコックが小気味よく言った。「問題はないでしょう」

「千だって」隠された富を鑑定でもできるかのように、偏らない眼でこの汚らしいがらくたを見直してみようと、ピースは掘り出しものの小さな山に仔細に目を配った。

「よろしい、二千にしましょう——でもこれがわたしの最高の付け値ですよ。この値で手を打ちませんか」

ピースは唾をのみこむのに苦労した。「よし、それに決めましょう」

若い男は抽出しから大きくて色数の多いお札を二枚取り出し、ピースに手渡した。それから注意ぶかくブンゼン灯とその他の品物をかき集めると、廃品処理機の中に落した。品物があとかたもなくなるにつれて、その機械の中でグリーン色の原子の火がきらめいた。

「なにをしているんです」芸術的な骨董品だと思いはじめたものが無頓着に始末されたことにショックをおぼえてピーナスが言った。

「こんなものはもう要らないんです」とペニコックが言った。「古いがらくたを新聞紙にくるむというのは新手のアイディアでしたね――昔の手押し車のトリックを盗作したもの、古い〝盗まれた手紙〟の手を使ったというところですか――でもそのために新聞を汚しちゃいましたね」若い男は新聞紙をうやうやしく平らに拡げ、よくよく調べてから、ショックを受けたという表情でピースを見上げた。「よく調べたうえでなかったら、誰かがこの新聞紙からポークパイを食べたんじゃないかと思いこむところでしたよ」

「そんなことは決してありませんよ」しびれたようにピースが言った。

「あなたのおっしゃることが正しいようですね。汚れのない目をもった人なら、二二九二年にレーザー光線で印刷し、ワルド式自動機械で折りたたまれたままあたらしい新聞を悪く言うはずがありません」ペニコックは、含みのある目でピースを見た。「こんな状態の良い現物は長いこと見ていません――まるであなたが外向性マシンを持っていて、このためにわざわざ過去へ行ってきたみたいですね」

「でもそんなことは違法でしょう」禁制品の有力な入手元になりすまそうとする努力から、片目をつぶってみせてピースが言った。熱中している蒐集家の心理状態には赤の他人だが――いまで

は事情が呑みこめてきたので――ことが都合よく運ぶものなら、すべてを利用しようとピースは心に決めた。「ねえ、ペニコックさん、あなたは……」
「わたしをレジーと呼んでください、どうか」
「わかりましたよ、レジー――わたしはウォレンと言うんですがあなたの事務所に行って話をしませんか。実のところ、着るものをなにも身につけていないんで気がひけているんです」自分の脚が細いことをひどく意識しているピースは、頭から爪先まで全身をじろじろ眺められても我慢した。
「そのことであんたに聞こうと思っていたんです――ぶしつけに聞くわけにもいかなかったものでね」とペニコックが言った。「どうして着物をなくされたんです」
「ええ、その……」うまく答えようがなくてピースは参った。「どうしてと言われてもね」
ペニコックの眉が晴々とした。「わかりましたよ。もうなにも言わなくたってわかります、ウォレン」
「わたしからは言えませんものね」ピースが口をはさまないことを保証した。
「女のご亭主が思いがけず家に帰ってきたので、あなたはそのため逃げ出さなきゃならなかったと言うんでしょう、好き者の野兎ですな、あなた」ペニコックは親しみをこめてピースの肩を叩いた。「まあそう言ったって、気にしているわけじゃありませんがね、ウォレン。こんな服装で、しかも薔薇のひどい香りをただよわせてあなたがここに入ってきたとき、わたしがすぐに考えたのは……」
「よくもまあ、そこまであなたは考えついたもんですね」

「まあいいでしょ――あなたのことがよく分かってきたんだから、あなたを種馬かなんかに仕立てたって」

ピースはそうだそうだと相槌を打ったが、そのとき別の考えが頭をかすめたので心が乱れた。ひと月以上も肉体的な喜びを経験していない若者の場合には珍しい話だが、ピースの身体の中には、どこを探しても異性に対する興味が見当たらないことに気づいたのだ。おれは疲れすぎているんだとピースはきめつけた。軍団の同僚たちが――消耗し切っている上に栄養不良なのにもかかわらず――とぼしい軍務の余暇をさいて、つぎの休暇にはどんな莫迦騒ぎをやらかそうかと考えていたことの想い出は無用のことと脇におしやった。むずかしい顔をしながら、しかも少なからず控え目にピースはペニコックについて敷地の裏手にある事務所に入っていった。

「衣類を手に入れるつてでもありませんかね」とピースが言った。「いくらかかったっていいんですけれど」

ペニコックがうなずいた。「〝十モニット洋服店〟がこの二、三軒先にあるんです。だれかをやって背広とその他のものを揃えさせましょう」

「十モニットですって。悪くないですね」

「百モニットにだって相当しますよ――インフレなんでね、なにしろ」靴下もはかないウォレンの脚を愉快そうに見ながら、ペニコックは話題をかえた。「あなたは芯からすき者の野兎ですね、ウォレン」

「そんなことばかり言わないでくださいよ」自分の過去にまつわる人に話せもしない罪が広汎にわたっている上に、ここでまた一つ罪をふやしたくないと思ったピースは、いらいらしながら返

事をした。事務所を見まわすと電子カレンダーに注意をひかれたが、その日付は二三八六年九月六日になっていた。赤く輝く数字がはじめは目にかすんで見えたが、ピースにその意味がわかったとたん、鋭く焦点が結ばれた。このカレンダーの指す日付が正確なものならば、タイムマシンは——レッジ教授が言っていた減衰する振動の中で——ピースが宇宙軍団に入隊するふた月前の時間にピースを落っことしたことになる。

ピースは膝ががくがくしてきた。銀河系宇宙のどこかよその部分で、不可解な過去の自分が今この瞬間に生きており、最後には自分を軍団の募兵事務所へと、記憶消去装置へと駆りたてることになる罪をせっせと山のように積み上げているに違いないと、ほとんど迷信的な畏怖の念にぞくぞくしながら悟らされたからである。ショックを受けることには慣れっこになっていたが、ここまで考えてくると、ピースは頭の中がぐらぐらしてきた。

「いま洋服屋を呼びますからね」とペニコックは言って、電話の横に腰をおろした。「服がすぐ着られる用意をしといてください」

「ありがとう」放心状態でピースが言った。「それはそうと、このカレンダーは合っているんですか」

「なぜです。あなたは今日が何日か知らないんですか」

「そういうわけじゃないけれど」ピースは、自分を現在に適応させようと骨折った。「ずいぶん長いこと旅をしてきて、時間帯の航跡がわからなくなってしまったもんですから」

「この国では、アスパトリアの四季に合わせた併用式の地元カレンダーを使っているんです」とペニコックが言った。「地球の日付が知りたいんでしたら、それは……ええと……十一月の八日

になりますね」
ピースががくんと腰をおろすと、脚から力が抜けた——地球のポターバーグで二日のあいだ、軍団の募兵事務所の外に横になって待っていさえすれば——ピースのいっさいの疑問に答えられる宇宙で唯ひとりの人物に会うこともできるだろう。

9

快適なホテルのベッドに入っての夜の眠り、身体も部屋も清潔でたらふく食べ物をとったという感覚、相応の衣服を着、相応の金がポケットにあるという気楽さ——こういったことすべてが、タッチダウン市の宇宙空港に出かけて行こうとするときのピースを、まともな心の状態に立ち返らせた。

それどころか頭のほうは、自分の異常さに対する解決の鍵を今まで以上に掘り当てようとして、この一晩で一新したエネルギーを駆使していた。少年に関するかぎりは芳しくない評判をえたと思われるばかりか、レッジ教授の娘やタイムマシンと奇妙なかかわりがあったことも想い出された。自分、ウォレン・ピースは、タイムマシンの中に足をふみ入れるくらいなら殺されたほうがましだと、ピストルの嚇しにも挑戦した——そのあげく、女の抱擁から逃れるために我からすすんでタイムマシンに身を投じたっけ。その出来事の記憶からひきだせる唯一のささやかな慰めは、相手の女性が二メートルもある多情そうな大女で、ぶよぶよしたブラマンジュ菓子に似ていることだった。おそらく、とピースは推測した。その女が若く、ほっそりしていて可愛らしかったら自分の対応もちがっていたろう。

秋の朝のすがすがしい明るさの中を歩きながら、ピースは、街の群衆の中で出会う魅力的な女の子の一人一人を長いことじっと見詰めては自分を試してみた。女たちの外貌からは美しいなという喜びを与えられたが、自分自身に対してなんとも失望したのは、残酷で放埒な軍隊生活を近頃おくった一員としては当然と思われる感情がなにひとつかき立てられず、股間のうずきひとつ感じられなかったことである。

そんな街頭の実験も突然休止符をうたれた。結果が芳しくないことに不安を感じていたとき、見つめている対象に、焼き餅やきらしい猪の首の重量級がお伴をしているのをピースは見落していたのである。その男は踵を返すと、ピースの襟をひっつかんだ。いくつもの戦場で鍛えられた機敏さをもってすれば、こんな不愉快な状況から抜けだすことなどわけもなかったのだが、人の注意をこれ以上ひきつける危険をおかすのはやめにしようと心に決めたピースは、ことをまるくおさめた。

過去の自分が翌日までには、軍団に入隊する予定にはなっていなかった。ということは、今は脱走兵として追いまわされていないことを意味していたし——もめごとに巻きこまれるようなことは別になにもしていないことになるので——無事に地球に到着するまでは面倒な事に巻きこまれないでいることができるように思われた。民間宇宙空港は、ホテルのフロント係に信じこまされたよりはずっと遠かったので、ピースは歩いて行こうとしたことに後悔しはじめた。衝動的に通りがかりのタクシーに向かって手をあげると、黄色い車がかたわらの歩道のところで止まった。窓があけられると、一カ月あとになって頭の上の窓のところをピースにぶつけられることに運命づけられている運転手、トレヴの顔があらわれた。

ピースは直観的に両手で顔をおおい、小声で言った。「あっちへ行け。どうしておれをひとりにしておいてくれないんだ」
トレヴは憤慨して顔をひきつらせたが、それでもなにも言わずにアクセルをふんで通りを走り去った。
束の間の出会いにうろたえたピースは、それから先、極力人目につかないようにして歩いた。十分たって宇宙空港についたが、そこが大きなスポーツ競技場ぐらいの広さしかなく、同じような建物が並んでいるだけなのには驚いた。あまりにも多くの宇宙船が連続的に到着したり出発したりするので、上空はぼんやりした亜鈴形の雲が噴出して暗くなっていた。こんなに宇宙船が多くて大丈夫だろうかと、ピースは航空管制の重大さに思い至ってショックだったが、すぐに、宇宙船の描く軌道が思うままに互いに食いちがっていることに気づいたし、ある一定の瞬間にはひとつの場所にも他の場所にも存在しないという、この乗物のつかう奇妙な移動形式が衝突を不可能にしていることがおぼろげながらだんだんにわかってきた。
立体派的な宇宙船は——脳裡に描いた輝く尖塔に比べれば醜いものだったが——輸送手段としてはすぐれたものだと認めて、ピースは賛意を表した。切符売り場に行って地球までの片道切符に四百モニット払ったピースは、現に着陸している無数の宇宙船をパノラマのように眺められる待合室に姿をあらわした。空港の光景をもっとよく見ようと首をつきだしながら、人を肩でおしわけおしわけ走査式通関装置の置かれている低いカウンターまで進んだとき、ピースは、視野のはずれにブロンズ金の影が漂っているのに気づいた。そのほうに向き直ると、旅客や見物客の一群にまじってオスカーが二人、もの静かに歩いているのが見られた。

ピースの本能的な反応は逃げろということだったし——脚はひとりでにその予備的な動きをしたが——知性は別の指令を出した。走って逃げれば、確実に注意を自分に向けさせることになろうし、自分がどんな犯罪も犯していないと考えることがすべてに優先する大切なことだというのであった。もしこのオスカーたちが、主観的な昨日、ピースを追いかけまわした二人と同じだったらなにをか言わんやだが——つるつるした鋳造の容貌はその二人に酷似しているではないか。ただ問題なのは、今日が地球の十一月の九日であり、それゆえ軍団から脱走したのは、〝青いひき蛙〟から逐電したのは、映画館での厄介な挿話的事件は、すべてがひと月先の未来に起こることであるということだった。誰かが言っていたように、たとえオスカーが人の心を読めるにしろ、まだ行なわれていない犯罪を追求することなどできっこないのだ。ピースは、ポケットの中から自動着火煙草の箱を取りだすと、気を楽にしている人間に、オスカーには無関心な人間に見られるようにした。

オスカーたちは出発待合室をとおってぶらぶらと歩きつづけていた。朝の光が、下のほうに向かって先細りとなった筋肉質の体をきらめかせ、ルビー色の眼をした顔は平静そのものだった。旅客たちはかしこまってそれぞれの向かうゲートへ出ていったが、その銅像のような存在には格別に注意を払っているようには見えなかった。その人たちと同じように無関心でいたいと思いながら、ピースは、自分の悪事の記憶を頭の中から空っぽにしようとつとめたが、その決心からはどんな特定の対象も思いつかず、かえって意図したものとは逆の効果をうみだすだけだった。

ピースは口をすぼめると、調子はずれな口笛を吹きはじめた。この思いつきの策略は、自分を退屈した罪のない人間に見せようというものだったが、肺にいっぱい、たばこの煙がつまってい

るのを忘れていたのが失策だった。せいうちがほえるような大きな空咳が出たので、そばにいた幾人かをびっくりさせ、そのほかの人たちからは同情のまなざしで見られることとなった。
オスカーたちがピースのほうに頭を向けて立ち止まった。相手の非人間的なまなざしをにらみ負かそうとしたピースは、やたら煙草をすぱすぱとすった。おれは罪など犯していないんだ、心があわてふためいてそんな言葉を繰り返しうそぶいた。そんなにひどいことはなにもしていないんだ。
オスカーたちの頭がゆっくりと回転してから、互い同士の眼をのぞきこんだ。声には出さない言葉の交換が幾秒かつづいたかと思うと、二人はうなずき合い、それからピースのほうへ大股でやってきた。自分にはなにも恐れることはないのを立証しようと心に決めたので、ピースは、神経の耐えられるかぎり二人が手の触れんばかりのところまで近づくのを待った。伸びてくる真鍮色の手をひょいと躱したピースは、ただひとつ道のひらけている地面へとあわてて逃げだしたが、そこはたまたま、離着陸場そのものだった。税関が設けた障壁のところまでくると、ピースの全身の筋肉に恐怖がまた過給されたので、それをひらりと跳びこえ、駐機している宇宙船と宇宙船がたまたまつくった小路へとつき進んだ。金属の砕ける騒々しい音が背後でしたが、これはそういったことのできるのが特徴のオスカーが、障壁をそのまま駆け抜けたことを物語っていた。ピースを追うオスカーたちの足音は太鼓のように大きな音をたて、マイクロ秒ごとに近くなってきた。
ピースがざっとした逃走経路を捜していると、くろっぽくて四角いものが見えたが、それは宇宙船の一端にあるドアが開いたままの出入り口だった。中にとびこんで、重いスチールのドアを

ぴたりと締め切ると、ドアに自動的に錠がかかったのでピースはほっとした。軍艦が装甲板で守られているのと同じようなこの要塞に感謝したピースは、操縦室とおぼしき部屋によろめき入り、たった一つあるクッションの椅子に腰をおろした。あらあらしく息をつき、手足の震えをおさえようと奮闘しながら、ピースはこの新しい環境をよく調べあげ、つぎに取るべき行動を計画しようとしたが、大脳の働きはすぐに中断されて無駄になった。ピースが今までに聞いたこともないような大きな音が、この四角い部屋いっぱいにひびきわたったからだ。と同時に、夕食の皿くらいの大きさのふくらみが、閉めたばかりのドアにあらわれた。

オスカーのひとりがスチールの厚板を拳骨で殴りつけ——そのうえで厚板につかまることに成功したらしいと推理したピースは、ショックで顔がゆがんだ。ピースは指を口にくわえて変形した金属面を見つめていたが、もしオスカーが掛け金のすぐそばを強打していたとしたならば、ドアなどはまちがいなくふっとんでいたろうと考えて全身に戦慄がはしった。

「おそらく」とピースは、なんとか望みの藁にでもすがる思いで考えた。「オスカーはあまり知的な奴らではない。おそらく、それが奴らのひとつの弱点なんだ。奴らのアキレス腱なんだ。そうとするとおれは、この事実をなんとか自分の有利なほうにもっていけないものだろうか。どうしたら……」

またふたたびピースの思考力が、天変地異のような音で水びたしとなった。ドアに二番目のふくらみがあらわれたのだが、このことから、オスカーというのは、なんら脳をはたらかせる必要はないのだとピースは思い知った。しかしそうではあっても、オスカーたちは不死身の、天下無敵の存在なのだ。ほとんど理性を越えたものに駆り立てられながらピースは、身体をぐるっとま

わして自分の坐っている目の前の傾斜した制御テーブルに向き直った。すると奇妙な横縞が眼を横切り、それにともなって頭の中に針でもさしたようなちくちくする感覚がはしった。つぎの瞬間、別人のような眼を通して機器と制御器が並んでいるのが見えた。ピースは、二列のトグルスイッチをなでるように上から下へと動かし、大きな赤いボタンに手をふれてから、中央の制御棒を上に引いた。

目の前の白い壁が透明になった。宇宙空港の建物が下へ下へとさがっていくのが一瞥され、きらめく青空が黒くなっていったかとおもうと——星々の硬質で敵意をふくんだ輝きがピースの刺すような目に映った。

＊

宇宙船の速度があまりにも大きかったので、近くの星々に対する視差の変化が流れて行くように思われた。その光景に我を忘れていると、明るい点がかたわらを泳いで行くのが見えた。そこで、そんな効果を出すためには、宇宙船が地獄から出てくる蝙蝠（こうもり）のように進んで行くのでなければなるまいと思われたが——同時に、宇宙船がどこを目指しているのかピースには皆目見当がつかなかった。ピースに恨みを抱いているにちがいないオスカーたちの手からまたもや救いだされたことは、大いに喜ぶべきだったが、宇宙の深みの中に永遠に取り残されたのは新たな危機でもあった。運命がピースのために用意している不愉快で意外な出来事には際限がないように思われはじめたし、どれほど多くの災厄を免れたにしても、つぎからつぎへと別の災厄がいつも待ちかまえているようだった……

「もうだめだ」悲しげな声でピースはひとりごちた。「自分が取り組もうとしていた問題なんか

どこかへ行っちゃった。おれはただここに坐って自分の運命を受け入れているだけではないか
――なんとわけのわからない、ひとりぼっちの運命なんだろう」
「宇宙船はどんどん進んで行くだろう」考えに熱中しながらピースは、単調にひとり言をつづけた。「このお粗末な銀河系とその周りの他の銀河系宇宙の果てをはるかに越えて進んで行くだろう。のろまな光の速度を追いこし、笑いをメッキした翼をつけたおれは、定数置換に出っくわすことになる。そして最後に死がおれの眼を閉じさせる直前にはすばらしい光景を見ることになる
――星雲は強烈な創世の苦痛にもだえ、宇宙の目印である超新星は、螢のようないくつかの宇宙は、銀の組紐の中でからみ合う……」
自分が新たに考えついた宿命論にうれしくなったピースは、腕を組み、椅子に深々と腰かけて永劫に対処する心構えをした。おそらく何十秒かのあいだだと思われたが、宇宙にひとりで対峙したあと急にピースは周章狼狽した。
「螢や銀の組紐なんて糞くらえだ」椅子からとびあがってピースは叫んだ。「おれは自分の国に帰りたいんだ」
そこで、二歩あるいただけでも太陽恒星ソルと目される光の点がもっとはっきり識別できるのではないかと目の前の透明な壁に駆けより、その全面を隈なく探ってみた。気が狂ったような状態ではあったけれども、その探索は絶望的であることがピースにもすぐわかった――何百万という太陽恒星があって、なにを基準としてそれを見分けたらいいかがわからないほどの数で宇宙船の前に散らばっていたからである。強力なコンピュータは宇宙航行の問題を処理するのに決して不足はないはずだと考えたピースがぐっと息をのんだとき、ついさっき経験した、針でさすよう

なちくちくした感覚が戻ってきて、頭の中が妙に平静な気持になった。それはあたかも止血帯をゆるめたときのようだったが、そのあらたに流れ廻る血が、稀薄な懸濁液のように、連想や認識、概念といったものが浮かぶ血より薄いものだったなら話は別だったろう。

宇宙船の制御テーブルに戻りながら、おれは記憶を取り戻そうとしているんだろうかとピースはいぶかった。宇宙船をこんなふうに操縦したことがあったのだろうか。

坐り直して、さまざまなパネルを前よりも注意ぶかくみると、今度は、筋の通ったいくつかのグループに分けられていることがわかりはじめてきた。この宇宙船に入りこんですぐにピースが気づいてスイッチを入れた列には、送受信推進機始動準備、手動離陸と書かれた銘板がついていたが、タイプライターの鍵盤に似た一群のグループもあって、その上にはＡＤＳという文字の彫りこまれたプレートがついていた。祈るような気持で Automatic Destination Selector（自動目的地選択器）の意味だと推論したピースが、チ・キ・ユ・ウと叩き出すと、みごと前方の星の配置が回転して、宇宙船が航路を変更したことを実証した。透明な壁の中央で赤い輪が明滅しはじめた。その輪は、ピースの眼にはまったくの黒と見えるいくつかの小さな領域のひとつを囲っていたので、いまは地球からあまりにも遠くて、その母なる太陽から光がここまでは届かないのだということが理解できた。だが見るまに、光のかすかな点が輪の中心に現われ、どんどんと明るくなりはじめた。

万事が好都合になりはじめたのに満足したピースが別のボタン類を調べると、自動着陸というプレートのついた一群が見つかった——そのことで、この宇宙船を安全に着陸させられないものかと考えていたピースの心配もおさまった。この成功に勇気づけられるとともに、制御装置にも

慣れてきた感じのピースは、音楽のスイッチを入れた。すると最初のミニテープからは、シベリウスのオーケストラ作品を録音したものが流れてきたが、その重々しい調子は、あたかも占星術師のためのムード音楽として作曲されたかのようであった。

ピースは満足のため息を吐き、深々としたクッションの中で緊張をといて、着陸までのもっとも静かな幕間を精一杯たのしんだ。宇宙との連帯感がまったく一時的なものであると確信した今では、自分の魂がまた宇宙と合体するままにまかせ、そのうえに——その沈思默考に視覚的な添えものを付け加えようとして——トグルスイッチをぐいと動かすと、操縦室の残りの部分の壁が透明になった。芝居や音楽の華々しい終幕によく見られることだが、この動きは、ピースの心の平和に関するかぎり、たいへんな失策であった。

ピースの左手わずか数歩のところ、宇宙船の標識灯からの赤とグリーンの点滅が反射している機体表面上部に、二人のオスカーがぴったりととりついているのだ。

「おれがあいつらを殺してしまったのだ」と脅えながらもピースは考えた。「おれがあいつらを星間空間にひきずっていって、殺してしまったんだ」

ピースの恐怖はいったんはやわらいだが、よくよく見ていると、結局はその分の十倍にもなってお返しがきた——信じられないことに——得体の知れない存在は、まだ動いていたのだ。

大気のない虚空の中で不安気な様子を露ほども見せていないこの二人は、天の航空標識を観光旅行の客のように互いに指さし合いながら、片手で宇宙船につかまっていたのである。そのさまを見ていたピースは、恐怖で身動きもできなくなってしまった。ときおりオスカーの一人がピースのほうに細長いルビーの眼を向けたが——ピースが見えていないのは明らかだった。そうわか

ったピースは、船体が透明には見えても一方通行の効果しかないのだと推測した。
自分に対してまた圧力が加えられるのだという兆しをあらたに感じて、ピースは眉をよせた。時間と空間をも突き抜けて自分を追いまわすオスカーが登場する以前であっても、人生にはたっぷりと困難がつきまとっていた――ましてや今、オスカーたちは不滅であり、どんな条件下のどこででも生き残ることができることがはっきりしたのだ。こんな仮借のない追跡に値するだけのことをした自分の過去がわからないだけに、ピースの惨めさは一入だった。ピースは顔を両手の中に埋め、いっそのこと宇宙船を太陽の中につっこんでこの迫害に終止符を打とうかと真剣に考えた。それがすべての問題を一挙に、きれいに解決する方法のようだったが――心の中に敵意が一つの結晶体を形成し、それが騒乱の坩堝とまでなったので――いったいそんな方法が、最後の土壇場になって受け入れられるだけの心の準備ができているだろうかとピースは自問した。このひと月のあいだにあれだけの苦労をしていながら、あの金属で覆われた二人のうすのろのために、おれはおれ自身の過去の真相を知ることができなくなってしまうのだろうか。
ピースは頭をあげ、しゃんと坐り直すと、この新たに発生した苦境を分析しはじめた。オスカーたちはうたがいもなく、宇宙船の両端にある送受信推進機塔が発生する場の中におり、それが宇宙の中を運ばれてきた理由でもある。ライアンは、乗り物が有効な速度を出せるにもかかわらず静止しているものと見なされることをピースに教えたものだ。ということは慣性を使わないために、旅客が外部にいるにしてもその場に楽々といつづけさせることを意味していた。しかしピースは、〝通常の〟宇宙飛行に甚だしい加速を与えたならば、無断で乗りこんだ好ましからざる乗客が追いだせることを確信した。

宇宙船の目標である太陽恒星ソルが目の前のスクリーンに明るく輝くようになったので、ピースが目をうしろに移して操縦テーブルに注意を払うと、〝補助・原子・推進・モード〟と書かれているパネルが見つかった。これはきっと主要な装置が作動していないときに、原子力推進で宇宙船が飛行できるようにした操作部分にちがいないという確信が湧いてきた。すると指が、ひとりでに高度選択器と小型の操縦桿の位置に行ったので、とたんに、これは以前の生活の中でしばらくのあいだ自分が宇宙船に乗り組んでいたことがあり、それと同時に自分の思いのままに操船したことがあるのだとわかった。

しめたとばかりに息をはずませたピースは、送受信推進機で駆動することをやめ、一秒に何百万キロメートルの速度で航行している宇宙船を急に止めた。宇宙船が微動だにせず、がたんともいわずに止まったことは、慣性航行でないからこんな急激な状態の変化を人に気づかれずにできるのだという事実を示していた。

左手に目をやると、二人のオスカーはそんなことに気づかぬふうに、呑気に指でその場につかまっていた。普通の全速加速で宇宙船を突っぱしらせてやろうと準備したピースの顔には、上機嫌であると同時に悪意に満ちた表情が拡がった。発火ボタンを押そうとした――すると自分にその凹んだボタンが押せないのがわかって、表情は狼狽したものに変わっていった。何度命令を下しても、指が動くことを拒否するのだ。

「そんな莫迦な」そう声に出して言ったピースは、意見を異にする自分の指を咎めるように見つめ、理由を探ってみようとした。「あそこにいる奴らは、人間なんかじゃないんだ。つまり、奴らは化け物なんだ」

「おおぜいの人があんたは化け物だと言っているのが想像できた。「でもあんたは、宇宙の中でひとりぼっちにされるという考えが好きになれなかったのじゃないかね」

「おれの言うことも聞けよ、このろま」とピースは自分の指に向かって異議を唱えた。「あの連中は、手も足も出ない人間を、ペットのとびかかりじゅうたんに食べさせては痛快がっているんだぜ」

「ディンクルが言ったことだけに耳を傾けているからなんだよ——それはとにかく、いったいいつから悪事を二人分重ねることが善とされるようになったのかね。あんたには悪事なんかできやしないよ、ウォレン。誰にだって、なにものにだって、あんたがそんな運命を押しつけることなんてできやしないんだ」

「わかった、わかった」ピースは手のつけようがないといったふうにちょっとのあいだ、自分の指に顔をしかめてみせてから、指を鼻につっこむことで指に仕返しをした。

それから左手で送受信推進機を駆動させると、一秒とたたないうちに宇宙船は、一時間に数百光年の速度でまた地球に向け航行しはじめた。無重力を楽しみながら、二人のオスカーは船体によりそって浮きつづけており、そのがっしりした胴体の上には、赤とグリーンの強い光が油のように流れていった。

前面のスクリーンに目を移したピースは、太陽恒星ソルの燃えるように輝く点が円盤にまで大きくなったことに気づいた。その円盤が点滅する赤い輪の一方に漂いはじめたことは、宇宙船が今、地球に戻ってきたことを示していたので——オスカーたちが惹きおこすにちがいない問題を

解決する時間がほとんどなくなってきたことにピースはじりじりしはじめた。すぐなにかの手を打たないかぎり、着陸したとたんに、宇宙船のドアが木っ葉微塵に打ち砕かれることは目に見えていた。

オスカーをふり払おうとするピースの誓いが緊急事であることを絵に描いたかのように、青白い地球の姿がスクリーンの標的円の中に現われたかと思うと、付き添う月を肩にのぞかせながら、風船のように外側に向けて大きくなっていった。すると操縦テーブルの上の信号がついて、どの着陸地点を選ぶか、その場所を詳細に操作盤に打ちこむよう、あるいは手動操縦で行くのかを指示するようピースにうながした。ピースは何秒かのあいだ、母なる世界の拡がった青い曲線を当惑して見つめていたが、その基調となる色の中からなんとかヒントを得ようとした。

宇宙船を姿勢制御して、なんとか無事大気圏の中にもぐりこもうと航路を操っていたピースは、大気圏への突入で影響を受けなかったことにほっとし、宇宙船を傾けて太平洋の中部へと進ませた。降下は比較的ゆったりとしていたので、落下に適した土地を探す時間のゆとりがかなりあった。ピースは小さな環礁がひとかたまりとなっているのを見つけたので、宇宙船をその一つの珊瑚礁湖上空百メートルぐらいの空中に止めた。そして――神経を鎮めるために深呼吸をしてから――送受信推進機を駆動しているスイッチを切った。

宇宙船は、鉛のような勢いで落ちていった。

ピースが二秒数えてから原子力駆動に点火すると、劇的な効果があがった。推力機が作用しはじめると、急降下した宇宙船が目に見えない障壁にぶち当たったかのようにかん高い音を立てたので、ピースは――座席にちょこんと浅く坐っていたものが――強い勢いで跪かされ、顎の先を

操縦テーブルの端にひっかけられることになった。蝶番でもはずれたような感じの顎をさすり左手を見ると、痛くはあったがピースは狂喜した。オスカーたちが消えていたのだ。

原子力エンジンが雷の轟きをたてて噴射して宇宙船をまた空中にもちあげるにつれ、その構造体がぎしぎしときしんで抗議の声をたてた。送受信推進機のモードにすぐに切り換えて、頭痛の種だった金属の巨人をその憐れな状態から追い出した宇宙船は、環礁をゆっくりとすれすれにかすめて曲線を描いた。中央の礁湖にはまださざ波が拡がっていたが、透明に澄みきった水が苦もなく見えた。オスカーたちはその礁湖の何尋(ひろ)かの底に平静な様子で立っていた。顔を上に傾けて頭上を巡航している宇宙船を見ていたが、ピースの目には、オスカーたちが自分に拳をふっているように見えた。

「こちらもご同様だ、あんた方」とピースが呼びかけた。「錆びないようにご用心」

すっかり満足して笑いながら、ピースは宇宙船を午後の空高くにもって行き、航路を、自分の故郷と見なしているポターバーグ市に設定した。宇宙船が古い型のものだったら航法にかなりむずかしい問題もあったろうが、ピースの場合はただ単に、軌道の高さに達するまで急角度にのぼって行けばよかったし——たった十秒間手動操作をしただけで、眼下に横たわる北アメリカ大陸の西海岸をすぐに全部見ることができた。そこからはまた、メキシコからアラスカへのびている細長いカリファナダ共和国の中緯度のところに、コロンビア河の三角州をたやすく見つけることもできた。さらにまた北から流れている地球の明暗境界線を見ることもできたので、ポターバーグやエクレス要塞では短い冬の日が暮れようとしているのがわかった。

過去の自分が、募兵事務所に運命的な訪問をするすぐ前のひと晩を、悔恨を胸にいだきながら、

今のこの瞬間、下のそこにいるのだと考えたとき、不可解な動きをする冷たい指がピースの背骨を叩いた。今の、ピ、ー、ス、は、軍団に入隊する意志を持っていないので、軍務契約をのがれるための挺子をもはやなにひとつ必要とはしていないという考えがピースの頭をかすめた。なにも言わずにそっと立ち去り、自分の過去をそのいっさいの罪とともに謎のままに葬り去るのが一番賢明な道だったろう。そんな考えをちょっとのあいだもてあそんだピースは、かぶりをふると、宇宙船を急角度で降下させた。慣性や空気力学の影響をなんら受けることなく、乗り物は二十秒かそこいらのうちにポターバーグ近郊に到着した。

この街が目の前のスクリーンにあらわれ、コロンビア河の幅広い湾曲部の上に銀色の立方体としてみるみる大きくなっていったとき、ピースは、自分が宇宙船を盗んだという罪を犯しており、どこかの民間か軍用の飛行場におりたら逮捕されそうだということを想い出した。瞬時に決断を下したピースは、ポターバーグを四十キロばかりとびこし、とある小さな村からは適度に近くはあるが、うまい具合に低い丘で隔てられている雪の牧草地を着陸地にえらんだ。がたんという衝撃を受けて宇宙船がとまると、操縦室のドアが滑るように開いて、一陣の冷たい十一月の風が吹きこんだ。

ピースは、物音ひとつしない夕日の中に降りたつと位置を見定めた。牧草地は二級の道路と境を接していたが、その道路は、空から見えた村へとまっすぐに向かっているように思えた。ピースが到着したところを見た者はこのあたりに誰もいなかったし、数分もたたないうちに暗闇が宇宙船と、ピースのその後の動きをすっぽりと掩った。状況のおもむくままにまかせるという気休さが心の中に芽生えたが、一方、自分がここで注意すべきなのは、朝までことを冷静に構え、人

の注目を浴びないようにし――とりわけ、莫迦げた出来事にすぐまきこまれがちな自分の性質を押えることだと悟った。襟を立てたピースは、肩をそびやかし、道のほうへと歩きはじめた。
「ちょっと待って、お若い方」女の声が威丈高に呼びかけた。「あなた、どこへ行こうとなさっているの」
ピースは、凍えたようにその場に立ちすくんだ。眼が信じられないというように見開かれて、周りをきょろきょろと見まわした。
宇宙船の中央にある乗客室のドアがぽっかりと開いていて、そのドアいっぱいに立ちふさがっていたのは、麦藁の日除け帽をかぶり、花柄の服を着こんだ、がっしりした中年女性だった。その女のうしろには、ほかにも同じような服装をした。押しだしのよい中年女性たちが明るい室内をうろうろしていて、驚きのあまりに愚痴をこぼしていた。アスパトリア人の乗客でいっぱいの宇宙船を盗んだのだとわかったとき、ピースは、サンドバッグで打ち倒された男のように足がふらついた。
「あれを見てごらんなさいよ」ドアにいる女のところまで出てきたもう一人の女が言った。「お酒を飲んでいるわ。言ったでしょ、操縦士はお酒を飲んでいるに違いないって。コーヒーを身体にひっかけちゃったけれど、それもみんな、あの男のせいなんだわ」
「それはそうと、わたしたちどこにいるんでしょう」三番目の女が調子を合わせた。「ここは、〝陽光当たる無重力の楽園、アステロイド〟なんかじゃないわ」
「申し訳ない、申し訳ない」あとずさりしながら、ピースは口の中でもぐもぐ言った。それからそのままの格好で最大限安全な距離までだんだんに速度をあげ、やおら向き直ると全速で駆けだ

した。がっしりした体つきをした女たちの一団はしだいに深まる闇の中で見えなくなるまでピースを見守っていたが、憤慨した顔つきでお互いのほうに向き直った。何秒か誰も黙ったままだったが、それから——お互いにうなずき合って——バッグからそれぞれがサブエーテル笛を取り出すと、激しい怒りをこめた音で、一緒になって長いことそれを吹き鳴らした。

東南に五千キロもはなれた、まだ午後の太陽がきらめく太平洋の環礁では、金色に照りはえた巨人が二人——まだぐずぐずと砂を見つめていたが——突然に頭をもたげた。二人は、眼の中で赤い火を脈うたせ、髪のない頭蓋の丸屋根に太陽の輝きを反射させながら、しばらくのあいだ、聴き耳をたてた。

そのあげくに巨人たちはお互いのほうに向き直り、うなずいたかと思うと、珊瑚礁の傾斜面を下って海の中へと駆けだしはじめた。泳ぐには重すぎもし、身体の中がぎっしりと詰まっていたので、二人は海水が頭の上まで覆ったあとでも海底を駆けつづけた。自分の勢力範囲に侵入してきたものがカリファナダへの進路をつき進むのを見た海中の生物たちは、物わかりよくいそいで道をあけた。

＊

疲れ切っているピースは、喘ぎながらも境の溝をとび越えて、人っ子一人いない街道の縁にたどりついた。道路には、掃きよせられた雪が両側に低く積みかさねられていた。ピースはやっとのことでこの最後の障害をすべりすべり越えると、服についた雪や氷の粒をはらい落し、両手をポケットにつっこみ、近くで身が落ち着けられるもののある方角へと歩きはじめた。

《いまのところは、万事がうまく行っている》とピースは自分で納得した。《宇宙船に乗ってい

たあの鮭どもは気も動顚させられたにはちがいないが、おれの気が変わって、このお粗末な銀河系の縁を越え、その近くの他の銀河系宇宙の枠を全部越えてつき進み、定数置換に出っくわさなかったことが、どれだけ幸せなことだったか、知っちゃいないんだ。逆にそれがあの連中に不平の種を与えたんだ。それはともかく、あの連中が警察と連絡がとれるまでには何時間もかかるだろうし、話は変わるがおれには動きまわれる金がたっぷりあるので、自分の身に合った目立たない服を着て、ポターバーグに身をひそめるんだ。そうすりゃ、ぴんぴんしていられるというもんだ――疑われかねない下顎の切り傷と、少し霜やけにかかっていることを別にしてはな》

《いま自分がなすべきことは》とピースは、自信を取り戻しながら自分に言いきかせた。《とかく起こりがちな莫迦げた出来事にかかずらわないようにすることだ。冷静になるんだ。目立たないようにひっこんでいることだ。朝までは厄介事の圏外にいなくちゃ》

現実的な考えに集中したことの効果が、すぐにピースの精神にもあらわれた。歩きぶりにも活気が出て、いくらか跳ぶ調子になり、数分あとには――自ら助けるものを助ける天の約束によって報いられたかのように――遠くにバスの明りが見えてきた。車が近づいてくると、目的地がポターバーグだとわかったので、ピースは感謝のあまりに吐息をついた。

運転手に止まれの合図を送りながらも、道が狭いので足の指が車輪にふみつけられないよう、雪のつるつるする土手にのぼってバスが目の前まで来て止まるのを待った。バスのドアが、空圧の喘ぎ音をたてて開いた。前に出ると、脚が滑ってはねあがり、ピースは後頭部を氷の土手の表面に打ちつけ、それに気づく間もなく、手をポケットにつっこんだままバスの下の真っ暗闇の中に倒れこんだ。危険なことに金属のなにかが鼻の先で回転していたけれども、ピースはまずポケ

ットから手をなんとかひっぱり出そうともがいた。しかしポケットは急に、万力のように腕先をつかんで離さなかった。
「あのおどけ者は、どこへ行っちゃったんだろう」機械の騒音でバスの運転手の声はほとんど聞きとれなかったが、あきらかにじりじりしている調子があった。
「おれはこの下だよ」ピースが泣きださんばかりの声で言った。「助けてくれ、誰か」
「おまえさんが乗りたいからと合図したのでせっかくバスを止めると、今度は乗りたくないなんて」運転手がぶつぶつ不平を言った。「おれにはわかんねえや——これも新手のはやりなんだろうな」
ドアの閉まる音がしたかと思うとバスは発進し、ピースに近い車輪が頭のてっぺんの髪の毛にブラシをかけた。ピースは喜んだ。バスの後端部にある突出物が肋骨にぶち当たり、ピースを地面にころがして道の真ん中にみっともない塊りとして放り出したときにも、血まみれになって死ぬことだけは少なくとも免れることができたからだ。
ピースは脇腹をかかえて立ち上がろうともがき、去って行くバスに毒づいた。バスの灯火がとうとう夜の闇の中に消えたとき、身体を見まわしてみると、少し前にはしみ一つなかった上着と靴下が油に汚れ、裂けているのがわかって胆をつぶした。瞬間、ヒステリーじみた笑い声をたてたが、すぐに手を口に当てた。
「おれはこんなことで負けたりはしないぞ」月に照りはえるあたり一面の雪に向かって、取り残されたピースは話しかけた。「おれは、自分の運命の主人なんだ」
身体の調子を調べてみると、打ち傷をおった顎に加え、後頭部のこぶがやたらにずきずきする

上に、肋骨が一本か二本折れたことを示すかのように息をするたびに鋭い痛みをおぼえたけれども、歩くことができることだけはわかった。自分の姿恰好からみて、公共の道路を歩いて行くのは得策とは思われなかったが、タクシーでポタ―バーグまで行き、目立たないホテルを見つけるだけの金は充分持っていた。シャワーを浴び、夜の休息をとって回復すれば、とピースは自分に語りかけた〟おれは新品同様になるんだが。まず一番にしなければならない大切なことは、電話を見つけることだ。それから先は万事が順調に行くだろう。ぼろになった上着を身の周りにまといつけてピースは再び、近くの村めざして歩きはじめたが、その村は――地理的に近いはずにもかかわらず――架空の楽園、シャングリラへ行くのと同じくらいに遠く、なかなか着けなかった。

二十分後、ピースはある看板のそばを通りすぎたが、そこには〝ハートトレイヴィル――人口三四七〟と書かれていたので、その村にある唯一つの大通りをびっこをひきひき、電話ボックスを探して歩いた。

夜はまだ早かったが、通りには人気がないように思われた。それなのに電話ボックスのところへ行くと、誰かが通話中だったばかりでなく、もうひとりが外に立って順番を待っていたので、ピースはいらいらと苦い思いをさせられた。こんな些細な迷惑ごとには気を取られないよう、達観する必要があると気がついたので、ピースは、列に並び、自分のみなりが批判をよびおこさないようにと願った。ただその点では心配する必要もなかった。すぐ前の赤毛の男は――ピースなどには目もくれず――電話ボックスの戸を拳骨でたたき、中の男をののしることに余念がなかったからである。この男はだいぶ待たされていたと見え、さらにはピースが必死になって身につけてきた静かさを持っていないと見えて、いまにも卒中をおこしそうな状態だった。男は、不満と

憤懣やる方ない状態でひとつの窓、つぎの窓と叩きつづけたが、ぼんやりと見える、中で通話中の男は、大昔からこの電話ボックスを占領しているかのように、そのたびに向きをかえて相手の裏をかいた。
ピースは人間が静けさを破られて怒ることがいかに些細なものかと考えながら、オリンピックでも楽しむような調子でこの小さな芝居を眺めていた。本当の不運がどんなものかをそれとなく教えられたと思いはじめたとき、赤毛の男の怒りは頂点に達して猥雑な言葉をわめきちらしたかと思うと、あわてて通りを横切って駆け出し、建物と建物のかげに消えた、それから一分とたたないうちに、電話ボックスの中の男は通話を終え、外に出ると、電話が自由に使えるようになったピースに会釈をして、夜の闇に消えていった。
いつだって忍耐が必要なんだ、と勝手に決めこんだピースは、電話ボックスの中に足をふみ入れた。照明のついた電話案内の表示でタクシー案内の番号を呼び出そうとしたちょうどそのとき、戸がぐいと引っぱられて開いた。荒々しい手がピースを外にひきずり出したので、見るとそれは、とても丈の高い、冷たい目をした頑固そうな警官だった。赤毛の男が警官についてその場に戻り、うしろのほうでぴょんぴょんと跳びはねていた。
「こやつなんだ」赤毛の男が仕返しをするような調子で言った。「二十分もこやつは、寒さの中でこの外に待たせつづけたんだ。ぶちこんでもらいたいな、シリル。こやつを牢屋に」
「いいかね、ルーベン」と警官が答えた。「おまえに教えられなくても、どうしたらいいかおれにはわかっている」
「でも、二十分もだよ、シリル。公共の電話ボックスには三分いられるだけということは誰だっ

て知っているんだ」

「すみません、お巡りさん。でもこれは、まったくの誤解なんです」と気が滅入っているピースが言った。「わたしは、ここに、一分いただけなんです。それに……」

「嘘つき」とルーベンが金切り声をあげた。「こやつは、ごまかそうとしてるんだ、シリル。あんたのことをだんまりお巡りだと思ってやがるんだ」

「それは事実なのかね」警官がピースに目をやったが、だんだんに疑いの色を濃くして敵意を見せるようになった。「なんでこんな手間を焼かせるのかね。あんたの名前は。それにどこから来たのかね」

「わたしですか」やけ気味のピースが、かえって物静かに言った。「どこから来たんでもありません」

自分では残っていると思わなかった体力のありったけを集中して、ピースは警官の胸に強烈な一発をお見舞いした。不意打ちをくった大男は、固い雪の上で足場を失い、ピストルや棍棒のぶち当たる音を大きく立てながらのけぞって倒れた。警官の上を跳びこえ、いまでは事件が起こるたびにかならず登場するようになりはじめた裏通りの一つに逃げこんだピースは、足が凍った地面にふれることなど気がつかないほどの勢いで、夜の風といったいになって駆けだした。

胸の横がつき刺すように痛むので、じきにピースは、自然に行なわれた夢のような逃亡に終止符を打って止まった。闇の中をすかして見ると、かなたは月の光で銀色に輝く木々と平らに拡がる雪景色のほかはなにも見えなかったが、追跡してくる音はなにひとつしなかった。手ごろな切り株に腰かけたピースは、精神状態が、いまでは落ち着いている身体の状態に追いつくのを待っ

た。ここしばらくは安全だと思われたが、思い返すと、地球に足をつけてものの半時間とたたないうちにわが身を傷つけ、新しい服をだめにし、法を犯すような新しい揉めごとにまきこまれる羽目に追いこまれたことが苦々しかった。

《どうも疑う余地はなさそうだ》ピースは、今まで気づかなかったことを自覚しながら考えた。《おれはきっと、事件を起こしがちな、ついていない男なんだ》

そうきめつけてみると、自分の計画をあらためてしっかりと評価する気になった。呼吸が徐々に平常に戻ってくると、翌朝ある人物に会おうとするようになった――つまり、夜どおし歩かなければならないと確信するならば、ポターバーグへはひとりで、誰の助けもかりずに行かなければならないという意味だった。この考えは、特に空気が刻々に肌にしみて寒くなってきたので、気の進まないものだったが、それ以外の打つべき手は頭の中から消えてしまった。

頭から爪先までが疼き、すでに身体もぶるぶる震えだしていたが、ピースは、よろめきよろめき、過去、現在、未来の交叉点で終りを告げるにちがいない四十キロの憂鬱な旅をはじめた。電話を待たされている間じゅう考えていたことなどは、もう今の状況にはふさわしくなかった。しかし、夜どおし歩くためには心に抱いている必要のある希望の灯を見つけようと、こんな状況の中で少なくとも一つの明るい見方をはっきりさせようと、ピースは最後の努力をしてみた。はじめはそんな努力をしても無駄だと思ったが――この日になしとげられた、ただ一つのきらめくような出来事に考えの焦点がしぼられた。

「ありがたい」雪の中でびっこをひきひき、熱くなってピースは声を出した。「あの忌まわしいオスカーたちを、おれはなんとか振り払ったんだ」

10

　宇宙軍団にいたひと月のあいだに、ピースは困苦と不快なことには慣れっこになってしまったが、ふり返ってみると――ポターバーグにたどりつくまでの期間は――友情にも笑いにも、温かさにも恵まれたおだやかな時期だったと思われた。
　ピースは、ひとの注意を惹かないようにしながら、鋼色の黎明の街中を、ゆっくりと歩いていった。ときおり身体がふるえる発作におそわれたが、それがあまりにも激しかったのでぼろぼろの服が耳に聞こえるほどの音ではためき、ピースを、麻薬で気のふれたハイチの踊り手の物腰をする男にみせかけた。早朝の歩行者たちはほとんどが、目をそむけてそばを通りすぎていったが、中には同情心に駆られて近づき、金を施したり、救いの手をさしのべるひとも何人かいた。ピースはできるかぎり、自分は大丈夫なんだとかすれた声で安心させてそういった人たちにお引きとりねがったが、それでもしつこくつきまとった人がふたりいたので、意を決してわざと、アフリカのヴードゥ信者がよく見せるヒステリーをおこし、相手が怖くなって逃げだすように仕向けた。それはおかしなくらいまねしやすかったので、やがてピースは、自分が本当に肺炎にかかっているのではないかと疑わざるをえなかった。

肺炎で死ぬにしても死そのものは、魅力のあるもので恐ろしいこととも思えなかったが、自分が使命を果す前にそう考えるようになったことは警戒を要するなという気にピースはなった。もっと活躍するよう手足をなだめすかしてピースが歩調をはやめたので、とうとう宇宙軍団の第二〇三連隊の司令部がおさまっている一角にたどり着いた。ピースがうす汚くて狭い道に曲がると、目の前に、どこか醸造所を思わせる赤煉瓦づくりの大きな建物が見え、エクレス要塞だと明示している看板がかかっていた。その構造体そのものは、軍団の建物としてピースが頭に描いていたものとは似ても似つかなかったが、そんな違いを気にかけるような段階は通りこしていた。建物の脇を歩いてあちこちのドアを調べると、最後には募兵事務所の入口であることを示す表礼のかかった窓のところに着いた。

ここそが、出来事が入りくんだこの何週間かを過す以前に、自分が第二の誕生をしたまさにその場所なのか、自分の生涯の大きな謎がまさに解決されようとしているのは今かと思うと、長いこと歩いて衰弱していたにもかかわらず心臓の動悸がたかまった。

ドアに張り出された注意書によると、事務所は八時半に業務をはじめるとあった。ピースはとっくに時計を身につけなくなっていたが、この地区にあるたくさんの時計の前を通りすぎていたので、まだ一時間ほど早すぎるのがわかった。そんな長いあいだ待っていたら、この厳しい寒さが自分の棺桶に容易に最後の釘を打つことにもなりかねまい。周りを見わますと、通りのすぐ反対側にオレンジ色の灯をともした酒場が見つかったので、ピースは随喜の涙をながさんばかりだった。蒸気にくもったその窓は、暖かさと栄養が与えられることを約束していたし、さらには徴兵事務所にやってくる人物をすべて見張れるという利点も提供してくれよう。辛かった今までの

経験がピースに教えてくれたことは、幸運が良いほうに転じようとするときにかぎって、災難がまた別の一撃を加えるということだったが、いまのピースには、居心地のよい席やあたためられた空気、煮えたった強いコーヒーの入ったポットといったものの望める喜びが胸にたぎるのを押えつけることはできなかった。折れた肋骨に片手をあてがい、足をひきずってピースは道を横切り、その酒場に入ったが、朝も早いこんな時間だったので酒場にはほとんど客がなかった。

酒場の主人はいわくありげにピースをじろじろと見たが、ピースが五十モニット札を一枚カウンターに置くとすぐに愛想がよくなった。二、三分後に、かなりのバーボン・ウイスキーを滴下したコーヒーの広口カップを手にしたピースは、狭い部屋の前のほうに行って、窓ぎわの椅子にどしんと腰をおろした。そして容器を両手にはさみ、コーヒーを熱心にすすってそのカロリーをすべて吸収した。元気を取り戻してくれる一杯のコーヒーを飲むのに余念がなかったので、一気に半分ちかく飲んでしまってからはじめて、目の焦点をカップの縁より上に合わせられるようになった。すると早朝の客がひとり、目に入った――きれいに髯をそった若い男で、顔は人形のようなピンク色、口は大きく、碧い目をしており、ブロンドの髪は流行にのって額の上を薄くしていた。椅子にどっかと腰をおろしたその若者は、卑劣な男が悲惨な境遇に追いこまれた様子の典型とも言え――ウィジェット大佐のオフィスの壁に映像として投影された自分をピースがこの前に見たときの姿と瓜二つだった。

あついコーヒーの大波が鼻孔のあたりを洗ったとき、ピースは、自分が自分自身を見ているのだと悟った。

これから先、どんなややこしいことになるかなどということはあえて考えずに立ち上がったピ

ースは、よろよろとそちらのテーブルへ歩いていった。「ここに坐ってもかまわないかね、ノーマン」
「どうぞ」ピースのもうひとりの自分が、空になったグラスをじっと見ていた。
ピースが坐った。「わたしがなんであんたの名前を知っているか、知りたくはないかね」
「そんなことちっとも気にしてませんね」若者は頭をあげると、多少は相手を認識していたことを思わず知らずあらわした悲しげな目つきでピースを見つめた。その目をピースのうす汚れた手といいかがわしい服に移した若者は、犬の牙柄をした茶色い上着のポケットからしわくちゃになった十モニット札を取り出した。「これで食べ物でも買ったらどうです——酒じゃなくてね」
「お恵みはほしくないね」ピースはお札を押しやった上で、これはショックを与える戦法をためしてみなくてはと思った。「ノーマン、あんたはなんて言うだろうかね。もしあんたとわたしが同じ人間なんだと言ったら」
「あんたはしばらくのあいだ、そんなヴァニラ・エッセンスのようなありきたりの言い方をよしたほうがいいですね」
もうひとりの自分の声に含まれている鉛のような無関心さにショックを受けたが、ピースはかまわずつづけた。「本当なんだ、ノーマン——ちょっとわたしを見てごらん」
ノーマンがちらとピースを見た。「ちっともわたしに似てはいませんね」
ピースが口をあけて話しだそうとしたが、ちょうどそのとき、壁の鏡に自分の姿が映っているのがちらと見えた。ノーマンよりは十も老けており、もっと痩せて髯だらけの顔、衣服はぼろぼろで汚らしい。ふくれあがった顎が実質的にピースの顔の形を変えていた。ピースは黒い眼をし

ていたが、このときまでそのことには気づかないでいた。しかも厳しい寒さに夜どおしさらされていたので、肌が、安ものの葡萄酒を毎日きまって飲んでいるときに普通に見られる青赤の色を呈していた。ピースは息をのんで、ノーマンが正しいことを認めざるを得なかった——二人は、二人の別個の人間のように見えたのだ。
「よろしい」声に誠実味をこめてピースが言った。「ここのところ、わたしはいろいろな事件をくぐり抜けてきたものだからね。でも、本当の話なんだ——あんたとわたしは同じ人間なんだ」
自分の非運に苦しんでいるノーマンの顔の表情にちょっと喜びの気配があらわれた。「いままで聞き知った中でも一番気味の悪い餌ですね。でもそれは無駄というものですよ——もうお金はあなたにあげたでしょう」
「あんたのお金なんかほしくないんだ」若者はテーブル越しに札を押しもどした。
ノーマンはため息をつき、自分の時計を見た。「最後の時間をつぶすには、それもいいと思います——コニャックの代りに禅問答というわけですね。そうじゃないですか。ええと、これは誰かに向かってその人がここにいないんだと証明する例の古いやり方に似てますね。だからといって、あなたとぼくがどうしたら同一人物でありうるかという問題は解き当てられません。どうです……」
「あんたは、なにも解き当てることはないさ——わたしがこれから話そうとしているんだからね」ノーマンに対する自分の腹立ちをかくそうと、ピースはコーヒーを何口かすすった。「わたしがタイムマシンに入ったと考えてみたまえ。すると……」自分をもっと新鮮にした似姿が勝手

な判断で頭をふったので、ピースは急に話をやめた。
「信じられませんね。複動外向性マシンは非合法とされているんですよ——多くの妨害を受けた歴史をもつこの地球では特にね。政府の探索車が常時動きまわって、外向性マシンにスイッチを入れたとたんに捜し出してしまう。あなたが何年にダイヤルをあわせたかまでわかるって聞いてます」
「そこがまさに問題なのさ」勝ち誇ったようにピースが言った。すんでのところでアスパトリアで起こった出来事を話すところだったが、心をゆるがせるような新しい考えがわいて、声をのみこんだ。ピースはこの出会いを実現させることにかまけて、なにを言ったらよいかを計画する、あるいは起こりうる結果について考える時間がなかったのがいけなかったのだ。そこでピースは今になって思い当たった。ノーマンはすでにアスパトリアに行ったことがある。そこまではピースにもわかっていた。それでもしピースが今その惑星の名をはっきりとあげ、自分は真実を語ろうとしているのだとノーマンに納得させた上で、先月経験したすべての恐ろしい出来事や災難の数々を並べあげたら——ノーマンは、うまい按配に軍団には入隊しないと決心するだろうか。
それに彼、ウォレン・ピースは、三十年、四十年、あるいは五十年の軍務契約に署名しようとしているノーマンの直接的な結果として存在するに至った人間なのではないか。
ピースはいそいでもう少しコーヒーを飲みたしながら、ここに含まれている逆説をときほぐしてみようとした。もしノーマンが軍団に入るという決心をくつがえしたなら、ウォレン・ピースは存在しなくなるのだろうか。蓋然性の中での変更によって抹消されてしまうという考えは、ともかく直截で旧式な死に直面するよりはずっとピースにとって脅威だった。普通の状態で死のう

としている男だって、たとえ未払いの請求書の山であってもなんらかの形見分けするものを持っていることがわかっているので慰めがあるものだが、決してこの世に存在しなかったという可能性に直面することは、ある者にとって——

「問題のすべてってなんですか」とノーマンが言った。「続けて下さい——あなたの話にだんだん興味が湧いてきましたから」

「そこが問題点なんだ」

「そこがあんたに興味をおこさせているんだ。最初は興味なんかなかった、そうだったね。そしていまは興味が湧いてきている」辻褄が合わないようだったが、心のはやる思いでピースは返答した。

「だから、それが餌だと言っているんです、ともかく」ノーマンの眼に気もそぞろのような表情があらわれたかと思うと、お札をもう一枚取り出して前の札の横に置いた。「さあこれで二十になる——これで五分五分ということにしても構いませんか」

ピースはその金を無造作に脇にはねのけようとしたが、もしそうしたら最後にはあの強欲なウィジェット大佐の手の中に収まってしまうことになるのを想い出した。そこで札を取りあげると自分のポケットにつっこみ、その上で主要な問題に近づく方法を考えようとした。時間がものすごい勢いでむだに流れていくのにもかかわらず、文字どおりノーマンを途方にくれさせている罪の秘密を教わるところまではとても近づいてはいないのだ。

「ありがとう」とピースが言った。「わたしのようなものにとって恵みをうけるということは、意に反してあの軍団に入ろうとするようなものでね。でも世の中はせち辛いものさ」

「軍団ですって」あらたに好奇心が湧いたというようにノーマンがピースを見た。「でもどうや

って抜けだしたんです」
「負傷したんだ」自分の肋骨の状態を忘れて胸のわきをどんと打ったので、ピースは鋭い大声をたて、顔を灰皿の中につっこむことは辛うじて避けたがテーブルの上にくずおれることになった。
「だいじょうぶですか」ノーマンが心配して言った。
「なに痛むだけだ」酒場の主人に追いたてられることを怖れて、ピースは身体をしゃんとおこした。「痛むのは天気のせいなんでね、わかるだろう。一分もすればもうだいじょうぶ」狼狽を隠すために、ピースはカップを取りあげて、何口かコーヒーをすった。
ノーマンはそのとき、自分のグラスをいじっていた。「なぜ入隊したんです」
「ええ、その……なにかを忘れたかったんだ」
「それはなんだったんですか」
「どうしてわたしにそれがわかるのかね」どのようにして会話の中での立場が逆転して、自分が質問されるようになったのかということがピースには理解できなかった。「わたしはそれを忘れてしまっていたんだ」
「もっともですよね――失礼しました」ノーマンはうなずいたが、それから――なにかが苦痛に満ちた記憶を喚びおこしたかのように――下唇がふるえはじめた。
ピースは変にうしろめたく感じたが、こちらから働きかけるのには良い潮時だと思った。「ノーマン」とピースは穏やかに言った。「あんたは軍団に入隊するのを待っているのではないかね」
「そうです、待っているんです。なぜ奴らは、あのいまいましい事務所を開けないんだ。なぜ奴らは、ぼくたちが心の重荷を降ろそうというのにこんなに長いあいだ待たせるんだ」

「まだ充分に間に合うさ」ノーマンの感情的爆発が酒場にいる他の客に迷惑をかけるのではないかと心配してあたりを見まわしながら、ピースがなだめた。「ねえ、ノーマン。あんたの心の中にあるものをわたしに話してくれないかね」

苦痛にみちた目でノーマンがピースを見た。「ものすごいことをしたんだ。そんなことは話せませんよ」

「いや話せないことはないよ」ピースは、自由な手をノーマンの手の上に重ねた。「話してくれ、ノーマン。胸の中を吐きだすんだ。そうすれば気分がすっきりするよ」

「もし本当にそうなるんならね」

「そうなるさ」とピースが言った。「わたしに話してみてくれ、ノーマン」

「本当に聞きたいんですか」

ピースがいらいらして息をのんだ。「聞きたいんだ、ノーマン、聞きたいんだ」

「よし、わかった」ゆっくりと、しかし苦しげな調子でノーマンが言った。「ぼくのおかした犯罪は……」

「うん、うん」

「ぼくの犯罪は……」

「うん、ノーマン」

「軍団から脱走したことなんだ」

ピースが自分のコーヒーカップをタイルの床に落したので、耳をつんざくすさまじい音がした。気がひけてノーマンが下げた頭のてっぺんを一言も言わずに見つめたピースは、カウンターを跳

びこえて来た酒場の主人に脚をひっぱられた。

「いいか、おまえら二人」と酒場の主人が言った。「外へ出ろ、ここに入ってきたときから、おまえら二人をおれは見張ってたんだ。ここでおまえら二人に、あんなまねはされたくはねえ」

「偶然なんです、まるっきり偶然の出来事なんですよ」信じられないという思いがまだ下のほうに向けて渦を巻いていたピースは、ノーマンからもらった二十モニットを主人のシャツのポケットにたくしこむと、元の持ち場にもどるよう説得した。酒場の主人は陶器の破片をよせ集めると、男同士が手を取り合ったりしないよう最後の警告を発してから、信用できないというように何度もうしろをふり返りふり返り、よたよたと立ち去った。ピースはまた椅子にすわり、片手の拳でノーマンの脳天を叩いた。

「こっちをごらん、ノーマン」と小声で言った。「わたしをかついでいるんじゃないだろうね」

「そんなことはありません。ノーマン。真実なんです」

「でも、ノーマン。軍団からの脱走兵だということは、なにもくよくよ気にすることじゃない。実際の話、脱走する気になっている新兵はそれ以外のことを夢にも考えちゃいない。それが生涯唯一の野心となっているんだ」

「新兵にとっちゃ、そのとおりです――それが新兵というものですからね」ノーマンが頭をあげたが、その顔は恥じらいで真っ赤になっていた。「でも、わたしは将校だったんです」

「将校だったって」ピースは黙ってしまった。いま聞いた話をなんとか自分の生涯の入りくんだ謎の中にはめこもうとしたが、ノーマンのほうは自分の告白を大股で進め、喋り方も早くなっていった。

「……それもただの将校じゃないんです、いいですか。わたしはノーマン・ナイチンゲール中尉でした。ナイチンゲール将軍の一人っ子なんです。ぼくの家系は、二世紀にわたって軍団での華々しい軍歴をたててきたんです。二世紀もですよ。この二百年のあいだには、多くの将軍たちや宇宙軍団の元帥たちがいたし、数々の従軍とそのさいの武勇、勲章と名誉、栄光と偉大さ、そんなものに包まれている家系なんです。でもそれがどんなに重荷だか、あなたに想像できますか――誰にも話せない重荷でしたよ――伝統がぼくに押しつけられたんだ」

ピースは頭をふった。ひとつにはそれがピースの期待していたものであったからであり、ひとつには額の裏側がひどくきりきりと痛んだからである。

「ほとんど生まれたその瞬間から、まちがいなく揺り籠のときから、ぼくは軍団に入るための心構えをさせられ、手筈をととのえられたんです。父なんかそのこと以外、ぼくになにも話したことはなかったし、母もそれ以外の話をしなかったんです。ぼくの生活はあげて軍団とかかわっていた――しかもひどくまずいことに――ぼくはそんなことが好きじゃなかった。ほかのことがしたかったんです」あきらかに自分の息子としての欠点を思い返したらしく、ノーマンは言葉を途切らせた。

針でさすような痛みがつよまったので、この休憩をピースはよろこんだ。そして記憶がさまざまな光景を浮かびあがらせた。南洋風の白い柱の多い家。汚れのない軍団参謀将校の軍服に身をくるみ、厳しい顔つきをした白髪まじりの男。よそよそしさを身につけ、直立した姿勢が夫の軍隊的な端正さに似かよっているきれいな女。これらのものが自分自身の子供時代の心象だと知ったので、募兵事務所の記憶消去機がなぜ自分の過去を一切合財消してしまったかの理由がピース

にもわかりはじめた。もしピースの全生涯が宇宙軍団の伝統の中にどっぷり漬っていたものなら、家系の理想を裏切った罪も同じように全部に影響しているだろう。記憶の中に貯えられているあらゆる出来事が、幼児期のしつけと小さいときの経歴の最後に残ったあらゆる細部が、ピースの罪悪感の種類を解く鍵となるだろう——それ故に、エレクトロニクスなりの律気さをもったあの機械が、そういったすべてを削りとってしまったのだ。

ピースの生涯における大きな謎のひとつがここで明かされたが、ほかの謎が前面に押しだされてきた。

「あんたのおちこんでいた苦しい立場はわかったよ、ノーマン」ピースがゆったりとした口調で言った。「当然のことだろうが、あんたのような背景だったら、無許可離隊者になったということでいやな思いをしているんだろうね——でもなぜ、一新兵として戻ろうとしているのかね。どんな記憶も消される必要はないんじゃないのかい——軍団に戻ったらすぐに、脱走者という立場は取り消されるんだし、それについちゃ、うしろめたいと思うこともないんだろう。それほど単純な話もないじゃないか」

「単純な話じゃないかって言うんですか」魂が苦痛にさいなまれているのを示すかのように、ノーマンは冷笑した。

「ああ、そうじゃないかね」

「あなたが知ってさえいたらね」

「お願いだから」目の前にいる過去の自分が精神的にひどい苦渋をなめているのを忘れていたわけではないが、ピースは自分の気の短さとたたかわなければならなかった。「そのことを洗いざ

らい話してくれないか、ノーマン」

「問題は」昂奮した様子でグラスをつかみながらノーマンが言った。「ぼくがただの無許可離隊者じゃないということなんです。敵の面前で脱走した――まったくの臆病から――しかも、大将の息子ともあろうものがですよ。ことは重大なんです」

「それはかなり重大だな」とピースも同意した。「でもだからといって、われわれの……いや、あなたのお父さんが、あなたのためにけりをつけられるわけでもないだろう」

ノーマンがかぶりをふった。「あなたには理解できないんですよ――ぼくのようなしつけを受けているわけじゃないから、あなたにわかってもらおうとも思いませんがね。どうやったって、家系の名前にきずをつけた不名誉は拭いとりようがないんです。どのみち、あなたの言っていることはぼくにとって大きな問題じゃない。問題なのはぼくの罪悪感のほうです。ぼくが脱走した状況全体にかかわる、勝手にきめつけ、組み合わせた手作りの罪悪感なんです」

「そこのところを話してくれないか」不安からくるひやりとした感触を無視してピースが言った。

「そんなわけにはいきません。このことは今まで誰にも話せなかったことなんです」

このときピースは、控えめにすることで怒るとき以上の効果をあげた。「わかった。そこであんたは敵の面前で逃亡した――そのつぎにはなにが起こったんだね」

ノーマンが息をふるわせた。「そのときぼくたちは、アスパトリアで戦っていたんです。あそこへは行ったことがありますか」

「ええと」ピースは記憶の中をまさぐる様をよそおった。「一度、あそこで休暇をすごしたと思いますよ」

「でもそれは、反乱が終ったあとにちがいないですね。ぼくがアスパトリアに八三年にいったときは、まだ戦争がつづけられていて、なにもかもが混乱していました。そこでぼくは、なんとかタッチダウン市まで行って、しばらくのあいだ身を隠したんです。もちろん憲兵がぼくを探したんですけれど、その探索から身をかわすのはむずかしいことじゃありませんでした。すこしのあいだは気楽な生活でした。お金をたっぷり持っていましたからね——そのときです、オスカーと呼ばれる異星の存在が姿をあらわしたのは。あいつらがぼくを悩ませはじめたんです。オスカーのことを聞いたことがありますか」

ピースの心臓が狭窄をおこしたように感じられた。「うん、耳にしたことはあるな。でもなぜ、そいつらはあんたを追いまわすようになったんだろう」

「それには弱りましたよ」ノーマンが夢でも見ているような声で言った。「あいつらは、ぼくがなにか悪いことをしたのがわかっているようでした——ぼく個人の意見では、あいつらは人の心が読めるんだと思いますね。あんな不気味なことはありません。だって夜だったんですよ、はじめてあいつらに出会ったのは。それでもあいつらは、あのものすごい眼でぼくの心のうちを正しく見とおしているようでした」

「それが起こったのは八三年だと言ったね」心の中で日付をあれこれ入れかえながらピースが顔をしかめた。「でもいまは二三八六年だよ——あんたは三年間も逃げまわっていたように見えないがね」

「そりゃ、そんなことはありませんよ」ノーマンはピースに向かって謎めいた微笑をした。「でもその説明となるととても奇想天外で、あなたには信じられっこないでしょうね」

「いや、信じる。なんだって信じるよ。話してくれ、ノーマン」
「ええ、それじゃあ。日中はずっと部屋の中にいました——普通は、夜になって出かけるだけでしたからね——でも完全に腹ぺこになったので、ひとつ〝青いひき蛙〟という一種のレストラン兼ナイトクラブで大盤振舞いにあずかろうと思ったんです。とても高いところですが食べ物はそりゃあもうおいしいんです。だけど魚貝類はいけません。行かれたことはないと思いますが、もし行ったら、海老だけは注文しないことですね」
「そうしましょう」ピースがノーマンに保証した。「その晩ですね、あんたがオスカーに出会ったのは」
「その話をしようとしていたんじゃないですか」ノーマンが文句をつけた。「食事の代金を払うと、きたならしい小さな土産をくれたのでそれを持ってレストランを出ました。そして日中はずっと狭い部屋の中に閉じこめられていたので、まっすぐ帰るのはよそうと心に決めたんです。近くに映画館があったものですから——そう、多重投影をやっている映画館のひとつです——なにをやっているのか見に行きました。外のポスターに目をやったんですが、その手の上演種目を見たら興味がなくなりましたね。あくどい猥褻映画だったもので。裸の女どものポスターでした。
生まれつきああいった手のものは見たくないんです。そこでどこかほかの場所へ行こうとしたんです——でもこんなことはあなたには信じられないでしょうが——年のころは十ぐらいの男の子が近づいてきて金を出し、中につれてはいって、そこでストロボ眼鏡を取り替えっこしないかと言ったんです。わかりますか、いわゆる成人映画を見させろっていうわけです」
「それであんたはどうしました」性への嗜好に対して自分が以前に経験したあのむかつくような

気持を思い出しながら、相手の気持がわかるというようにピースは言った。
「どう思います。ぼくはその餓鬼の耳をひっつかんで、家の親のもとにまっすぐ連れていくぞと言ってやったんです」
「それは結構」ピースは、胸のつかえがおりた。「あんたはよいことをしたんだ」
「ぼくもそう思ったんです。でも悪がしこいその好色な餓鬼が騒ぎたてたんです」その出来事を思いだしたらしく、ノーマンの顔にショックだという表情があらわれた。
「あなたに信じられますか、ぼくがあることを仄めかしたってその餓鬼がまわりの人たちに言ったんです」
「おやおや」
「本当なんです。なんて言ったらよいかをその子は知っていました――おそらくいつもそのあたりをぶらつくのが習慣になっていたんでしょう。そのとき女経営者が外に出てきてぼくに大声をあげたかとおもうと、笛を吹きました。それはぞっとするような経験でした。状況がそのようだったし、お尋ね者でもあったのでいそいでその場を離れることにしました。それで駆けだしたんですが――いまわしいオスカーが姿をあらわしたのがそのときなんです。なんであいつらがそんなにすばやくその場に現われることができたのか、ぼくにはわかりませんでしたが、二人のオスカーがぼくをつかんだので、なんとかふり払って裏通りに逃げこんだんです」
きりきりと痛みが波となってピースの脳を駆けぬけた。「どんなふうにしてその二人をふり切ったんだね」
「いや実に突拍子もないことでしてね。ぼくはとても早く走れるほうだと思っていたんですが、

オスカーたちはたちまちに追いこしてしまったんです。もしぼくが古い工場につながっているドアに気づかなかったら、つかまえられていたでしょう。ぼくはそのドアを蹴っとばして、真っ暗な二階へ駆けあがり——そこがどこだかもわからずにですよ——便所の中にまぎれこんで、便座にかがみこみました。すると……あなたにはつぎになにが起こったか、とても考えつかないでしょうね」
「あんたは戻っていった、時……」物語に夢中になったピースは、決定的な言葉を短く切りあげた。
ノーマンが奇妙な顔をして見た。
「今なんて言いました」
「あんたはうしろへさがった。壁の中へね」
「起こったのはそんなことじゃありませんよ」大切なところで話の腰を折られて不愉快になったノーマンが言った。「ねえ、この話を聞きたいんですか、それとも聞きたくないんですか」
「ごめんよ。続けてくれたまえ」
「ええ——でも口をはさまないでください」
「約束するよ」
「さて、今言ったとおり——あなたにはつぎになにが起こったか、とても考えつかないでしょうね」
「いやとても考えつきっこないよ」
「そうだと思いますよ」生き生きとしてノーマンが言った。「実際にはその便所がタイムマシン

だったからですよ――外向性マシンでした――そしてぼくは時間をさかのぼって行ったんです」
「おやおや」
「本当なんです。ぼくはまっすぐに二二九〇年に行ったんです。便所がその時代のレインコート工場に戻ったときにマシンは作動を停止しましたが、そこにはレッジという頭の狂った人物がいて、その建物の上階を借りていたんです。変わった小男で――まるっこくて、赤くて、ゴムのようで――タイヤのチューブでできているように見えました。話の終りの言葉をたえず繰り返すんです、ラチェット歯車の爪が滑ってでもいるようにね。ひとりの人間としてはとても好きになれませんでしたが、エレクトロニクスの分野の発明家として生活費をかせごうとしていることには惹かれましたね。

ぼくも、そんなことでもやって生きて行きたいといつも思っていましたのでね。ぼくは理論科学や応用科学には天性の才をもっているんで、ほかの連中が漫画を読むのと同じように回路図が読めるんですが、家族はいつだって、飛行家や射撃兵のような軍隊で使う技術を懸命になって身につけるようすすめたんです。ぼくが見たかぎりでは、レッジには皆目、発明家としての才能がありませんでした――人に真実を語らせるために珍妙な機械を作ろうと時間を浪費していたんですが――ぼくが開発する値打ちのあるアイディアをいくつか持っていることをすぐに見抜いたもので、二人は一種の協力関係を結びました。しばらくのあいだは、そこにいて幸せでした。実際にぼくは幸せだったと思いますね、もしぼくに罪の感情がなかったら、シシイが現われなかったら」
「レッジの娘さんかね」

「ええ」ノーマンがまた、あれっといった顔をしてピースを見た。「どうして知っているんですか」

「そうさ……狂った科学者には、いつだって娘がいるんだ」口が滑ったことで自分自身をのろいながらピースが言った。「かわいい小さな子、なんでしょ」

「シシイに会ったことがある人なら、とてもそんな言い方はできないでしょうね」熱っぽくノーマンが答えた。苦悩の表現が顔にあらわれていた。「シシイはぼくを口説いてばっかりいましたし、ぼくはぼくで、なんとかシシイを撃退しようとしたんですが、一番いけなかったのは、レッジのじじいがそのことをまるっきり悪くとったことなんです。ぼくがある種の猛烈なセックス狂で、レッジのすぐ鼻先で娘の貞操を奪おうとしているんだときめつけたようです」

「鼻先で貞操を守るなんておかしな話だな」とうっかりピースが言った。

「下卑たことを言わないでください」ノーマンが非難がましくピースを見た。「新兵としての軍務が、あなたを下品にしたようにぼくを下品にしないことを祈りますよ」

「そんなことにはならないよ、きっと」とピースは言いながら、これからは口を閉じたままでいようと最終的な誓いをたてた。「話を続けてくれ」

「今言ったように——ぼくは自分の罪の記憶に悩まされていたし、ぼくがすばらしいと考えていたアイディアを思いついたのもその同じ罪ゆえだったんです。それがおそるべき冒瀆だったことが今ではわかります。なぜって、悔恨は聖なる笞(しもと)ですからね。しかし盲目の傲慢さでぼくは先を進め、あの地獄の機械を作ったんです」

本能と、半ば形成されてきた記憶が、じきに恐るべき暴露がおこなわれるぞと警告したので、

ピースはテーブルの縁をつかんだ。以前には疑ってもいなかった暗い亀裂がピースの心の中に口をあけた。

「記憶消去機の原型を作るのは一週間とかかりませんでした」ノーマンがうつろな声でつづけた。「ぼくの計画は、それを自分自身に対して使うことでした。ぼくの罪深い魂を洗い清めるために。そしてそのあとで機械は壊してしまうつもりでした――でもレッジなりの計画があったんです。ぼくが最後の接続部分にハンダづけを終るか終らないときに、レッジがポークパイをひとつ持って部屋にやって来ました。いつも食べていたもので、それを切った塊りをぼくにくれました。奴がなにかをたくらんでいることにそのとき気づくべきだったんです。だって奴は食い意地のはったけだもので、以前にはほんのひとかけらくらいしかぼくにはくれなかったものだったからです。それをじかに新聞紙から食べました。胸がむかつくような習慣ですよね。せめてお皿でも使ったらと言っていたんですが、奴は……」

ピースの顔にあらわれた表情に気づいて、ノーマンは話をやめた。「眼からわかりますよ、あなた。ぼくが言おうとしていることを察したんでしょう。そうです、まったくそのとおりです――いまでは住民のいる銀河系全体に駐屯している宇宙軍団の、どの募兵事務所でも使っている記憶消去機をはじめて製作したのはぼくなんです」

ピースは頭をふり、言葉の流れを堰止めようとしてノーマンの手首をにぎったが、無駄だった。

「そのポークパイには薬物が入っていたんです、言うまでもなくね」ノーマンは話をつづけた。「そしてぼくがふらふらしだすと、あの悪魔のレッジはぼくを乱暴に階下へひっぱって行って、便所の戸を開けました――つけ加えて言うと、女便所の戸です――そして中へ押しこんだんです。

ぼくが便座にすわりこむと、ぼくが次にわかったことは、二三八六年のタッチダウン市にいるということでした。出発点を時間で三年もとび越えていたんです――タイムマシンは振動増加の位相にあったにちがいないですね」
「振動減衰の位相じゃなかったのかね」呆れたというようにピースが言った。
「ぼくは振動増加と言ったんです、そうじゃありませんか」瞬間的ないらだちがノーマンの顔から消えた。「ごめんなさい――あなたにとてもショックを与えたようですからね。入隊するときにあなたに対して使われた、その当の機械を発明した男に顔をつき合わせて会うことになろうとは、予期していなかったでしょうからね、そうじゃありませんか」
「いや、そんなことはないよ」とピースが小言でつぶやいた。
「もちろん、あなたは予期していなかった。たぶんいまなら、ぼくが本当のことを教えられたときにどう感じたか、あなたにも想像できるとおもいますね。最初、ぼくは自分が二三八六年にいるのを知って喜びました――戦争は終っていて、憲兵はぼくのことなど忘れてしまっていたようにみえましたからね。それとレッジがなにを企んでぼくを追いだしたかを知りたかったので、新聞社に行き、古くからのファイルに目を通したんです。もちろんマイクロフィルムにしてありました――聞いた話では、本物の古い新聞は、その重さのダイアモンドなりの値打ちがあるそうです――まあそんなことでレッジの経歴の一部始終は簡単に調べられました」
「どう書いてあったのかね」
「レッジは二三二一年に死にました。金持ちとして、また宇宙軍団の記憶消去機の発明家として有名になってね。奴の経歴にはその他の考案品はのっていませんでした。ということは、あの小

さなひき蛙めには才能がなかったことを証明しています。でも奴は、消去機の力で、アスパトリア軍アカデミーの科学部門で椅子を与えられたんです。レッジ教授だなんて、あなたに想像がつきますか。ふん、だ」
「ちょっと待った」ピースは懸命になって、今言われた新しい事実を根拠にして考えようとした。「記憶消去機のことでは、あまりあんた自身を咎めだてたりはできないね。つまり、その機械は二三八三年には広くゆきわたっていたんだから、二二九〇年から戻ってくる前に知っていたにちがいないものね、そうすれば……」
「だからってなにも事情が変わるわけじゃありませんね。消去機のことは耳にしていましたよ、当然にね。でもいつ発明されたかは知らなかったんです。そしてぼくが二二九〇年にさかのぼったときには、自己本位の計画に熱をあげすぎていて、当時、この装置が誰にも知られていないということを調べもしなかったし、わかりもしなかったんです。ぼくがこのアイディアを打明けたとき、レッジはびっくりしたにちがいないんですが、奴はずるがしこいので、それをぼくに気どられまいとしたんです。奴にも一半の責任があることはもちろんですが、ぼくが最初の火付け役なんだし――ぼくが主犯なんです」
「あんたは、精神的な悩みを軽くする機械を考案したんだ」とピースが言いはった。「それは犯罪行為なんかじゃないさ」
「犯罪じゃないですって」青白い顔に微笑を浮かべたノーマンの唇がねじれた。「あの機械がどんな役に立ってきたというんです。何千という若者が、忘れさせてやるという約束に釣られて軍団に誘いこまれ――その挙句がどうなります。殺されるんです。若くして死ぬんです――そうな

るとあの機械が大義のためのものだと偽るわけにはいかないじゃないですか。
ぼくは、軍団がこの社会のすぐれたもの、高貴なものすべての鑑になっていると信じるよう育てられました。まだほんの子供のころには、丈の高い金色の宇宙船に乗りこんで銀河系宇宙のあちこちに十字軍となって遠征するのだといつも夢見ていました——軍団の主な役割が、他の世界の人たちに、テレビとか電気歯ブラシといった地球の製品を無理やり買わせるのだということも知らずにです」
「こいつはたまげた」知らなかった以前の心理状態のほうがよかったとうらやまれるような憂鬱さが感じられはじめて、ピースは身体がふるえた。
「あなたにはそれだけのことで済むでしょうが」とノーマンが言った。「ぼ、ぼくがどう感じているか、考えてもみてください。自分がそれほどにも非難されるべき存在だとわかって。ぼくは、自分の罪を抱えて生きて行く努力をしなくてはならないし、自分が自分にもちこんだ罰を受けなければならないことはわかっていますが、そんな調子でこれ以上はやって行けないんです。過去の世界で自分がなにをやったかをすべて知り、それに加えて現在の世界でやったことを考えると、いますぐになすべきことはひとつ——軍団に入隊することしかありません。忘れることです。まったくもって逆説的な話、そうじゃないですか」
「よくわかったよ」とピースが言った。記憶を取り戻したために、頭がひどくずきずき痛んだ。過去の全体が今ではほとんどわかってきたのだ。だがそれは前に怖れていたことよりももっと悪いものだった。ただそれ以上に驚くべきことは、まだ探らなくてはならない深淵がひとつあるとわかったことだ。罪悪感と恐怖のブラックホール、三途の川の真っ暗な井戸がピースを手招いて

いる。ノーマンはそのことについて話すのを拒絶したが、記憶をむしばむ汚れが、ピースの脳にあるすべての細胞の中にまで拡がっていった……
「二日前のことです」とノーマンが話しつづけていた。「アスパトリアではぼくを知っている者がいるという危険が高かったもので、あちらで軍団に入隊しようという気にはなれませんでした。そこで地球へ行く切符を買いました」
「オスカーにはぶつからなかったの」
「このときは会いませんでした。幸運だったんです」ノーマンはテーブルの木の部分に手を触れて厄払いをした。「おそらくあいつらは、どこかほかのお稚児さん趣味の男でも追いつめるのに忙しかったんでしょう――そうすると、その男にはかわいそうなことをしましたがね」
ピースはうなずいたが、ほとんど聞いてはいなかった。二人の男の名前が頭の中にひょいとうかんできた――オズィ・ドラブルとヘック・マギルだ。この聞きなれない名前から二つの顔が連想された。二人ともやせて、風雪に耐えた顔をしており、宇宙軍団の新兵特有の悲しげな表情をたたえていたが、個性的でユーモアを解した。この二人の顔は、ピースの軍隊生活のある段階でピースにとって重要な役割をしたことはわかっていた――その状況にぴたりと合う穴はたったひとつ。ふたりが、ピースの敵前逃亡をとりまく謎の一端をなしていたことはまちがいないのだ。
あの出来事にかかっている帳(とばり)は、ピースの頭の中で働きかけるなにものかの力で脇に押しやられたので、最後に真相が解明されるのに先だって、今すぐに打つべき手はなにもないことがわかってピースは身体がふるえた。
「なあ、ノーマン」気晴らしのつもりでピースが言った。「この募兵事務所に、あんたが何者か

を言い当てる人間がいるかもしれないということは心配にならないのかね。つまりだ、ナイチンゲールというのは軍団の中でももっとも有名な名前の一つだからね」

ノーマンが頭をふった。「もうとっくにその心配はしています。だから名前をレオ・トルストイに変えようとしているんです」

「トルストイだって」おどろいてピースは目をぱちくりさせた。

「そうです。トルストイは、偉大なロシアの作家の中でぼくが一番好きな人物なんです。ぼくは陰鬱なロシアの雰囲気にひたっているので、適切な選択だと思っています」

「でもね……そんなふうに名前を変えて役に立つのかね」

ノーマンは、好ましくない人物が聞き耳をたてていないことを確認するために、ピースの肩越しにあたりを見まわした。「自分の過去をふり払いたい多くの連中は、軍団に入るときに名前を変えるんです。でも入隊のときに偽名は使えません。なぜって、軍団の医者が記憶消去と標準電気心理反応条件付けのために応募者に催眠術をかけて恍惚状態にするので、そんなときには別名で答えられっこないからですよ」

「そうとしたら、あんたはどうするのかね」

「姓名変更の専門家のところに行くんです。別の言い方をすると、深い催眠状態の下で自分の選んだ別名を植えつけてくれる催眠術師のところへ行くんです。もちろん非合法な施術ですが、どの募兵事務所の近くにもそんなことをする専門家の一人や二人はいつだって見つけられるんです。ここから一丁場行ったところにも一軒ありますがね。トムリンスンというのを訪ねてごらんなさい――床屋という商売のかげにかくれてやっていますが、その男の収入の大部分は、逃亡者に催

眠をかけることから入ってくるのだと思いますね。ぼくが数分のうちに行こうとしているのはそこなんです——すべてお膳立は揃っているんですよ」ノーマンは、かたわらの窓に映っている透明な小さな露をこすってから、外を凝視した。
「あっちの要塞で明りがいくつかともったように見えるので、ぼくもそろそろ出かけたほうがよさそうです」
「ちょっと待って」とピースが言った。取り残されて、自分ひとりで考えこむのがいやなのと、名前についての矛盾がまだわからなかったのだ。「名前を変える施術の途中で、なにかうまく行かないなんてことはないんだろうね」
「自分が行ってみるときのことを考えているんですか、どうです」ノーマンは、相手の考えを読むような目でピースを見た。「うまく行かないんじゃないかと心配する必要はなんにもありませんよ——装置はしごく簡単なものだとトムリンスンは言っていますがね。機械で催眠術をかけるんです。そのやり方は、自分の望みの名前を紙に書いておき、機械が正しい恍惚状態にもって行くまでそれを見つめていればいいだけのものです。無意識に叩きこむのにこんな簡単なことはちょっとないんじゃないですか」
「あんたは新しい名前をもう書いてあるのかね」
「もっとうまいやり方を考えたんです——大きな字で印刷してあるんで、心が迷うなんてことはありません」ノーマンは、上着のポケットから分厚いペーパーバッグの小説を取りだし、指でそれをたたいた。「ほらこの本の表紙にね」
「それがいい考えだと思っているのかね」口出しをするのが賢明かどうか迷いながらピースが言

った。「いやね、あんたは本の間違った部分を見つめることだってあるだろうという意味さ。ちょっとした偶然でね」
「なんて莫迦げた話を。自分に戦争と平和、つまりウォー・アンド・ピースなんて名前はつけませんよ」
「だからほんの偶然でと言ってるんだ」
「たしかに、ぼくには偶然の出来事が起こりがちですがね、あなた。でもそんなことでは起こりっこありませんよ」ノーマンは、これが最後といったように立ちあがり、本を小脇にはさんで、手をピースのほうにさし伸べた。「まったく見ず知らずの他人に、ありったけの心配事をぶちまけるなんて、ぼくも一方的でしたね――でもこんなに好い聞き手になっていただいてありがとうございました」
「いや、いいんだ」ピースが手を振った。「おそらくいつか、あんたは同じことをわたしにするだろうからね」
「ぼくたちの人生行路がまた交叉するなんて考えられませんせん」とノーマンが言った。酒場を出てから数秒後、ノーマンのぼやっとした輪廓は――苦悩の重みにふさわしい葬式のときのような足どりで――湯気にけむった窓を横切り、視野から消えた。
しばらくのあいだピースは、なにも映っていないガラスのスクリーンを見つめていたが、そこに不意に、他の世界、他の時からの光景が映し出された。記憶が完全に戻るにつれ痛みがましたので、こめかみを両手でおさえたピースには、自分の恥辱の語られざる部分のすべてがわかった。

11

《ノーマン・ナイチンゲール中尉は、タッチダウン市の北方百キロ、アスパトリア内陸の森林で部下と斥候活動をしていた。

中尉は、突然動くものがあればそれがなんであれ焼きつくしてしまおうと、放線ライフルを手に特に用心深く前進していた。撃ちたいとはいっても、それはなんとか生き残ろうとする欲望からであって、この地区で人間に向かって発砲する必要がないのはわかっていた。ナイチンゲールは、アスパトリアの植民者と戦うのにがつがつしていたわけでなく、かえってその独立への要求をまったくもって正当なものとみなしていた。

この惑星へ来てからまだそれほどたってもいなかったが、この地についての知識は幾分なりと心得ていたので、土着のアスパトリア人は、軍事上の都合であったにせよ決して内陸部へは行かないことがわかっていた。この地のおおいかぶさっている枝々は、奇妙な雑食性生物の棲み家で、その生物は——毛布のような形と文様化した彩色のために——新兵たちからはとびかかりじゅうたんと名づけられていた。土地の人たちの呼び名はおそらく、予告もなしにとびかかり、ふり払

うこともならず、さらには軍団で経験される標準的な死に方よりももっと見た目にむごたらしい死をもたらすこの敵に対する恐怖と嫌悪を巧みにそらすようなものとなっているのだろう。とびかかりじゅうたんの犠牲になろうとしている同僚を見かけたものは、即刻その同僚を撃って死に至らしめることを命じられてもおり、またそのような事故にあった者は――苛酷な手段とは見なさずに――必要となった際には戦友に頼んで同様な処置をしてくれるよう頼むのが常だった。

日がまだらに当たる森の静寂の中を、道を選びながら進んでいたナイチンゲールは、心が千々に乱れていた。軍務生活が概して好きではなかったので、アスパトリア人がはじめは慎重にもほとんど入らなかったこの森からアスパトリア人を一掃せよとする横暴な参謀部の命令には特に憤慨していた。その怒りと懸念に加え、ナイチンゲールには、二人の良き部下――その生命を預っているオズィ・ドラブルとヘック・マギル――を引き連れているという事実があった。軍団組織の構成からいって将校と新兵のあいだはきびしく区別されていたにもかかわらず、ナイチンゲールはこの二人を友人とみなしていた。所属している八一連隊は、指令強制器の埋めこみなどを軽蔑するくらいの精鋭部隊だったので、古参の兵隊が経験の乏しい若年の中尉に向かって粗っぽい言葉を吐くことも平気だった。しかしナイチンゲールは、古参のドラブルとマギルからいつも信頼され、控えめな精神的支援を受けていたので、自分のために二人が被害にあわないよう、ひどく気を使っていた。

三人はナイチンゲールを真ん中にして横隊で行進していたが、そのとき、最初のとびかかりじゅうたんが襲いかかった。

ナイチンゲールは右手に、柔らかい衝撃音とそれに続く、物に包みこまれたような叫び声を聞

いた。ふり向くと、マギルが地面に倒れ、その体がおそるべき食肉動物の明るいひだの中にくるみこまれているのが見えた。怪物の葉状肢がこの兵隊の身体のまわりにまといつき、消化分泌物がその肉に作用を及ぼしはじめるにつれてマギルはのたうちはじめた。ナイチンゲールは、身じろぎひとつできずに、その光景を恐怖に駆られて見つめた。
「そこをどいて、中尉」左手からドラブルが大声をたてた。「撃てないじゃないですか、中尉をまきぞえにしないでは」
ナイチンゲールが向き直ったその瞬間、二番目のとびかかりじゅうたんが、銃を水平にしてマギルを慈悲の心から射撃しようと身構えたドラブルに襲いかかろうとしているのが見えた。固い球となって石のようにドラブルの頭上近くまで落ちてきたその生き物は、最後にぱっと拡がってマギルの身体全体を覆い隠した。マギルは音もなく倒れたが、そのもがき闘うさまは、ナイチンゲールに対し、戦友として最終的行動を取るよう懇願していることを雄弁にものがたっていた。
ナイチンゲールは物音をたてずに口を動かしながら、狙いをつけようとした。だがそのとき、頭上の枝でなにものかの動く音がした。
ナイチンゲールはライフルを投げ捨てると——悪魔に追いまわされている男のように——逃げだし、だいぶたって木のない安全な所に着くまで、走りに走った》
ピースは、露でけむった窓に映る灰色の、見かけ上の深みに何分ものあいだ目をこらしているうちに、とうとう過去を探る手掛りをつかみ、自分の過去を探る遍歴もこれで終ったのだと悟った。自分がいったい誰であるのか、自分がいったいなにものであるのかがはっきりとわかった

——と同時に、そうと知った以上、これから先はとても生きつづけられないと思った。罪悪感が重すぎたのである。

とするとそれに対処する道はただひとつしかない。立ちあがろうと足をもつらせながらピースはそう思った。「宇宙軍団に入隊しなくては。忘れるために」

身体の状態はあわれなものだったが、軍団の募兵士官たちは自分の割当てをこなすために、大手術によらないで元の身体に戻れる者なら誰だろうと受け入れるにちがいなかった。その証拠に、応募者の身もとを訊ねたり、過去の生活を調べたりすることはほとんどなかったが——さっき指摘されたとおり——新しい名前は必要だった。ピースの家系が軍団の中では傑出していたことから、ノーマン・ナイチンゲールと名のるわけにはいかなかったし、レオ・トルストイになろうとする際にまつわる偶然事を受け入れるわけにもいかなかった。

「アンナ・カレーニナになってしまうかもしれないような賭はしたくないし」髯面のピースがもぐもぐと言った。「人の名前に関して言えば、はじめの二回はどうもうまくなかったようだ」そこでピースは酒場のカウンターへ行き、一枚の紙切れを手に入れると、しばらくあれやこれやと考えたあげく、大きな活字体で、裏切り者の名であるユダ・フィンクと書いた。

悲観的ながらもこの呼び名に満足したピースは、紙切れをポケットに押しこみ、出入口の扉まで足をはこんだが、外の世界の冷たさと自分に対する敵意に直面するのがいやさに、出て行くのがためらわれた。そんな恐怖心は根も葉もないことだと覚悟するまでに数秒を要したが——そうわかってみると、未来は、どんな未来も、今よりはよほどましにちがいないと思われた。

扉をあけて酒場から一歩ふみだしたとたん——ピースは二人のオスカーと顔をつき合わせた。

真鍮の巨人たちが瞬間的にピースの行く手をさえぎり、小さな玄関口に閉じこめたので、こんな状況では——奇蹟でも起こらないかぎり——逃れる道はないとピースは観念した。
降参のしるしにピースが両手を挙げたときに、なんとか奇蹟とも呼べるようなことが起こった。ピースのもうひとりの自分であるノーマン・ナイチンゲールが、姓名変更者のところでの施術をおえたらしく、三人のすぐ近くに姿を現わし、うす汚れたエクレス要塞のばかでかい建物のほうへと通りを横切った。周囲のことなど気にもとめず、眼を地面にくぎづけしたままのナイチンゲールは、落胆そのものの様子で丈の低い階段に足をひきずりあげ、募兵事務所のドアをくぐった。
オスカーたちは、ノーマンが消えるのを見守っていたが、それからお互いのきれの長いルビーの眼を見つめ合った。二人がその場に凍りついていたので、滑らかに鋳こまれた人物の驚いた表情からピースは、これは二人の同一人物が現われて困っているのにまちがいないと見てとった。千載一遇の好機をとらえたピースは、拡げた手の下をかいくぐり、自由の身になろうと逃げだした。肋骨が槍でつつかれたように痛んだので、走るのはむずかしかったが、数歩ほどのところに裏通りへ入るお定まりの入口があったので、ピースは感謝の念にむせび泣きしつつ、そのほうへと勢いよくとびこんでいった。
まさにちょうどその瞬間、裏通りからトラックが出てこようとして、ピースにはげしくぶち当たった。
ピースは表通りにはじきとばされ、身動きひとつできずに横になって空を見つめた。骨がぽきりと折れる音がし、身体の中の名状しがたくおかしな感じがどこか別にも傷害を受けたことを暗示していたので、これ以上積極的な動きをしても無意味だとわかった。すぐそばでトラックの運

転手が自分に落度はないと小声で抗議しはじめているのが聞こえたが、その場にじきオスカーが現われたらしく、運転手は黙りこくってしまった。

　オスカーたちがピースの上にかがみこんだので、空はそのがっしりした肩で覆われ、顔色は読みとれなかった。二人のうち一方が腕をピースの下にすべりこませて身体をもちあげたので、その動きでひきおこされた苦痛のはげしさが、ピースの命もいよいよ幕だと物語っていた。長かった遍歴も、いよいよここに終ったのだ。

　この事件のあとには混乱したときが流れた。あらゆる形であらわれる苦痛に応じて出来事が点綴し、夜と昼の重苦しい規則性につれて、意識が戻ったり、なくなったりする不連続な世界の中にいたのだ。ピースには夢うつつながら気づいたことがあった。市街を猛烈な速さで動いていたこと……オスカーの肌があたたかく、予期していたようには冷たくはないとわかったこと……宇宙船のドアのような重々しい金属のドアのひびく音がしたこと……黒いスクリーンの上に星々の図柄が拡がり、多くの太陽恒星が考えられないほどの光速で脇をつき進んでいったこと……そして宇宙空間からかいま見た緑白色の世界は、アスパトリアにちがいなかったし……たいへんな努力でピースがそれと認めた、光と影がおどり、変化する飾り窓は、枝の天蓋……木の枝……森の木の枝……アスパトリア内陸の森の木の枝だった。

「ああ、だめだ」膝黒の闇のような予感にうちひしがれてピースは大声をたてようとしたが、言葉にはならなかった。ピースの絶望に踵（きびす）を接してやってきたのは一種の受容の気持だった。他人に耐えさせたことを自分が耐え忍ぶことによってのみ永続的な休息がえられることを遅まきながら理解したのだ。

オスカーたちは復讐の天使、神の正義の冷静な行政官なので、いっそのことピースは彼らに感謝すべきだった——なぜなら、生を渇望する以上に、ピースは良心の伴う平和を望んでいたからだ。

落葉の散りしく地面に静かに横たわったピースは、オスカーたちがとびかかり、じゅうたんを自分の上まで運んでくれるのを見ていた。そしてその生きている葉状肢——下側が血のように赤く、何百万という小さな触手がうごめいている葉状股——がむさぼりつくようにピースの顔や傷ついた身体の上に落ちてくるのを微笑しながら見ていた。

12

死後の生をかならずしも望まないわけではなかったが、ウォレン・ピースはそれがこんなにも早くなることを期待していたわけではなかった。
ピースは——不可能なくらいの力づよさを、不可能なくらいの善を感じながら——起きあがり、いぶかしげに自分の輝く、新しい身体を見おろした。それは、英雄を思わせるミケランジェロの彫刻が生命を吹きこまれた、力と均齊と美の視覚的交響楽であった。ちょっとしたしなやかな動きひとつで立ちあがり、自分の身体を見つめると、金色の肌全体につよい光がきらめいた。
とびかかりじゅうたんは影も形もなかったが、それをピースにかぶせたオスカーが二人そばに立ってほほえんでいた。いまや自分もオスカーの一員になったことがわかったので、ピースはなんらの恐怖も感じなかったし、新しく得た鋭い視覚で見ると、二人の顔は、ピースが以前に信じこんでいたものとは似ても似つかないことがわかった。一人一人にはそれなりの個性があり、はっきりと見分けのついたその顔には奇妙なことに見覚えが……
「やあ、あんたたち二人じゃないか」信じられないというようにピースが大声をあげた。「オズィ・ドラブルとヘック・マギルだ」

「そのとおり、ノーマン」一歩ふみだしながらドラブルが言った。「もっと早くぼくたちだとわかってくれたらね——これほどはげしく追いかけっこをしなくても済んだのに」
「でもあんたたちは死んだとばかり思っていたのさ」
「無理もない誤解だと思うね」マギルが口をはさんだ。「誰だってとびかかりじゅうたんは人を食べようとしていると思いこんでいるんだ——誰も共生する仲間になろうとはしなかった——それに、ぼくはかなりおそろしげに見えたものね」
ドラブルがうなずいた。「あなたに感謝しなくちゃ、ノーマン。ヘックとぼくは、オスカーになる過程が完了する前に射殺されなかった最初の人間なんだ。ぼくたちはとてもあなたのお蔭を蒙っている。人類はたいそうあなたのお蔭を蒙っているのさ」
「なに、それはぼくがひどく怕がったためなんだ」とピースが告白した。「ぼくはあまりにも……」
「そんなことはもう考えなくていい」とドラブルが言った。「あなたはいまオスカーのひとりなので、これからは怕がることなど決してありはしない。とびかかりじゅうたんは、それ自体があなたの身体の中に——特別の塊りとなって——溶けこみ、あなたの神経組織の中にも溶けこんでいるんだ。あなたはいまや超人なんだ、ノーマン」
「でも——教えてもらいたいもんだね——なぜあんたたちは、そのことを誰かに話さなかったのかね。なぜあんたたちは、人間に真相を知らせようとしなかったのかね。みなを死の恐怖におとしいれたりする代りに」
ドラブルが弁解がましく言った。「そう、ぼくたちは今、サブエーテルの声と聴覚をもってい

るんで、何千キロと離れていても互いに話ができるんだけれど、普通の人間にはぼくたちの言うことが聞こえないのさ。犬だってぼくたちの言葉は聞こえないんだ。あなたのような人間ならおそらく、ぼくたちが人間と話のできる言語変換機を組み立てられるだろうけれど、それが確かにいい考えだとは思えないんでね」

「なぜそう思えないのかい」

「なぜって、ぼくたちはだれもかれもを怕がらせないんだ」とマギルが言った。「法律を守っている普通の市民は、すぐにぼくたちの存在に慣れっこになってしまうんだが——ぼくたちが歩きまわっているのを見ていやな気になるのは、悪者や与太者だけなのさ。それに悪者たちは、ぼくたちから身を隠しおおせもしないし、金で追っぱらったり、力で撃退したりできないことを知っているんでね。だからおそらく、話が通じないことは悪いことではないのさ、ノーマン。人類はぼくたちのような存在を必要としているようだ」

ピースは顔をしかめてマギルを見た。「そのことがぼくたちを高みに祀りあげているんではないだろうね」

「ぼくたちはかなりの高みにいるんだ——というより、ぼくたちは最高の存在なんだ」マギルは平然として答えた。「とびかかりじゅうたんと一体化することによって、身体が改善される以上に、倫理感覚が高まるんだ。オズィとぼくは、負傷して死ぬ前になんとか巨人に転換できた一握りの軍団兵と一緒になって、まさにこのアスパトリアで戦争を止めたのさ。そうすることでどれだけ多くの人命が救われたか、考えてもみてもらいたいな」

「ぼくたちは共生の超人なんだ、ノーマン——食料とか水、熱とか空気、それに性といったもの

を必要とする人間の弱みにわずらわされることもないからね——だからあなたの助けをかりてぼくたちは、銀河系じゅうに拡がり、戦争を止め、行く先々にみられる犯罪と腐敗を撲滅しようとしているんだ。まあ考えてもみてくれ、ノーマン——あなたがいつも心底から望んでいたのは、そんな生き方じゃなかったのかい」

ピースはちょっとのあいだ、その申し出について考えてみたが、マギルの言葉はまったくもって真実だと理解した。ピースは二人の同僚を見つめた。ゆっくりと微笑が浮かびあがってきて、それが二人の金色の顔で反射した。するとかつて経験したことのない純粋な幸福感が、ピースの内的生命を通して湧きあがってきた。

ピースが手をさしのべると、ドラブルとマギルがその手を取り、皆で腕を組んだ。そして——サブエーテルの声のかぎりをはりあげて歌いだしたこの三人のきらめく巨人たちは、極みのない充実感のあまり、ときおりその場その場にある木を陽気に蹴りながら、森じゅうを踊りつづけた。

訳者あとがき

昭和五十六年の今年になって、サンリオSF文庫で一斉にわが国にその作品が紹介されるボブ・ショウは、ここ十年ほどの間に次々と作品を発表している気鋭の英国SF作家で、欧米ではその定評がすでに確立し、ファンも多いという。

簡単に略歴を記しておくと、生まれは一九三一年（昭和六年）というから今年五十歳。生地は新旧キリスト教徒の対立がはげしいアイルランドのベルファストである。技術教育を受けて数年をアイルランドおよび英国、カナダで建築設計に従事したが、二十七歳の時からPR関係に転向してジャーナリストとなり、航空機会社の広報担当もしたが、今では作家として一本立ちしている。三人の子持ち。趣味は読書にクラフト、それに「脚を上げて坐りながらビールを飲み、同類と喋ること」。最初の作品は十九歳のとき（一九五〇年）のSFで、ニューヨーク・ポスト紙が買い上げてくれた。一九五〇年代にいくつかの短篇を発表したが不満を感じて以後の十年ほどは何も書かないで過した。一九六七年になって最初の長篇SF『夜歩く』を発表。以来年に一作の割でSFを書きつづけているが、一九七一年の『去りにし日々、今ひとたびの幻』で名声を博し、一九七五年の『オービッツヴィル』ではその年の英国SF作家協会賞をとっている。

ボブ・ショウは実に想像力豊かな物語作者で、さまざまなアイディアを縫いあわせては奇想天外な出来事が継起するところは本書でおわかりのとおりである。アイディア作家の面目躍如といった観がある。しかも一面では Tall Tale（大袈裟な話）の伝統を引きながらも、ほとんどの場合、挿話の一つ一つに結末をきちんとつけているあたり、構成力もかなり確かだと言えよう。

本書『おれは誰だ？』の原名は“Who Goes Here?”（ここに行くのは誰か）である。普通の文脈では「ここに来るのは誰か」あるいは「そこに行くのは誰か」になるわけで、すでに題名からしてアイロニカルである。一昔前のフランス外人部隊を模して二十四世紀の宇宙軍団では、自分の過去を忘れるために集まってくる若者たちの記憶を長期の軍務契約とひきかえに「記憶消去機」で消してやる。本書の主人公ウォレン・ピースはその記憶を消されたという事実すら忘れさせられている。そこから自分を見つける流転がはじまる。ひと頃のはやり言葉を使えば、アイデンティティを求めて宇宙空間を、時間をさまようのである。つまり自己喪失者が、自己の内面であるここを探しだすために旅行くこととなる。

全体の構想はこのように哲学的要素をもっていながら、文章の調子はかなり戯作的であるところにこの作品の特徴があると思う。たとえば言葉遊びが多い。よろいねずみとも呼ばれるアルマジロ（Armadillo）のアルマをアーマー（Armor・装甲）ジロと呼びかえたり、料理の名前、ボロニア（イタリア・ボロニア地方に由来するソーセージ）をショパンのポロネーズ（ポーランド風舞曲）にひっかけて、ボロネーズと呼んだりする。あるいはブレスト・ヴァージン（聖母マリア）を分解して皮肉に使ったり、キプリングの詩をもじったりと随所に言葉遊びを楽しんでいる様は、この作家の成長を物語るものであろうか、ＳＦに対する余裕をすら感じる。

最後に種明しめくが、この作品の構想上の難点とも言うべきものをとりあげてみたい。本書のヒーローであるウォレン・ピース（この名前の由来も人を食って面白いアイディアといえる）は最後に超人となって生まれ変わる。その解決自体はニーチェ、バーナード・ショウの系列をひいて納得はできるが、問題点はそのためにヒーローの、時間によって分割されたもうひとりの自己であるノーマンがこの世にとり残されることである。ピースはアイデンティティを回復して超人になったとしても、過去の自分であるノーマンにははたしてどういった結果がつけうるのであろうか。一方は解脱し、一方は何度も軍団に入り直しては過去を喪失して輪廻を繰り返すといったアレゴリーがこの作品のテーマなのであろうか。

ともあれこの作品は、近来になく楽しめるＳＦだと思う。

訳者紹介　嶺常生（みねつねお）

1932年、東京に生まれる。東京大学美術史学科卒業。訳書に、エド・マクベイン『金髪女』（早川書房）などがある。

サンリオSF文庫

おれは誰だ？

著者　ボブ・ショウ

訳者　嶺常生©

印刷　1981年12月10日

発行　1981年12月15日

発行者　辻信太郎

発行所　株式会社サンリオ

東京都品川区西五反田７の22の17

TOCビル１F

電話　03-494-5353

印刷・製本　株式会社廣済堂

定価 340円

57－C

ビッグ・タイム
フリッツ・ライバー　青木日出夫＝訳　二八〇円

妻という名の魔女たち
フリッツ・ライバー　大瀧啓裕＝訳　三六〇円

バケツ一杯の空気
フリッツ・ライバー　野口幸夫他＝訳　四六〇円

辺境の惑星
U・K・ル＝グイン　脇明子＝訳　二八〇円

天のろくろ
U・K・ル＝グイン　脇明子＝訳　三八〇円

ロカノンの世界
U・K・ル＝グイン　青木由紀子＝訳　三八〇円

幻影の都市
U・K・ル＝グイン　山田和子＝訳　四〇〇円

女の千年王国
U・K・ル＝グイン他　小池美佐子＝訳　四八〇円

時は乱れて
P・K・ディック　山田和子＝訳　三八〇円

死の迷宮
P・K・ディック　飯田隆昭＝訳　三八〇円

暗闇のスキャナー
P・K・ディック　飯田隆昭＝訳　五四〇円

ノヴァ急報
W・S・バロウズ　諏訪優＝訳　三〇〇円

爆発した切符
W・S・バロウズ　飯田隆昭＝訳　三八〇円

レベル・セブン
M・ロシュワルト　小野寺健＝訳　三二〇円

万華鏡
レイ・ブラッドベリ　川本三郎＝訳　五八〇円

カインの市
ケイト・ウイルヘルム　日夏響＝訳　三四〇円

クルーイストン実験
ケイト・ウイルヘルム　友枝康子＝訳　四六〇円

杜松の時
ケイト・ウイルヘルム　友枝康子＝訳　四八〇円

妖精物語からSFへ
ロジェ・カイヨウ　三好郁朗＝訳　二八〇円

ステンレス・スチール・ラット
ハリイ・ハリスン　那岐大＝訳　三二〇円

ステンレス・スチール・ラットの復讐
ハリイ・ハリスン　那岐大＝訳　三六〇円

ステンレス・スチール・ラット世界を救う
ハリイ・ハリスン　那岐大＝訳　三二〇円

ステンレス・スチール・ラット諸君を求む
ハリイ・ハリスン　那岐大＝訳　三六〇円

囚われの世界
ハリイ・ハリスン　島岡潤平＝訳　三四〇円

大西洋横断トンネル、万歳！
ハリイ・ハリスン　水嶋正路＝訳　三八〇円

大地への下降
R・シルヴァーバーグ　中村保男＝訳　三八〇円

確率人間
R・シルヴァーバーグ　田村源二＝訳　五二〇円

内死
R・シルヴァーバーグ　中村保男＋大谷豪見＝訳　四二〇円

ザ・ベスト・オブ・サキ
サキ　中西秀男＝訳　五二〇円

解放された世界
H・G・ウエルズ　水嶋正路＝訳　三四〇円

神々のような人びと
H・G・ウエルズ　水嶋正路＝訳　四二〇円

ザ・ベスト・オブ・H・G・ウエルズ
H・G・ウエルズ　浜野輝＝編訳　五六〇円

旅に出る時ほほえみを
ナターリヤ・ソコローワ　草鹿外吉＝訳　二八〇円

猿とエッセンス
オルダス・ハックスリイ　中西秀男＝訳　三二〇円

口に出せない習慣、奇妙な行為
ドナルド・バーセルミ　山崎勉＋邦高忠二＝訳　三二〇円

罪深き愉しみ
ドナルド・バーセルミ　山崎勉＋中村邦生＝訳　三六〇円

失われた部屋
F＝J・オブライエン　大瀧啓裕＝訳　三八〇円

クローン
リチャード・カウパー　鈴木晶＝訳　三八〇円

大洪水伝説
リチャード・カウパー　久保智洋＝訳　四六〇円

馬的思考
アルフレッド・ジャリ　伊東守男＝訳　二八〇円

天国の顔〈タルタロスの世界Ⅰ〉
B・M・ステイブルフォード　島岡潤平＝訳　三六〇円

地獄の幻影〈タルタロスの世界Ⅱ〉
B・M・ステイブルフォード　島岡潤平＝訳　三八〇円

無限の煌き〈タルタロスの世界Ⅲ〉
B・M・ステイブルフォード　島岡潤平＝訳　三八〇円

ハルシオン・ローレライ
B・M・ステイブルフォード　島岡潤平＝訳　四〇〇円

ラプソディ・イン・ブラック
B・M・ステイブルフォード　島岡潤平＝訳　四〇〇円

ムーンスター・オデッセイ
デイヴィッド・ジェロルド　小隅黎＋松本薫＝訳　三八〇円

バロック協奏曲
アレッホ・カルペンティエール　鼓直＝訳　二八〇円

334
トマス・M・ディッシュ　増田まもる＝訳　五六〇円

歌の翼に
トマス・M・ディッシュ　友枝康子＝訳　六四〇円

ウルフヘッド
チャールズ・L・ハーネス　秦新二＝訳　四二〇円

時は準宝石の螺旋のように
S・R・ディレーニ　伊藤典夫＝訳　五六〇円

エンパイア・スター
S・R・ディレーニ　米村秀雄＝訳　三二〇円

アプターの宝石
S・R・ディレーニ　下浦康邦＝訳　四六〇円

五月革命'86
ジャック・ステルンベール　田村源二＝訳　四四〇円

緑色遺伝子
ピーター・ディキンスン　大瀧啓裕＝訳　三八〇円

キングとジョーカー
ピーター・ディキンスン　斎藤数衛＝訳　四二〇円

生ける屍
ピーター・ディキンスン　神鳥統夫＝訳　四二〇円

ナボコフの一ダース
ウラジミール・ナボコフ　中西秀男＝訳　三八〇円

枯草熱
スタニスワフ・レム　吉上昭三＋沼野充義＝訳　三四〇円

楽園の崩壊
ジョーン・D・ヴィンジ　小隅黎＋佐治弓子＝訳　三八〇円

蛾
ロザリンド・アッシュ　工藤政司＝訳　四四〇円

嵐の通夜
ロザリンド・アッシュ　工藤政司＝訳　四六〇円

暗黒のすべての色〈ダーゼック・シリーズ〉
ロイド・ビッグルJr.　新津一義＝訳　四八〇円

暗黒の監視人〈ダーゼック・シリーズ〉
ロイド・ビッグルJr.　新津一義＝訳　四六〇円

この暗黒化する宇宙〈ダーゼック・シリーズ〉
ロイド・ビッグルJr.　新津一義＝訳　五二〇円

ラーオ博士のサーカス
チャールズ・G・フィニー　中西秀男＝訳　三二〇円

新しいSF
ラングドン・ジョーンズ編　野口幸夫＝訳　五八〇円

レンズの眼
ラングドン・ジョーンズ　増田まもる他＝訳　四〇〇円

飛行する少年
ディディエ・マルタン　村上香住子＝訳　四四〇円

不安定な時間
ミシェル・ジュリ　鈴木晶＝訳　四六〇円

熱い太陽、深海魚
ミシェル・ジュリ　松浦寿輝＝訳　四二〇円

迷宮の神
コリン・ウィルスン　大瀧啓裕＝訳　五八〇円

ラスプーチン
コリン・ウィルスン　大瀧啓裕＝訳　四二〇円

影のジャック
ロジャー・ゼラズニイ　荒俣宏＝訳　四〇〇円

わが名はレジオン
ロジャー・ゼラズニイ　中俣真知子＝訳　四六〇円

ロードマークス
ロジャー・ゼラズニイ　遠山峻征＝訳　四〇〇円

コンピュータ・コネクション
アルフレッド・ベスター　野口幸夫＝訳　四六〇円

バドティーズ大先生のラブ・コーラス
W・コッツウィンクル　[illegible]＝訳　[illegible]円

愛しき人類
P・キュルヴァル　蒲田耕二＝訳　四八〇円

アルクトゥールスへの旅
デイヴィッド・リンゼイ　中村保男＋中村正明＝訳　五八〇円

憑かれた女
デイヴィッド・リンゼイ　中村保男＝訳　四八〇円

伝授者
クリストファー・プリースト　鈴木博＝訳　四八〇円

灰と星〈オメガ・ポイント三部作〉
G・ゼブロウスキー　正田晴久＝訳　三六〇円

ブロントメク！
マイクル・コニイ　遠山峻征＝訳　六二〇円

ハローサマー、グッドバイ
マイクル・コニイ　千葉薫＝訳　四二〇円

冬の子供たち
マイクル・コニイ　関口幸男＝訳　四四〇円

カリスマ
マイクル・コニイ　那岐大＝訳　四六〇円

猫城記
老舎　稲葉昭二＝訳　四〇〇円

手で育てられた少年
B・オールディス　石原武＝訳　三六〇円

ビアドのローマの女たち
アンソニイ・バージェス　大社淑子＝訳　三八〇円

アバ、アバ
アンソニイ・バージェス　大社淑子＝訳　四八〇円

どこまで行けばお茶の時間
アンソニイ・バージェス　内藤理恵子＋吉田映子＝訳　二八〇円

殉教者聖ペテロの会
ジョン・ソール　大瀧啓裕＝訳　六四〇円

どこからなりとも月にひとつの卵
M・セントクレア　野口幸夫＝訳　五六〇円

コスミック・レイプ
シオドア・スタージョン　鈴木晶＝訳　四〇〇円

パステル都市
M・ジョン・ハリスン　大和田始＝訳　三八〇円

二重の影
フレデリック・ターナー　大瀧啓裕＝訳　四四〇円

この狂乱するサーカス
ピエール・プロ　篠原義近＝訳　五二〇円

深き森は悪魔のにおい
キリル・ボンフィリオリ　藤真沙＝訳　三六〇円

愛の渇き
アンナ・カヴァン　大谷真理子＝訳　四二〇円

メデューサの子ら
ボブ・ショウ　菊地秀行＝訳　三四〇円

去りにし日々、今ひとたびの幻
ボブ・ショウ　蒼馬一彰＝訳　三四〇円

スリランカから世界を眺めて
アーサー・C・クラーク　小隅黎＝訳　四八〇円

夢幻会社
J・G・バラード　増田まもる＝訳　四二〇円